
救部 きゅーぶ！

鳴月 常夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救部 きゅーぶ！

【Nコード】

N6104H

【作者名】

鳴月 常夜

【あらすじ】

救部とは、他の部活を助けるといったことを中心に活動する部活動である。主人公、鳴川春希は、この部活に所属し仲間達と過ごしていく。他の部活の大切な夢、信念、心などに触れ、成長していく・・・？

プロローグ（前書き）

どうもすいません。新作です。

がんばって更新してほったらかしにしないよう

がんばります。皆さん応援よろしく願いします・・・

プロローグ

この学校の初代校長の考えはすごいものだと思う。

だって、高校になって 勉強く部活 なんだから。しかも、その考えが今もお続いているなんて……。

でも本当にすごいのはどんな部活もアリってところかな？

普通は野球、サッカーなんだけど……この学校にはよくわかんない部活が多いんだよ！

まあ、部活設立届を出せばなんだってOKだからね……

そんなこと言ってる僕もよくわかんない部に所属してるし。

……え？なんていう部だって？それは 『救部』！

1話 救部とは

ああ、真っ暗だ。ここはどこだ？あたり一面が真っ暗。ただ純粹な黒。

え？純粹な黒ってどんな色？そりゃあ……黒だろ。

ところで何で真っ暗？誰か電気つけてくれい。

もしかして俺の未来！？お先真っ暗ってやつですか！？いやいや、俺には夢があるんだよ、美人でもなくていいから気の利く奥さんとわんぱくな子供と一戸建てに住むって言う平凡な日常をだな、思い続けているんだけど。といつてもまだ俺は高校生だし、

遠い未来の話かもしれないけどな。高校生活も平凡に生きてみたいものだな。

非日常的なんて……。『お……る』俺やつはこの空間で生きます。

『き……るー！』ああ、引き戻されるう……………

「起きろ春っ！」

「んあ……………？」

目を開けるとそこは見慣れた部屋。

長机がいくつかと、パイプ椅子が5、6席……

まあ、会議室を思い浮かべてくれればいいだろう。

「春、寝てないでさっさと行くぞ！」

彼女は腕を組みながらそういった。そう、俺の前で仁王立ちしているのは霧谷 小冬、この部の部長である。

「え……と、どこ行くんですしたっけ？」

ようやく身体を起こし、小冬と向き合う。

「何を言っている、剣道部へ行くんだろっが。」

そういえばそんなことも言ってた気がする。

「とりあえずっ、行くぞ！愁兎はもう先に行ったぞ！」

そういつてぐいぐいと袖を引つ張りながら進んでいく小冬。

「わわ、分かりましたから！ちよちよ、引つ張らないでください〜」
袖を引つ張られつつも廊下に出た。

コツ、コツコツ……

前を歩く小冬の姿整は美しいものだ。モデルのように歩いている。

背筋は伸びてるし、頭も動いていない。

長い黒髪が歩きたびにさらっ と揺れる。

彼女、霧谷小冬は、『救部』の部長である。ちなみに僕も救部所属である。

彼女は、容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群といった神の子である。

こんな彼女は告白されっぱなし。きりつとした瞳がイイだとか、スタイルが完璧なのだ、とかそんなこんなな理由で。

もちろん彼女は、全員振った。

「私を好きになる資格があるのは私を超えた者にしかない！」

とかいって。すいません。誰も超えられません。ハードル阿呆みたいに高いです。

でもそんなこと言えるのは、自分が完璧だと確信しているから。

確かに完璧なので誰も何もいえないのだが……

おっと話が脱線した。んで、何でこの部活を作ったかという理由は、
は、

面白いから、だそうです。

それ理由になつてんの

？と突っ込みを入れたかった。

なに考えてるか分からんよ。天才さんは、いや、天災さんか？

そういえばこんな長々とモノローグを語っている僕は、

なるかわ 鳴川 はるき 春希。みんなからは、ハル 春って呼ばれている。

それと

「ついでぞ。」

いつまでも語り続けていたせい、いつの間にか剣道場についていた。

「早いですね。いつのまに部活棟に入ってたんですか……」

折角、僕が我が部の存在理由を説明しようと思っていたのに。」

「そんなものは私が説明する！」

ビシッと人差し指を立てて決めポーズ。いいから早くしてください。

「説明しよう！『救部』とは！私、霧谷 小冬を部長とする全部員五人で

結成されている部だ！この部の存在理由はたった一つ！他の腐った部活を

鍛えなおすこと！腐った心を叩き直すことだっ！以上！」

はーはー、と肩で息をしている小冬部長。

「つまり部活を助ける部活ってところですよね？」

「そ、……そうだっ」

「部長、水飲みますか？水道ありますよここ。」

「い、いらんう……」

死に死にだが少ししたら元に戻るだろう？

「つつことは、今回はこの剣道部が……」

「そうだ。ここが相手だ。」

締め切られている剣道場の中からは、人の気配がしなかった……。

2話 武士の力

ガララララッ！

「たのもー！」

剣道場の戸を勢いよく開ける小冬。

掃除をしていないのか、戸には埃が積もっている。

「ちよつと、部長。道場破りじゃないんですから。」

「ん？こうした方がなんかかつこよくないか？」

この人は何を基準に動いているのか分からない。

それにしても………人いないんじゃないか………？

いた。目の前に剣道道具一式をつけ、立っているものが。

面の中の顔が分からない。

妙な雰囲気纏っている。

「ふう！道場破りか！こいやーこいやー！」

一発で分かった。愁兔だ。

「なに遊んでんだよ、愁兔。」

愁兔と呼ばれた彼は、面を取り外した。

「おつ、姉貴と春。早かったな」

面の下から出てきたのはさわやかなイケメン。霧谷きりや 愁兔しゅうと。

微妙に茶髪のところポイント！…らしい。

ちなみに霧谷 小冬部長とは、双子の姉弟だ。言うまでも無いが。

「愁兔、私の言った仕事は終えたのか？」

小冬が一步詰め寄る。身長は愁兔のほうが大きい、気圧されている。

「い、いや……あのね？剣道道具一式がロッカーに入ってる……」

んで、かつこいいな〜とか思ってたらしいの間にか着けて……」

なんですかそれ？呪われた道具なんですか？

姉と違って弟は仕事をしない。というか阿呆だ。

運動神経はいいんだけどね。姉弟ってバランス取れるようにできてるのかなあ？

「そういうことを聞いているんじゃない。どうなっている!?!」

確か愁兔の仕事は、この部活の部員を集めてくることだったか……

「……………」

辺りを見回す。俺ら以外は誰もいないが……

「いや、みんな集まってるかな」とか思ったけど、この部活

予想外にやる気無いみたいで……」

「だから私は集めるといったのだ! 与えられた仕事をしっかりしろ

!」

雷が落ちた。

「わーわー! 避雷針~~~~」

落ちたんだが……愁兔はこんなことを言いつつ、竹刀を高々と上に上げる。

本当に阿呆だ。

「ちっ、仕方ない。春、剣道部員をここに集める、ほら、部員表だ。

」

流石部長、表まで作ってるなんて。

「んー、やっぱり僕に回ってくるんじゃないですか。」

最初から僕に頼んでくれれば……………二度手間だよな。

とか思いつつも靴を履く。

「行く必要は無いのです。」

スツ、と通る声が耳に入った。

振り向くと剣道場の入り口には1人の少女。

ちゃんと切りそろえられた髪型。その藍色の髪の毛には誰もが釘付けになるだろう。

外見はいい。外見は。

「その微茶髪馬鹿が仕事をしないから、私が代わりにこの

糞剣道部の馬鹿どもを連れてきてやったのです。」

皆さんお分かりだろうか? この子は口が悪い。

馬鹿2回に糞一回。この会話の中で。

「うむ。ご苦労、水原^{みなはら} 闇音^{やみね}。やはり愁兎には

お前をつけておくべきだな。」

「部長のせいで私だけ働いてます。こんなゾウリムシ程度の男と組むくらいなら

一人でやるほうが1億倍効率いいです。」

「ゾ、ゾウリムシ程度って……………」

愁兎はうなだれる。それは剣道装備一式つけていることによりより不気味に。

「さ、とつと入りなさい。剣道部のクズさん」

クズにさんをつけるのはおかしいと思うが……………。

ゾロゾロと入ってくる剣道部員。中には金髪の輩もいた。

「ふん。ちゃらちゃらしよって……………だから部活が腐るんだろうがあ！」

部長の咆哮。一同がひるむ。

「ど、どうでもいいだろ！勝手にひとの部活に口出ししてんじゃねえよ！」

金髪の部員が火口を切った。

「ふっ、馬鹿者が！依頼ならあつたぞ！その……………武士からな！」

部長の指差す先にはボウズの生徒。いつからそこにいたのか？

座禅を組んでいる。

「な、風景と同化してた!？」

スツ と武士が目を開いた瞬間。

そこだけがタイムスリップしたかのような感覚になる。

「自分は、剣道部部长。長武^{ながぶ} 士幸^{しゆき}。」

あ、本当に武士なんですか……………。

3話 改正か

「ただの時代遅れの馬鹿ですな。」

それが水原の第一声。舌先刃物だ……

「ふっ……確かにそうかもしれんな。熱く燃え上がることなんて古い考えなのかも知れんな……」

フツ、と武士が目を閉じようとした瞬間

「軟弱者があ！」

小冬部長の右トルネードストレート(?)が顎を貫いた。

「アゴツ、」

白目をむいて倒れる武士。あ、目が……

「お前が私たちに依頼したのだろう!?!お前が弱気でどうする!

お前の心の強さでっ!……この部活を立て直すんじゃなかったのか!!!」

ちよつとタイム部長。めっちゃいいこと言ってるけど

武士気絶してますから……聞こえてませんけど……

「どっせーいっ!」

愁兎の声が剣道部ロッカーから聞こえてきた。

次の瞬間。剣道道具一式が投げ出された。

ガチャガシヨガシユン……

「ああっ!てめえ何しやがんだ!」

金髪が怒鳴る。

「やはりな……」

部長が低く言った。

「やっぱりお前ら。剣道好きなんだろ」

「な、ん、なわけねえだろうが……!」

「じゃあ! じゃあ何故お前は放り出された道具に反応した?」

悪役風に口の端を吊り上げる部長。

ここからは部長のターンだろう。

ドローはしないが。

「剣道。やりたいんだろう？好きなんだろう？」

「そ、そんな……わけ。」

金髪が言いよどむ。

後ろに控えているそのほかの剣道部員も、下を向いている。

「お、俺には才能がねえんだよ！」

瞳が揺れている。

「何をしようが中途半端。試合にも勝てない。しまいには親にさえ

やめろといわれる始末。どうしろってんだよ！」

結果には理由がある。何も理由が無いのに行動を起こすものなどない。

理由を変えられるのなら。支えるのなら。

どんな結果にだってなる。

「才能が無いなんてものは無いっ！」

ぶ、武士が生き返った……

これは蘇りし最強の武士と名づけるべきか……

「才能？そんなものなど存在しない！そんなものに悩むのなら練習

をしる！」

己の道を探し出し！進んでこそだ！」

武士の目つきは鋭く、そして真剣なものであった。

夕日が剣道場内を照らす……

「俺は………待っているからな。いつまでも。」

これ以上救部が関与することも無いと思い、俺たちは部室を後にした。

「ああ、折角の部長の手柄があのお古き日の遺産に取られてしまいました。」

「水原。それ誰のこと言ってるんだ？」

小さい突っ込みはさておき。なんだかすがすがしい気分だ。

「そう。これでよかったんだ。部長の私としては満足だ。」

いつになくうれしそうに部長だった。

「お人好しは早死にします。」

キツイ言葉だな。場の空気が一気に下がった気がする。

「はは、水原はよく姉貴に言えるなあ。」

何故か竹刀を持っている愁鬼。後で返してこさせよう。

「うるさいゾウリムシ。少しは働けこのグズがー」と鳴川　春希が

言っていました。」

「言ってるねえけどな！」

「とりあえず今回何もしてなかった鳴川　春希にタバスコを飲ませ

ようと思います。」

「やめい！」

さっ　と水原はタバスコを取り出す。

「しかも常備してんのかよ！」

1番の悪役はコイツではないかと疑った。

「そっぴーさ、姉貴。あいつ来てないの？」

あいつか……………、来てなかったなそっぴーさ。

「今回はシカトさせてもらった。馬鹿だから。」

馬鹿だからシカトですか。世の中も冷たくなたモンですね。

まあ、確かにあの雰囲気であいつがいたら……………間違いなく場壊しだな。

「にゃ……………が……………とう！」

ダダダダダダ、と奇声(たぶん違っ)とともに走り迫ってくるあいつは……………

「来たか。」

「来たなあ。」

「来ましたね、馬鹿が。」

「……………」

それぞれが言葉を発するも、俺は何もいえないでいた。そして変人？登場。

「みんなひどくないか!?この僕をほうっておくなんて!」いきなりあらわれてのこのテンション。

ピシユン!

「いぎやああああ!目ガツ!めがああつ!!」

赤い液が変人?の目の中に入った。

振り向くと、スポイトを持った水原がいた。

「変人さんは嫌いなのです。というか変態さんですあなたは。」

私の半径10000000000km以内に入らないください。

「

もともと男子を嫌っている水原だ。変態は何かしでかしたんだろう。

「ふはっ、ふははっ!ふははははははあ!この須川すがわ 竜児りゅうじ、

タバスコ弾ごときに負けるわけがなからう!」

目を真っ赤に染めながらギリギリと水原に詰め寄る。

「うっ……くっらえっ」

ピシユン、ピューー

「ふはは！ヒイ　　ハア　　！」

詰め寄るスピードはまったく変わらない。

「どうしてやるうかなあ、コイツ……ククククク、うまそうだ……」
手を忙しなくかつ、いやらしく動かしながら迫る迫る迫る！

間違いなく危ない！こいつの変態レベルに換算すれば果てしなく危ない！

描写できるものがなくなってしまっ！というか打ち切りだよこの野郎！

「救部をつ………汚すなあっ！」

部長の3段旋風脚（部長はハリケーンと呼んでる）が須川にもろヒツトした。

「ぎゃあああああああ！バ　スー！」

ことごとくぎりぎりのワード出すなあ………コイツ。

破滅の言葉かよ。

「部長、こいつ死んだんじゃないですか？バ　スとか言ってたし……」

……

「何を言っている。バ　スといたからって死ぬわけじゃないぞ、城が壊れるんだ。」

「OUIです部長。自重してください。」

「む、流石にここまでアウトか。」

ふと奴を見るとタバスコのせいで目から血を流しているかのように見えた。

「カオスだ………」

いや、実際流していたのかもしれない。

これが救部の部員最後の1人

須川竜児だ。

4話 恐怖心

ただ、ただただ、彼は暗闇の中を走っていた。

「はっ、はっ、はあっ……………」

どういうことだ。おかしい、絶対におかしい。

走っても走っても廊下はどこまででも続いている。

終わりが見えないのだ。

ループしている。そう知った時はもう遅かった。

追ってくるのだ。奴が。

「俺がっ……………はあっ、はあっ！……………つく、何したって言うんだよ！」

ササササササササ、と奇妙な音を立てて。走ってくる。

点々と血の後が続いている。さつきとは違う？

ループしていない？やっとなげ出せる。そう思った。

が、最悪なものが転がっていた。

血だらけの

霧谷 愁兔が。

「なっ……………。愁兔！おい！」

抱きかかえ、名を呼ぶ。

返事は無い。

「どうしたってんだよ！アイツか！今追ってきているアイツなのか！？」

「がふっ……………は……………ハル……………」

血を吹き出しながらも自分の名を呼んでくる。

「しゃべったら駄目だ！」

「アイツは……………人じゃあ……………ない。」

がくっ……………と腕の中でうなだれた。

「な……………なんだよそれ……………」

ガサッ……………ザザザザザッ……………

「ニ、ニゲラレ、ナイ、ヨオ、……オオオオオオオ！」
「うわあああああつ！」

ブシユツ……………

断末魔と何かが吹き出る音のみが夜の学校にこだました……………

「はいカット　　！」

威勢のいい小冬部長がカチンコを鳴らして叫んだ。

「ふう……………」

「うわぁ…………制服がケチャップまみれなんだけど……………」
あたりにはケチャップが散乱している。

どうして　血〓ケチャップ　なのか……………

「部長まで僕を!？」
叫ぶ須川は置いて、何故今、撮影をしているかというところ、それは昨日の話。

「依頼箱についに依頼が来たぞ！」

部長が子供のようにはしゃぎ、目をきらめかせていた。

ちなみに依頼箱というのは、依頼を書いて入れると救部が遂行してくれるといった

そのまんまの箱、想像どおりだったであろうの箱。

生徒会で言えば意見箱みたいなものだ。

大体入っているのは冷やかしの手紙、またはゴミだった。

そんなものが入っているたびに部長は放送室を占領して校内放送でブチ切れる。

そんなことしようが犯人は、割り出せないものであって、いたずらは止まなかったが、

ついに来たのだという。依頼が。

「おお！ついに来たのか姉貴！何の依頼だ!？」

「さて、今読むから！」

『救部の皆さん、いきなりの手紙ですいません。お願いがあるので

す。

私たちは、映画部の者ですが、このたび映画コンクールに出場することに

なりました。ですが……………映画部全員が、インフルエンザに感染してしまったのです！

演劇部とも一緒に活動していたのでそちらもダウン……………

そこでお願いです！私たちに代わって映画を撮ってくれないでしようか！

お手紙ですいませんが、よろしくお願いします！』

「とうかいつのまにインフルエンザが回ってたんだ？知ってたか姉貴？」

「馬鹿は風邪を引かないといえますから。何で引かないか知ってますか？

風邪菌さんがアホらしくてやってられないといって仕事放棄するからなんですよ。」

「水原、多分違うと思う。そんなことより部長、撮影道具とかあるんですか？

後台本とか……………」

「それらは心配ないそうだ。撮影道具は心配要らない。でも台本は……………無理らしい。」

どーすんだよ。という空気が立ち込める。

誰も映画なんて撮ったことが無い。というか台本なんて書いたことも無い。

部長に任せれば多分……………じゃなくて絶対完成させてくれると思うが……………

「僕がやるよ！僕は毎年コミケで小説を出してるんだ！だから文章を書く能力はあると思うよ！」

「コミケという響きが気に入らない。お前は却下。」

冷たく突き放された須川。ドンマイすぎる。

「仕方ないですね。私がやります、余裕です。」

「水原……台本書けんの？」

驚きのあまりの質問。なんか似合わなかった。

「大丈夫です。これはコンクール最優秀賞絶対取れます。」

そういった水原の自信のもとに、依頼を引き受けたのであった。

そして台本の内容は『恐怖！学校の十戒』だった。

台本のネーミングセンスは置いといて、中身は結構、請ったものであった。

「さあ、次行くぞおー！ー！」

部長はノリノリだった。

4話 恐怖心 (後書き)

今回は騙しっ!でしたが……そんな高等テクニクは
所持してなくて、まあ楽しくできたと思います。

鳴月 常夜のその他の作品もよろしくお願いします!

Ordinary daily life

<http://ncode.syosetu.com/n5847g/>

5話 優秀な

おかしかった。絶対に。

今、夜の学校には、自分以外に誰もいるはずか無いのに。
なのに。どうして悲鳴が聞こえる？

うわあああああつ！

確かに聞こえた。それも、よく知った人の声で。

僕はただ立ち尽くしていた。三階の階段の踊り場で。

「ハル君……じゃないよな。絶対違う……」
自分に言い聞かせていた。

それでもしないと 平静を保っていらなかったから。

「やめてくれよ……冗談じゃない。」

そっぴいっぴも声のした方向へと向かう。

眞実を確かめに。

いた。そこには確かにいた。

死……体……となつた鳴川 春希が。

「なんだって……どういふことだよおおおおお！」
後ずさりした時。何かを踏んだ。

ぐに、

「うっ、うっ……」

声にならない。何かはすぐに判断できた。

「し、愁兎……君！」

「オ、オオオオ。オマエガ、コロシタ？」

頭の中に流れ込んでくる。

「そう、僕が……？ああ……？」

早送りにしたような映像が流れ込んでくる。

自分視点で 2人を殺す場面が。

「ち、ちがうつ、僕じゃない……！違う……！」

頭がガンガンする。視界が揺らぐ。

「ぼ、ぼくっ……ちが……っ！うっ……！」

頭を抱えしやがみこむ。

再び立ち上がりよろよろと壁にもたれかかる。

「うう……っ！……僕か。」

それは乾いた声で。確信したように。

「ふふっ……くくく……あっははは！あははははははは……！」

上体を反らし、甲高く、狂ったように叫ぶ。

「僕だよ、僕か、僕だった！」

あっはっはあああ！

そう言いながら駆け出す。下へ向かうのではなく上へと。

階段を2段飛ばしで駆け上がる。

乾いた声で笑いつつ。

バァン！

屋上の扉を叩くようにあける。

「ふふ……」。 「

屋上には月が出ていた。それは赫く、赫く。
見るものを狂わせるような宝石のよう。
そして彼は、飛んだ。
屋上から地へ向けて飛んだ。
そうしたのは、狂った彼なのか。それとも
本当の彼が自分自身を止めるためにか……………。

「いよし！カットオ
！」
響き渡る小冬部長の声。

「よくやりましたね、変態さん。これからは、私の半径100000
00000km以上に
入ることを許可します。」

水原は真面目な顔で。

「マジやばいって！ぼく本当に死ぬかと思った……………3階のベランダに

降りれてなかったら……」

ブルブル、と身体を震わせる。

いつの間に戻ってきたのだろう。すぐ隣にいた。

「しかしなんだって、この部の男どもは演技がうまいのかね。」

俺と愁兎は顔を見合わせるが、竜児は、

「僕は、毎年とあるグループで演劇をやったりするから！」

と、なんだか変なものを漂わせる雰囲気と言った。

とあるグループ、ねえ？

「とりあえずこれで全部撮り終ったのか？」

水原に尋ねる。

「そうです。終わりました。後はこの映像をつなぎ合わせれば、完成です。」

私は、機械とかはそんな使えないほうなので、誰かがやってくれると助かります。」

「それなら、須川がやればいいたろう。コミケやらに行っているのであれば」

機械とかは使えるのではないのか？……関係なかったりするか？」

部長が知らない空間に戸惑っている。

何でもこなせる人だが、できる限り部員にやってもらいたいらしい。自分だけが何かをするのではないということ。

「甘いすな、部長。」

「なに？もつとすごいことができるというのか？」

「逆です。パソコンは使ったことあるけど、アニメ見るぐらいだし

！」

……。

とりあえず自慢することではない。

「超使えないです。」

ぞくっ と言。

「そんなことだろうと思った。」
予想通りだ、というように部長が言った。

結果発表をします。

アナウンスの音がホールいっぱい広がる。
映画コンクールの会場だ。

ここで、最優秀賞作品が発表される。

「お、おい……ハル！どうなると思う！？」

「そんなこと俺にわからないよ。」

「私がついた台本です。決まっています。」

「ぼ、僕の演技力……」

「お前ら静かにしろー！そろそろ発表されるぞー！」
シン、と会場が静まり返る。

数秒たったあと、ドラムロールが鳴り

ドゥルルルルルルルルル

最優秀賞！『恐怖！学校の十戒』！

「やつ…………た。」

「うおおおお！姉貴！これ夢じゃないよな！」

「うむ、私が監督を務めたからだな」

「僕の演技力ー！」

「私の台本のよさに決まっています。」

題名は、何の捻りもなかったのですが、内容がすばらしいといった点、

そして編集の仕方、撮影の仕方などがよかったです。

「な、なにを…………題名はシンプルだからこそいいのです。」

「まあまあ水原、とりあえずこれでよかった。」

「鳴川 春希。何も分かっていますね。私がこれから台本の極意を…………」

後ろから変なオーラが…………

「じゃあ、代わりに僕が教えてもらいましょう！水原の家で！じっくりー！」

目が危ないよ、目が。

竜児が立ち上がって水原の手をとっていた。

「私に障ることは万死に値します！」

「漢字間違っつてな、ぎいいいいいいい！」

ゼロ距離射撃だった。

「お前達うるさいぞっ！！！」

部長の咆哮でドタバタは止まった。

そしてその次の日には

お礼の手紙が来た。

6話 次の依頼

放課後、いつものごとく部室へと向かう。

廊下ですれ違う人々は、ユニフォームを着たもの、柔道着を着たものの、

スケッチブックを持ったもの、メイド服を着たもの……などがある。……？ちよつと待て、おかしいぞ、変なものが混ざってた気がする！振り返って見るが、そこにはもうメイドらしきものはいなかった。

「幻覚………かな？」

確かにいた気がするのだけれども……まあ、そんな気にするようなことでもないだろう。

竜児だつたら真つ先にカメラを構えているだろうが。

中庭には、桜が咲き誇っている。

その下では復活したらしい演劇部員と、映画部員の人たちが演出を始めていた。

「救部の皆さんは最高のものを作った！私たちも負けていられないよ！」

「分かってますとも映画部部长！私も演劇に力を上げますわっ！」
かなり気合いが入っていた。

活気が戻ったのはいいことだろう。良い事をしたのだと思う。

こつちの視線に気がついたのか、映画部部长が手を振ってくる。

「おうっ！鳴川君だよ、この間はありがとうー。ナイス演技だったよ！」

ちなみに僕は今3階にいる。窓から中庭を覗く形になっている。そんなだから、映画部部长は声を張り上げている。

「あ、うん。こちらこそ頼ってくれてありがとうー！」

声を張らなくても会話は可能なのだが、なんとなく大きくなる。

「また倒れた時はよろしくねー！」

僕はその返答に、軽く手を振って答えた。

救部の部室は、3階の文化部部室棟というところにある。

この学校は、かなり大きいのだ。だからこそ新しく部活を作っても、部室に困ることは無い。

校舎は横に4つ並んでおり、それぞれ文化部部室棟、特別教室棟、教員棟、

そして教室棟となっている。

我らが救部があるのが文化部部室棟。

理科室や、家庭科室などがあるのは特別教室棟。

教員棟には、3年生の教室と、職員室がある。ちなみに校長室も教員棟にある。

最後に教室棟とは、その名の通り、僕らが普段暮らしている教室がある。

「うおー！ーい！ハルっ！」

ドドドドドド、と迫ってくるのは霧谷 愁兔。

いつものようにさわやかスマイル＋茶髪である。

「愁兔か。今日は居残りはなかったの？」

「なかつたぜ！姉貴に宿題写させてもらったからな！」

姉貴とは、霧谷 小冬のことである。

容姿端麗、頭脳成績、そして何でもこなせるといったパーフェクト超人。

背も高く、モデル体型である彼女は、救部部长なのである。

男子からの人気は絶大で、校内美少女ランキング1位らしい。

(これは表向きに発表されているものではない)

「っていつかそれ小冬部長に頼ってるだけじゃん！」

「いやあ、マジで姉貴がいてよかったわ。宿題なんて意味をなさねえからな。」

「それは多分、愁兔限定でしか使えない言葉だと思う。」

そんなくだらない会話をしていたら、いつの間にか部室についていた。

ガチャ

「よーっす！」

「おっす。」

2人で元気よく挨拶をして部室内へ。

いつ見ても会議室そのものの部室。

長机がいくつかと、パイプ椅子が数脚。

部屋の端には水原がいて、パイプ椅子に座っている。

一方、部屋の真ん中には須川がパイプ椅子に座り、小説(?)らしき物を読んでいた。

会話をしていた気配はまったくなかった。

それはそうだろう。なぜなら水原は須川を嫌っているからである。

「助かりました。危うく変態生物との空気に汚染されるところでした。」

水原が無表情のままいった。

この子は黙っていれば、人形のような可愛さを持っているというのに、

口を開いたら毒のある言葉が飛び出す。

「ふへっ、ふへへへへ………」

急に不気味な笑い声が部室内に響いた。

水原の言う変態だ。これは変態の声だ。

「気持ち悪いです。小説を読んでニヤニヤしている人間なんて死ねばいいのです。」

「何を言うか！文句を言うのはこの小説を読んだからにしろっ！」
変態「須川竜児 が立ち上り言った。

片手には小説。しかしブックカバーがついている。KAWAKAMI ISYOTENと書かれている。

「どこの書店だよそれ……」

俺の突込みを軽く流し、水原はその本をとる。

「……ウミニヤ文庫……？なんですかこれ？聞いたことありません。」

「いいから読んでみるって！マジ面白いから！」

水原は、適当なページを開き、声に出して読んだ。
もちろん棒読みで。

「おれのめは、あおいろなんだ。なぜかって？そんなものしらねえよ。」

おれのおんなにふれたらころすぞ。うつびょうみたいだって？

そうですおれはうつびょうなんです………」

急に水原が読むのをやめる。ここまで読んだのが不思議なくらいの意味不明な物語だ。

どうした？ と水原の持っている小説を覗き込む愁兎。

「何故に濡れ場……？」

小さく言った。

「面白いだろ！？」

馬鹿みたいに竜児は叫ぶ。

いや、濡れ場てなんだよ……あの文からどういったらそうなるんだよ！

「こんな小説はこの世から抹消すべきです。とりあえずこの手にあるものから」

そういつて水原は容赦なく、窓の外へ放り投げる。

それは、弧を描いて焼却炉の中へと収まった。

「イヤアアア！僕の小説があ！」

これこそ変態みたいに喚きだす。迷惑極まりない。

「ちよ、竜児は落ち着いて！つてあぶなっ、物を投げるな！

というか水原！この状況絶対楽しんでんだろ！」

水原は、長机を横に倒して、盾を作っていた。

「空襲です。いろんなものが飛んできます。」

そう言いながらもタバスコをぴゅんぴゅん飛ばしてくる。

「やめい！制服が変な色になるだろうが！愁兎は竜児止めてー！」

「おっけい！竜野朗まってるよ！」

散々な状態。何故にこんなことになっているのか。

それは、部長がいないからだろう。

まとめ役が不足するこの状態で俺はここまでしかできない……

すいません部長。部室がやばいことになってます……

今日は遅くなってしまった。日直だったからだ。

教室を掃除していたらこんなにも遅くなるのか。

教室にはもう誰もいなかった。

みんなはもう部室にいるだろうか？

いるだろう。私も部長なのだから早く行かないといけない。

と、依頼箱が目に入った。

「一応……確認しておくか。」

木で作られた小さな箱の裏側。そこに取り出し口がある。

かさ、と紙のすれる音がした。

一枚。紙が入っている。

『放送部』 そう書かれた手紙だった。

「依頼……第二号だ！」

手紙を片手に走っていた。部室へと向かって。部室のドアを勢いよく開ける。

バキッ、

「おーい！依頼第二号が来たぞっ！……あれ？」

そこには目を押さえてのた打ち回る須川。

黒い笑みを浮かべている水原。

そしてドア付近に倒れている2人。

どうやら自分がドアを開けたときに一緒に飛ばしたのかもしれない。

まあ、そんなことはいいだろう！

「みんな！依頼第二号！次は放送部からだっ！」

そんな声が部室内に響いた。

「ど、どうでもよくない……よ。」

そこで俺の視界は黒く塗りつぶされた。

7話 ON AIR

意識が戻った後すぐに聞かされた話。

放送部からの依頼の内容は、放送を一日持つてくれ、というものであった。

いつも放送部は、昼休みにラジオトークをしていて、それを代わってくれという話だった。

「とうかなんで、そんな面倒くさいことを……」

長机にもたれかかれながら、ニコニコしている部長に問いかける。本当にうれしそうだ。確かに立て続けに依頼が来てるもんな。

「面倒くさいことなんて無いぞ？ ラジオトークって面白そうじゃないか」

ニコニコ顔のまま答える。

「んでも、姉貴。台本とかどうするんだ？ また水原に作ってもらうのか？」

愁兎がシップを貼ったおでこをさすりながら言った。

すると、部長はチツチツと指を振って答えた。

「今回は……アドリブ全開で行こう！ 放送事故？ そんなものは知らん！」

気合いで何とかしろ！ みんな、ミスするなよ。」

何故にプレッシャーを与えたのか今の僕には理解できない。

いや、いつもの僕でも理解できない。

「とりあえず、明日の昼だからな！ 一発ギャグでも作っておけよ！」

そう言い残して、部室から出て行った。

部室には沈黙が訪れる。それはそうだ、いきなり明日なんていわれなくても

よし、気合い入れていこう！ なんてことにはならないだろう。

「ハル君。俺のこれを見てくれ。」

そういつて竜児が立ち上がった。

「見よ！俺の邪眼！」

そういつて目を充血させる。

何がしたいのかわからない、本当に壊れてんなあ　と思ったとき。

「どうだった？俺の一発ギャグ！」

「つてえええ！　一発ギャグ考えてたのかよ！　しかも考えてそれかよ！」

ついでに言うと、ラジオだから意味ねーよそれ！」

全力で突っ込んだ。別に明日のラジオの突っ込み練習をしているわけではない。

「そうだった！」

その一言で、終る竜児。

このままで明日のラジオ大丈夫なのか……

どっ　と不安感が襲い掛かってきた。別に俺が気にすることでも無いのに。

次の日の昼休み。ついにこの時が来てしまった。

みんな緊張しているだろう。何か犯せば、学校中の話題になってしまふ。

なるべく軽口は、叩かないようにしよう。

「ついに来ましたね。この時が。」

いつもどつりの無表情で水原が言った。そこからは緊張の色が読みよれない。

「水原は緊張しないの？」

「いいえ。かなり緊張してますよ。」

そう答えた声は、かなり楽しそうだったが。

「おーし、みんなそろったな。放送室に行くぞ！」

部長が向こうからやってきて、そう呼びかけた。

さて、向かうことにしよう。

放送室。

部長がスピーカーの電源を入れ、スイッチを操作し始める。

「さて、はじめるぞっ！」

小冬「救部の！昼休み校内放送〜〜！」

春希「ってかいきなりテンション高っ！」

愁兎「始まりは意外としっかりしてんだな。」

小冬「何を言ってるお前ら。もう始まっているんだぞ？」

愁兎・竜児・春希「まじっすか！」

小冬「まあ、ついていけないこの3人はほっておいて、まずはじめのコーナー！」

春希「そんなモンまで用意してんのかよ！」

水原「はじめはお便りのコーナーです。ラジオネーム、ぐっさん（男）さんからです。」

『須川 竜児くんが僕のこと好きみたいで困っています。どうしたら

いいでしょうか？僕には他に好きな男の子がいるんです！』

「

春希「なんか最初っからぶっ飛ばしてねえ！？　というか突っ込みどころ満載だぞこれ！

他に好きな男の子がいるから無理ってなんだ！お前もホモなのか！」

竜児「まで！何故に僕！？　というかなんでハル君はそこ突っ込んでくれないの！？

これは意図的なのか！？」

愁兎「お前この間、あの子いいよな。　とか言っつて男見てたじゃねえか。」

竜児「それ違う！なんか違う！俺が好きなのは幼女だっ！」

小冬「お前今、自爆してるからな。校内放送なんだが……」

春希「ちよつと待って！　今かなりグダグダだからね！」

水原「次のお便りです。」

春希「もう次いっちゃうの！？　解決どころか余計うやむやになっ
たよ！？」

水原「ラジオネーム、うつ病（男）さん。『エミリーという外国人の女の子が好きなんです、

僕は英語が苦手で、話しかけることができません。どうしたらいいでしょうか？』」

春希「なんで恋愛系の話しか来てないの!？」

愁兎「さっきのアレは恋愛に分類されるのな……」

竜児「歪んだ愛は必要ないよ！俺はまだ弁解するぞ！」

小冬「おい、真面目に答えてやろうじゃないか。英語ができないんだって？

それなら話は簡単だろう、あきらめろ。」

春希「真面目に答えるんじゃないの!？」

小冬「私は真面目に答えたが？」

春希「間違いなく適当だよ！もっと英語を勉強してからチャレンジしようとか

アドバイスあるでしょ！」

小冬「私はあるがままの現実を突きつけてやったただけだ悪いことなどしてない。」

愁兎「姉貴マジで遠慮ねえな……こええよ。」

竜児「待って！同性愛について語り合おう！」

水原「そんなに同性が好きならブラジルとかにでも行くといいです。同性で結婚が

可能らしいですよ。よかったですねそんな国があつて。」

竜児「そんなことは言っていない！俺の弁解をさせろといっている！

まちがった解釈をするなあああ！」

小冬「じゃあ次のコーナーいつてみよー！」

春希「これ放置！？ だんだん泥沼化していつてる……」

小冬「次のコーナーは、『ずばり言ってみよー！』です。普段言えないことを

私たちが代わって言いましょう！ というコーナーです。」

愁兎「えっと、この紙読めばいいんだな？……ラジオネーム、しよ
うたるん（男）さんからです。

『おい！ 俺はロリコンじゃねえよ！ あんまり調子のるな
よー！』

春希「……誰に対して言ったのかは全然わかんないんだけど……と
りあえず読めばいいんだろ？」

ラジオネーム、みずの（女）さんからです。『友達の弟が小
学三年生なのに金髪で

チャラチャラしてる！マジで今の小学生はレヴェル高いな！』
……なにこれ。」

水原「ラジオネーム、須川竜児（男）さんからです。『ぐっさん君
！僕は君の事を忘れられ

ないんだ！やっぱり好きなんだよ！……………好きなものはどうしようもないんだよっ！』」

竜児「タイム、おかしい！俺はそんなもの書いた覚えは無いぞ！間違いなく仕組んだだろ！」

愁兎「もうお前が男好きだって分かったから。あと、今度からはあんまり近づかないように

してくれろと俺はありがたいんだが。」

竜児「うわああああ！俺の株が格段に下がったああああ！」

小冬「お前の株なんていつも地面スレスレだったろ。」

……………そんなこんなで放送は終了した。

放送後に一つ変わったのは、竜児の株価だけだった。

これはこれで成功……………なのかな？

8話 山葵

部室でのんびりと退屈な時間を過ごしていた時。

部員の1人がいないことに気がつく。

「あれ……………？ 竜児がいないくない？」

そう問いかけてみるが、誰も答えるものはいない。

部長はだらしなく窓のさんに腰をかけ、ボーっと外を眺めている。それだけで見栄えのある絵のように見える。

つていうかそこ危ないんですけど……………ここ3階なんですけど。

でも部長なら落ちても普通に生きてそうだ。骨も折らずに。

愁兎は机に突っ伏している。寝ているのだろうか、微動だにしない。

自慢の茶髪がボツサボツサになってる。

たぶん、授業中も寝ていたのだろう。

水原は本を読んでいる。ブックカバーがついているから何を読んでいるのか分からないが、

間違いなく危険な香りがする。

ところどころ黒い笑みが見える。

つていうか全員がシカト。それほどどうでもいいのだろうか。

確かにあの放送室男大好き事件（誰かが命名）から扱いがさらにひどくなっている。

水原なんかB L扱いしているからな……………

「空気が変わった。」

そう水原が小さくつぶやいた瞬間。勢いよく部室のドアが開かれる。

「みんな聞いてくれっ！」

入ってきたのは、竜児だった。

「どうしましたか？ 男について話し合ってますか？」

そう水原が返す。

「違うわっ！ いいか、よく聞け！ 俺が依頼を授かってきた！」

「本当か！」

部長が生き返る。目がキラッキラ光り始める。

ああ、もうこの人は……

「部長！可愛い！マジで俺萌え死ぬわぁー！」

「その目は潰した方がいいですね。」

緑色の液体aが竜児の目の中に吸い込まれていく。

ツン、と匂いがするこれは……

「わさビームです。どうですか？ネーミングセンスとあわせて。」

水原がこちらを見ている。

え？これは、俺に対して何を求めているんだ？

「う、うん……いいじゃないのか？」

「チツ！」

鋭い舌打ちをされた。超怖いんですけど……

そんな中、竜児は地面をのた打ち回っている。

「ワサビィー！今までに無い痛み方！」

「そんなこといいから早く依頼を教えろ！」

ゆっさゆっさ、と胸倉をつかまれ振られている。

「ああ、部長が俺に触れるときが……」

そんなことを虚ろな目をしながらつぶやいている。

「気色悪い！」

「気持ち悪いです。」

女子2人に毒づかれ、がくつ、と倒れた。

愁兎は、この喧騒の中まだ眠っていた。

「ううん……依頼……」

「で？何の依頼なんだ？」

救部全員が席についている。会議スタイルだ。

「そ、そうだった………とりあえずこれ………」

制服のポケットから折りたたまれた紙を取り出す。

その中に書かれていたものは………

「……………」

「……………」

「……………」

「ぐー……………」

「どっつ？よくねえこれ！？」

|||||||

||

メイド部より

このたびは竜児様に依頼を承っていただきました。

内容は竜児様に伝えてありますのでよろしく願います。

|||||||

||

「ふざけているな。とりあえずその部活を潰しに行こう。」

「了解です部長。私のわさびームガンをお一つ渡しましょう。」

そうやって武器の流出が始まる。

お、これもいいな。 いやいや、これは下手したら死にますよ。
などといった聞きたくない内容が聞こえる。

「ちょっと待てよみんな！困ってる部活を助けるのが救部の役目じゃないのか！」

いつにもまして真剣な竜児。これ関連だからか。

「確かに正しいことを言っているが………腹が立つ。」

「なにその理不尽な理由!？」

「竜児………」

愁兎が復活した。なにやら変なオーラが漂っている。

「どうした？愁兎？」

「め………」

小さくつぶやいている。

「メイド………！いいだろ！」

愁兎が壊れた。

「やっぱりそう思うだろ！流石は愁兎！」

2人が意気投合している。これは………

「マジか愁兎！我が弟ながら気色悪い！」

部長は本当にいやそうだった。

「ついに本性を現しましたか。クズが。」

物凄く容赦の無い一言だった。

「って言うかマジで愁兎どうしたんだよ………」

洗脳されたと思えない愁兎のテンションの上がりぶりに
正直引くしかなかった。

「これぞ男のロマンだあ！」

竜児も覚醒。目が血走っている。

愁兎も同様、髪の毛が先ほどより逆立っている。

「ついにこの部活も終わったか………」

部長が机に額をぶつけて、嘆いている。

そしてメイド部の部室へ向かう一行であった。

9話 眼鏡×3

部員5人は、メイドO部の部室前で立ち止まっていた。

「明らかに痛いな……」

そうつぶやいたのは部長。そうだろう、確かに痛い。

部室のドアには、パソコンで印刷されたであろうプリントが貼られている。

メイドキャラ+の部員求む！ と書かれたプリントが。

間違いなくろくでもない部活だとは分かっていた。

正直この部室に入る勇気が無い。

「竜児様のお通りだ！」

そういつてドアを開ける須川竜児。今回だけは主役並だ。

『お帰りなさいませ、ご主人様ー！』

といわれるのかと思いきや、言葉一つ返ってこない。

次の瞬間そのわけが分かった。

部室の中には、男だけが3人。部員なのであろう。

右からパーマに眼鏡、おかつぱに眼鏡、長髪に眼鏡だった。

なんとというか……類は友を呼ぶ状態。

つて、そんなことを言っているわけではなくて、女子率0パーセント。

そんな中で『ご主人様ー！』なんて返ってくるわけが無い。

返ってきたらそれでもうなんか問題だ。

「りゅ、竜児様！」

「我らが救世主！」

「神！」

三人が、目に色を取り戻して竜児を見る。

一方、竜児は満足げだ。

「気持ち悪いですね。何の宗教団体ですか……」

水原もちよつと引きながらの毒舌。

普通はそうなるだろうね。

「イヤだ！ここから一刻も早く立ち去りたいっ！」

部長が叫んだ。確かに部室内にはポスターが所狭しと貼ってある。

……………メイド限定で。

「ふふふ、部長。逃げられませんよ。今からこれに着替えてもらいますからね。」

竜児が持っているのはとある服。この服はっ……………

「姉貴！これだ、これしかないぞ！ さあ、水原もっ！」

水原は、珍しそうにそれを受け取って見つめている。

あれ？水原？ここは毒ついて燃やしたりするところじゃないのか！？

「んなもん着れるか！ 流石に救部の存在理由のためでも無理だっ！」

部長が叫んでいる。ああ、イヤだろうなあ……………それは。

俺は、男でよかったと本気で思った。

「さあ、部長！水原！ さっさとメイドに進化しろ！」

「ふざけんなっ！進化できるかっ！いや、むしろ退化してる感じだわ！」

口論はまだ続く……………

ふと、水原の姿が無いのに気がついた。

まさかっ……………ってそんなわけないと思うが……………

そう、トイレだ。多分そうだ。女性は、そういうこと言わないからな。

いつの間にか行ったのだろう、気にすることは無い。

と思っていたのに。

「おおっ！」

「これはっ！」

「し、写真を撮れっ！」

いつの間にか全身メイドさんになった水原がそこに立っていた。

「ふははー、毒舌メイドに酔いしれるがよいわー」

無表情、そして棒読みでそう言った。

「何が起きているっ！これは夢だ！」

「水原っ！ついに覚醒か！」

姉弟そろって、違うリアクションをしている。

なんなんだこれは……

「写真は1枚1万円取りますよ。」

「……十分です！」

眼鏡3人が言った。

割に合わなさ過ぎるような気もするが……水原？

「だ、誰が着ようと私は着ないからなっ！こんな恥ずかしいもの！」

そういつてメイド服をつき返す部長。

男としては見てみたいものだが……そうあることで何か危険な感じがする。

その……なんだ？部活の崩壊って言うか。

「って！ちよつと待て！そもそも依頼の内容はなんなの!？」

ジト目で竜児がこちらを睨みつける。

「なにその コイツ空気読めないな 見たいな目は!？」

「そ、そうだっ！ハルの言う通りだぞ！」

部長が賛同してくれる。

「そうだな……それを言っておくのを忘れていた。つい水原に夢中になっただけ。」

依頼の内容というのは、まあ、見てのとおりこの部活には女子率0パーセント、

しかもメイド部といった部活。流石に校長や先生方からどうかという声が届いているんだ。」

得意げに依頼を告げる。

何か物凄くむかつくのは俺だけか？いや、部長もそう思っているよっだ。

目が合った。そしてうなずいた。

「そこでだ！この部活に女子を引き入れるために、勧誘活動を手伝ってくれというものなのだ！」

もちろんコスプレしてだぞ！？　んで部活入ってない女子限定で。

「やっぱ着るのかよっ！」

部長が叫んだ。

「着るんです！」

「似合いますよ！」

「そうですね！さらに可愛くなりますよ！」

眼鏡3人の物言い。

そんなもの聞く気になれないけどなあ……………

「姉貴。」

愁兔が姉である小冬部長の肩をつかんでいた。

「俺はな、……………メイド服着た姉貴の方が……………好きだぜ。」

キラッ！　と白い歯が光った気がした。

「糞気持ち悪いわっ！」

ボディーブローをまともに受け、むせながら地面を転がる。

「げほあ！な……………なんで……………」

「まさかシスコンだったなんて驚きですね。」

いつの間にか制服姿に戻っている水原がそういった。

「つつかいつの間に着替えた!？」

「さっきの間です。あ、もしかしてそのままのほうがよかったですか？」

鳴川　春希はメイド好きだったんですか……………」

「とりあえずその勝手な想像やめようか！」

「まあ、いいです。今日だけで儲かりましたからね……………」

あ、金とってたんだ。

「はいはい！そんなことより！部員集め……………やるよ！」

竜児が仕切り直す。

「私は絶対やらん！」

「そうですね……私も稼げたのもういいです。」

「俺も目え覚めたわ。メイドってそんなによくねえな。やっぱり普通の姉貴が好きだわ。」

「だから気持ち悪い！」

みんなが次々と辞退する中、竜児が慌て出した。

「え？マジで！？みんなやらないの！？愁兎！お前さっきまで……」

「いや、だから目覚めたって。」

「え？は、ハル君はやるよね！？」

「何で俺がやらないといけないんだよ……」

そのまま竜児は固まる。

「ま、やるんなら須川がやればいい。とりあえず部長命令で。」

いつもの調子が出てきたようだ。さっきまでの仕返しに見える。

「え、ええー……！」

「さ、みんな帰るぞ。」

一同は引き返していく。

「マジでか？マジでかあああああ！」

「竜児様ー！」

「どうか我らを救ってください！」

「神！おーせのとおりに！」

眼鏡3人が竜児にすがり付いていた。

「やめろっ！離せ！俺は神じゃない！いや、すいませんやめてくだ

さいいいい！」

そんな声が廊下に響き渡った。

ちなみにその3日後、その部活動はつぶれたそうだ。

理由は女子を見つけた方がいいが、あまりにも似合わなさすぎて、部員が萎えたのだという。

その女子がどんな奴だったかは知りたくも無い……

可愛い子に着せたら『最強』。

そっいう子に着せたら『最狂』となるメイド服であった。

なかなか奥が深い……そう考えさせられる依頼だった。

「ふははー、どうですかこの毒舌メイドはー！」

「ってか水原！そんなもんどこから持ってきた！？ つつか着るな

！」

10話 超熱帯

「うん、暑いな」

部室のドアをくぐった瞬間に部長に言われた一言だった。

「はあ、そうですね」

適当に話をあわせておいて、机にカバンを置く。

確かに暑い。夏が近づいてきているのは分かるが、それでもまだ早いと思う。

梅雨は？ という突っ込みを待っているかのような天候だ。

部室には俺と部長。なんだか久しぶりのコンビだ。

「部長、みんなは？」

扇風機に向かってあゝゝゝとガキみたいな行動をしている部長に聞く。

「あゝゝゝ？ 須川は、アイスを買に行かせた。んで水原はこの間稼いだ金でエアコンを買に行くとか言い出して出て行った。

愁兎はまあ……暑い教室で居残りだ。」

そう、この学校にはエアコンという快適な整備がなっていない。

なぜなら初代校長が、部活に力を入れすぎたせいで資金がなくなっただかららしい。

ここに来て俺は初代校長を恨むぞ……。

ちなみに部室は腐るほど余っている。

本校の隣、グラウンドを挟んでまだ部室棟2がある。そこは一階は埋まっているが、

2階から上(三階建て)は空き教室だ。

「くそ、無駄な費用使うくらいだったらエアコンつけろって話だよなあ、ハル？」

「あーそうですね。」

暑くて対応もまともにできない。本当に暑い。

「ただいま帰りましたあ！」

バン！とドアが突き破られるかの勢いで開く。

そこには、なんだかも雨に打たれたかのように濡れた竜児がいた。

「おおっ！須川でかしたぞ！アイスをやこせ！」

そういつて竜児からスーパ―袋をひったくった。

「というかそれ汗か……竜児？」

「そ、そうだよハル君……これおかしくない？ 僕汗かきすぎだよね！？」

べちよべちよな竜児……とりあえず近づいてほしくない。

「ほい、ふはわ、ふほへんひゅうはいひひっへあへはひへほい」

アイスの棒を咥えながら部長が何か言っている。

ちなみに扇風機は部長専用とかでこつちには回ってこない。

「部長、だらしないです。しかも何言ってるか分かりません」

「部長マジ可愛い！やべ！マジアイス買ってきてよかった！」

阿呆なところで竜児が反応しているがとりあえず無視。

「いや、だから。『風呂研究会行って汗流してこい』っていったんだ。

あと、可愛いとか言うなっ！」

あ、照れてる……竜児に褒められて？……言われ慣れて無いのか？可愛いのに。

「っていつかそんな部活すら存在すんの！？ただで貸してくれるとは思えないんだけど……」

「そこら辺は大丈夫だ。風呂に入られることを目的とする部活だからな。

夏とかは野球部が利用している。」

……何でもありかよ。

「んじゃ！いつてきまーす！」

元気よく走りだすいいが、汗が廊下に飛び散っている。

なんか気分悪くなってきた。…………。

「ほい、ふあるはあいふふわらいのは？」

「んじゃいただきます。」

そういつて部長が抱えているアイスの箱から一本取り出す。

ちなみに部長は、『ハルはアイス食わないのか？』といったんだと思う。

「つつか、部長。扇風機俺にも当たらせてくださいよ。」

「んやに！？2人で当たるには密着しないと当たれないぞ？…………

そうか。

ハルは、私と密着したいのか。確かに今は、2人つきりだからな。でも密着するとより暑くなると思うんだが…………」

「何でそんな発想！？ 部長がそこを退くって言う考えは無いんですか！？」

「ああ、そうなのか。そういうことが、私に汗をかかせて汗を拭く姿とかを

見て喜ぶ性癖の持ち主だったのか！……………一瞬でハルの株は大暴落だぞ。」

「だから何を根拠に！？俺は、どんなキャラ設定なんですか！？」
叫んだらもつと暑くなってきた……………。

アイスが物凄い勢いで溶けていく。

「はっはっは！冗談だよハル。ハルはそんな奴じゃないもんな。」
大きく笑う部長。楽しんでるよ、この人……………

「暑い！」

ガチャリ、と入ってくるなりそんな声を上げる愁兎。

流星は双子、一発目の言葉は同じだ。

「おう、愁兎。アイス食うか？」

部長がアイスの箱を差し出す。

「おお、さんきゅー姉貴。にしても暑いな、どうなってんだこれ。」

梅雨は！？」

あ、天候に突っ込んだ。

「今日は、馬鹿みたいに暑くなるらしいぞ。」

「マジかよー。って竜児と水原は？」

部長はさつきと同じ回答をした。

「風呂研究会なんてもんがあんのか。俺も行ってこようかなー？」

「ああ、ちなみに風呂研究会の今回の研究内容は【糞マグマ風呂】
だった気がするぞ。」

「それを知ってて竜児行かせたんすか！？……ドンマイとしかい
えないよね。」

「大体【糞】の部分の意味がわかんねえな。姉貴は分かるか？」

そんなことを話していると、水原が帰って来た。

「暑いですね。暑いのは苦手なんです。部長、私にもアイスをくだ
さい。」

無表情ながら汗をかいてる水原。

部長の抱えているアイスの箱から一本取り出す。

「水原も汗かくんだな。」

ジト目で睨み返される。

「何言ってるんですか。私だって汗ぐらいかきますよ。はっ……ま
さか

鳴川 春希は汗フエチ………気持ち悪いですね………」

「何でみんなそんな目で俺を！？俺のキャラ設定って！？という
かこれは

竜児の役回りでは！？」

アイスを舐めながら水原は言った。

「冗談ですよ。鳴川 春希がそんな人間じゃないことぐらい知って
ます。」

それにそんな人間は須川 竜児だけで十分です。」

………みんな俺をからかっている？ 竜児の存在のありがたみが分か
った気がする。

すぎる！」

「姉貴！ それだって！ 暑いのはイヤだろ？」

「……………」

これメイドって…………どこまで引つ張るんだ？

影響力ありすぎだろ。なんだかんだ言つて水原も気に入ってんじやないのか？

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ！」

体中が真っ赤になった竜児が、突如部屋に滑り込んできた。

「おお、帰つて来たか。」

「【糞マグマ風呂】の影響かこれ？」

「いつもどおり気持ち悪いのです。」

「……………」

これは重症だ。痙攣している…………

「ま、まぐまぶろは…………しねる」

そういつてうなだれた。

だが、誰も気にすることなくエアコンの件について話し合っていた。

「まあ、…………ドンマイ竜児。」

小さくつぶやいて、ほったらかしにする。

いつも通り…………扱いのひどい竜児だった。

11話 オチ？

結局のところ、電気工学部に行くことになった。

まず行ってみないと話にならないのでは？ という水原の発言にみんな同意したのだった。

復活した竜児もついてきている。

「廊下も暑い……………それでもってだるい……………」

文句ばかりぶーたれている部長は干からびそうな勢いだった。

水原はやっぱり無表情で、汗を流している。

「本当に暑いな……………」

本当に暑かった。今日は何度まで上昇するのか、地球温暖化は予想外に進行中だ。

「あ、姉貴……………俺はもう駄目かもしれん……………」

干物のようになっている愁兎が、廊下の柱に捕まっている。

それは、ヤモリのようにも見えたが……………

「がんばれ愁兎！ 電気工学部は……………すぐそこだ」

ふと、外に目がいった。

野球部がこの暑い中練習に励んでいる。

これこそが青春だ！ と言わんばかりの光る汗を流している。

が、それはそんなに目立つほどではない。

何が言いたいのか、それは、校内にいる救部のメンバーが異常に汗をかいていること。

明らかに外の方が暑いはずなのに。なぜか校内にいる人間の方が汗をかいている。

おかしくないか……………？

「部長……………なんで外にいる人はそんなに汗かいてないんですか？」

「

「あ？」

部長が窓にもたれかかるようにして外を見る。

「ホントだな……普通だったら外にいたら死ぬぞ
やっぱりおかしい。」

「確かに私も、校内に入ってから汗をかき始めた気がします」

「ぼ、僕もだよ、……………」

「そんなことよりさあ、姉貴。みんな死にそうなんだから、早く電
気工学部に……………」

愁兔が、出来る限りの力で訴える。

目が虚ろだ。というかもう汗をかいていない。

「愁兔。大丈夫か？」

声をかけてみるが、返事が返ってこない。

「とりあえず！ みんな……………電気工学部に……………」

肉体疲労と精神疲労の中、歩を進めた。

電気工学部の扉の前、中から変な音が聞こえる。

ヴィーンヴィーン……………

明らかに普通ではない。いや、普通じゃない部活なのだからそんな
のだが、

聞こえてくる音がおかしい……………。

「部長。ここ大丈夫なんですか……………」

「そんなこと知らん」

部長は片手に持ったペットボトルの中の水を飲み干すと、一気にド

アを開け放った。

「電気工学部の者達よ！ 我らは救部の者だが……って！ もっと暑い！」

中からは、ムワツとした空気が流れ込んでくる。

「気色悪いです……」

水原は、口元を押さえながら言った。

「おいおい、どーなってるんだこりゃあ……」

中に侵入していく部長。

機械が大量に稼動していて、そのため熱が出ているらしい。

中は薄暗く、機械音とその光だけが点滅していた。

まるで何処かの無人機械工場だった。

「おい！ 誰かいらないのか？」

救部全員が、部室の中を詮索する。

「こっちの部屋は……何も無いですね」

「こっちは……駄目だ。機械が多すぎて奥までは……」

機械が多すぎて足の踏み場も無いところだ。

「こ、こんなものがあつただけ……」

竜児が死に死にの状態で、小さなメモを握っている。

校内サウナ化計画。

屋上階段の上から、熱風を送ってサウナ化！

後は、各部屋に暖房器具を設置するだけっ！

「マジで意味分からんわああああっ！」

部長が切れた。

「ウチの学校は馬鹿ばかりか！ つうかこんなオチでいいわけな

いだろうがぁ！」

「ああ、だから外はそんなに暑くないわけなんだな。」

「そういえば先ほどから、私たち以外の人とすれ違っていないません」
水原が、決定打を打った。

確かに誰も見てねえし。

「部長、まさか部活掲示板見てなかったりしません？」

部活掲示板とは、どの部活動が今日は何をしますよー、といった項目が書かれている

掲示板なのだ。それは、部長が確認して部活同士のイザコザが起きないようにする

ためにも作られた者なのだ。

「……………み…た？」

「いや、疑問系じゃなくて、見ましたか？って聞いてるんです」

「……………うはー」

見てないわこの人。

「こんなオチって！とか言ってる割には姉貴が確認してなかったんじゃないかよ！」

「んだって！こんな大掛かりなことする部活じゃなかっただろっがここは！」

姉弟喧嘩が勃発。

逆切れの部長の方が、超不利。

「部長。私は別に、霧谷 愁兔の味方をするわけではありませんが、部長が

悪いとか言うレベルではないくらいに悪いです。というか悪です
というか作者もカスですね。こんな腐ったオチ誰が見るんでしょうか」

いつも通りの無表情になっている。

「ええ……………ええ……………！私が悪いのかあ……………」

部長がうなだれた。いえ、作者も悪いです。

何でも出来る人なのに……………どっか抜けてるのかもしれない。

「姉貴。……そんなドジなところも……好きだぜ」

今や、愁兎のボケにもかまっていられないらしく、遠くを見ている。

「うおっ！弟の痛烈な愛も無視か！」

「痛烈って……そうなってるんだよ」

「シスコン野朗は砕けてください」

「……………」

「って！竜児が死にかけてるって！早く何とかしろよ！」

バタバタしながらも、竜児を外に連れだそうとする一行であった。

次の日。

「なんか寒くないか？」

「またか!？」

12話 笑失

昔からよく言われていた。笑わない子だね、と。見んな心配してた。家の人も、執事たちも。

笑わないというよりも、私は感情表現が下手だった。いや、できなかった。

無表情。それが私をあらゆる一番のものだった。

別にわらわなくたって生きていける。

別になかなくたって生きていける。

別におこらなくたって生きていける。

なのになんで周りの人はこんなに表情豊かに私を見るのだろう。

良い成績をとったって、母は

「あなたががんばってくれているのはうれしいけど……ママはあなたが笑っているほうが一番うれしいわ」

そういっただけなんだ。

感情って何？ そんなに大事なものが私には欠落しているの？

私は……普通ではないの？

次第に周りが心配するのが耐えられなくなった。

心配してくれるのはうれしい。でも私はそれをなんとも思っていないの。

一番に、母がつらそうな顔をしているのがいやだった。

なんで、……そんな顔をするの？ママ。

どっしって……

「ありや、起きたか。折角レアなショットをゲットできると思っていたのに」

目を開けると無機質なレンズと目が合った。

それを構えているのは小冬部長。腰まである髪は、艶があつてうらやましいくらいだ。

そして顔もいいときた。完璧な人間は存在するものだとこの人にあつてから私は知つた。

それに……表情が豊かだ。

喜怒哀楽。何をとつても美しい。そんな人に私は引かれていた。

「部長。私の寝顔をとる時は、10万いただきます」

「おっと、そんな金額私には払えないな」

驚いたような顔をして、一步下がつてみせる。

「今、何時ですか?……」

「そーだな。4:30ちよつと前だぞ。水原は30分ぐらい寝てたかな?」

時計を見る。私が部室に来たのは4:00。

確かに30分は寝ていたのかもしれない。

「他の人たちはどうしたんですか?」

「ああ、愁兎はいつも通りの居残りで、ハルは日直だっけな?んで、須川は

とりあえずゲームの発売日なんで買つてからここに帰ってきます
!、とか言つてたから

今、学校にはいないだろう」

「そうですか。依頼は来てないんですか?」

「そーだな。依頼箱見てきたけど空だったしー」

部長はポツキーを口に咥えながら遠くを見てそう言った。それだけで、この人は絵のモデルになれそうだった。

「ん？ どーした、水原？ ポツキーがほしいのか？」

そういつて一袋投げてくる。

すっぱりと手の中に収まる。

いよっしゃー！ ナイスコントロール、と部長はうれしそうな顔でガッツポーズをとる。

そんな光景に私はまた見とれていた。

「どうしたんだ？ さつきからなーんかおかしいぞ？」

不思議そうな顔で見つめてくる部長。

「いや、何でもありません」

と、いつの間にか隣にまで部長がやってきていた。

「ん、なんだあ？ 私が好きなのか？ まあ、水原だったら百合百合おっけー！」

そういつて抱きついてくる。

く、苦しい。なにかやわらかいものに圧迫されて窒息死しそう……

「みい〜な〜はあ〜ら〜」

そういつて自分の頬を私の頬に擦り付けてくる。

「ぶ、部長！……私に触るには……お金が……」

「愛にお金なんて関係ないよあ〜」

背景に百合の花がたくさん見える。

不意に部室のドアが開く音がした。

ガチャ

「日直疲れた〜、部長ー今日は依頼来てました って……」

鳴川 春希だった。

今、私は部長に押し倒されて、下から鳴川 春希の顔を見上げるよ
うな形になっている。

もちろん私の上には部長が覆いかぶさっている。

「よう！ハル！」

なんて部長は空気も読めずに能天気な挨拶。

「えーと、と、とりあえず部屋間違えました……………」と

ガチャン

再びドアが閉められる。廊下からは、盛大な走り去る足音が聞こえた。

「ま、いいか」

「良くないですよ部長。誤解されたじゃないですか」
部長の下から抜け出し、制服を調える。

「んだようー折角楽しかったのになー」

そんなすねたような部長を見てると楽しくなる。

まるで子供のような顔をするときがある。

「っていうか、水原だって楽しそうだったよ」

部長が不意にそんなことを言った。

楽しそうだった……………確かに楽しかったかもしれない。

「部長は……………私に何でも教えてくれますね」

「そーか？……………うーん？」

悩んでいるようだったけどそれはそれでいい。

分からなくてもいい。

ただ……………これがうれしいという感情なのかもしれない。

「なんだ……………？まあ、分からんことがあったら私に聞けばいい」

部長は信頼できる人間だった。

こんなにも近くにそんな存在がいた。

「……………なんだよう……………そんなに見つめて……………やっぱり！私のこと好きだろお〜」

また抱きついてくる。

「ふぐぐぐ……部長……そのふくらみがキツイ……」
「こんなに押し付けたのは水原が始めてだぞう〜」
「な、なにいつて……」

ガチャ

「いやぁ……ゲーム買うのに時間がかつちゃって……え？」
私たちが抱き合っているところに須川 竜児が入ってきた。

「なっ！これは……完璧な百合が完成しただとおおお！最強の部長と」

ツンデレの水原がこんなことに！やばばば！」
テンションメーターぶっち切って暴走中の須川。

「ツンデレじゃありません」

ワサビガン（摩り下ろしたものが放出される）を放つ。

須川の両目にヒット！効果は抜群だ！

「いぎゃー！摩り下ろしはマジ無理！」

「おお、水原は次々に武器を開発していくなあ」

いつものどたばたがもどつた部室内であった。

13話 ダッシュ。唐突。

俺は校門の前まで走ってきていた。

「はあ、はあ、……………何してんだ俺は」

さきほどは、びっくりして走り出してしまったが、よくよく考えるとどうせいつもの部長の遊びなんだと理解できた。

いや、でも実際いきなり目にしたら驚くよなあ……………
竜児とかは素で喜びそうなんだけどな。

ふと、そのとき校門の外に白い大きな車が止まっているのが見えた。

「……………？ 学校に誰か来てんのかな？」

誰かが訪問してくるなんてことは誰も言っていなかった気がする。

その白い車は、外車だろう。いかにも高級そうだ。

金持ちの人が送り迎えをする際に使うようなものだ。

今にも執事が運転席から出てきそうな感じがする。

「とりあえず……………もう一回部室に戻ろうか」

そう思い、野球部の張り上げる声を耳にしながら学校へと足を向けた。

コイツ笑わねーな。

生きてて楽しいことあんのか？

おまえ、ほんとに人間かよ。

周りから聞こえるのは自分を中傷する声。

どういう意味なのかは分かっていたし、それに対して抱く感情も分かっていた。

でも、私はそれがどんな感情なのかは分からなかった。

頭で理解していても、その感情が自分にわいてこないということだ。理解は出来るのに、感じることは出来ない。

意味が分からなかった。

では今の自分の感情はなんだ？

憎しみとも違う、悲しみでもない、喜びでもないだろう。

“無”なのか。

大体、感情なんてものは最初から持ちあわせていないのかもしれない。

感情表現できるのが人間なら、私は何？

分からない。分かりたくも無い。

感情、それって何？

こんなにも私をぶれさせるものなの？

いや、心なんて無いのだからぶれることなんて無いんだ。

そんなことは

無いんだ。

「みいーなーはーら？」

ぶんぶんとして視界を往復するものがある。

部長の手だった。

「またぼーっとしてんな。どうしたんだ？」

「いえ、………疲れているのかもしれない」

あんなものは過ぎ去った過去だ。今更気にすることなんてない。本当に疲れているのだ。きっとそうなんだ。

「ま、今週ももう終わるからな、無理しない方がいいぞ」

今日は木曜日、明後日からは休みなのだ。

それを水原は複雑な気分だった。

普通の学生なら、やったーやすみだぁー などといった喜び溢れる感情

をさらけ出すはずなのに。

私は良く分からなかった。

「今日って学校にお偉いさんとか来てるのか？」

ワサビ地獄から復活した須川が、窓の外を眺めながら素っ頓狂な声を上げた。

救部の部室の窓から見えるのはグラウンド。そのすぐ横に校門があるわけだから、車を見つけたのかもしれない。

もしかしたら学校の敷地内の駐車場だったかもしれない。

「えー？ そんな話は聞いてなかった気がするんだがな？」

部長が首をかしげ、眉をひそめる。

「まあ、別にいいんじゃないですかね。僕的には関係ないと思いますよ」

「そつだな。校長に用でもあるんだろう」

「……………ですね」

ガチャリ、と扉の開く音がした。

入ってきたのは鳴川 春希だった。

「え、えーと……………こんちわ」

よく分からないぎこちない挨拶をして、部室に入ってくる。

おそらくさっきの部長と私のまあ…………アレから引きずっているんじゃないだろうか。

ようやく気を取り直し、話を振ってみることにする。

何で俺はぎこちなかったのだろう。

そんなのいつもの部長のことじゃないか。

「それはね……君の心の中に百合大好き！　が生まれたからだよ」
囁く声、竜児だった。

「てめえと一緒にすんなっ！　てかお前いつの間に来てたんだよ」

「えーと？　水原と部長が抱きあつてたときからかな？」

ああ、やっぱりあの空気でもお前は馬鹿なのか。

確かに喜んでいたらしい。

「そついえば部長、依頼は来てましたか？」

「んあ？　……来てたら遊んでないわっ！」

怒られたっ！？　一体どうしたいんだ今日の部長は。

「そついえば愁兎がまだ来てないね」

「そつだな。大方まだ居残りだろう、……まったく」

前髪をかき上げながらため息をつく部長。

艶やかな髪が指の先からこぼれていく。

「部長！　なんかナイスです！　僕に写真を一枚っ！」

竜児がデジカメを構えていた。

メモリーの中身はどうせろくなものが詰まっていない。

つていうか、お前が持っているその袋はなんだ？

目を凝らしてみると、まあ……袋が透けるわけでもなく。

どうせいつものくだらないものだろうという結論に至った。

ガチャリ、と再びドアの開く音。

愁兎が来たのであるう。その考えは間違ってはいなかった。

だが、もう1人見慣れぬ人がついてきていた。

「ついつす……えと、……」

何かを言いたげに口をもごもごさせながら、小さい歩みで

部室内に入ってくる。

「ん？　後ろのお方は誰だ？」

部長がいち早く気付いて愁兎に訊いた。

「えーと……なんかよくわかんないけどついてきた」

その人も部室内に入ってくる。

性別は男。背丈は愁兎より高く、180以上はあると思われる。

年は25歳前後だろう、黒いスーツで身を固め、整った顔立ちをしている。

髪は黒のオールバック。ムースを使って固めているらしい。

「っ！！！！……」

水原が声にならない声を上げた。

それから一步後ずさる。

「おや、ここにおられましたか。闇音嬢」

男は静かな声で言った。だが今の部室内では響くくらいだった。

「さて、何故私 came か、という本題は歩きながらしましょう。

表に車を止めてありますので、……行きましょう」

男ははっきりと、そういった。

14話 衝突・・・

「嫌です。あなたについて行く気なんてありません。それに、家に帰る気だつてありません」

淡々と、しかし何か震えを含めた声で水原は言った。

男は目を丸くしていた。

「分かっていましたか、私が連れ戻しに来たのを。……………奥様は

あなたに戻ってきてほしいと思われております」

何を話しているのが分かった。

この男は水原を連れ戻す気なのだ。だけど水原はそれを拒否している。

連れ戻す、といつても俺は水原が今までどこに住んでいるのかも分かって

いなかったし、どんな家庭事情なのかも知らない。

「それに奥様は……………あなたに早く任せたいとおっしゃっていました」

「っ……………」

「学校を、転校するんです」

部室内に不穏な空気満ち溢れる。

部長を見たが、部長は目を伏せて何かを考えている。

竜児も愁兎もただ立ち尽くして話を聞いている。

「……………すぐには言いません。……………また私は来ますから、それまでに

お考えください。とはいっても奥様は連れ戻せ、とおっしゃるか
もしれませんが」

そついつて礼儀正しく頭を下げ、踵を返した。

男は去り際に笑って見せた。

結局その日は解散となり、それぞれ帰宅することになった。

水原は何も言わずに部室を出て行き、竜児はゲームをするために颯爽と帰っていった。

愁兎は野球部の練習に借り出されて、部室には俺と部長だけが残った。

「部長はどう思います?」

不意にそんなことを俺は訊いていた。

部長が何を考えているのか、それがとても気になったからだ。

「どうって……どうも考えてないな」

その言葉に俺は驚愕した。

何も考えてないってことだ。俺はそれが信じられなかった。

「どうしてですか?……なんで同じ部の仲間なのに……」

部長は俺に背を向けて、窓のサッシに手をかけた。

風に長い髪が揺れる。

そんな時間が永遠にも感じられた。

「それは……分からないか?」

ひどく静かな声だった。

それに俺はわからなかった。

何故止めないのか、これまで一緒にいた仲間じゃなかったのか。

どうして さっきまですごく仲がよかったじゃないか。

「水原は……帰るべきなんじゃないのか」

ついにそんなことまで言い出した。

「部長……!」

俺は叫んでいた。そんなに人のことを考えられない人ではなかったはずだ。

「止めたっていいじゃないですか！ここにいてくれて俺たちが言ったら

いいじゃないですか！なんで誰も助け舟を出さないんですか！」
俺はなんとなく感づいていた。

水原は転校してしまっただろう。

迎えに来るとはそういうことなんだろう。

この部活の誰一人、欠けてはいけないのだ。

そんなこと部長が一番分かっているんじゃないのか。

「それを私に言ったところでどうなる。……ハル、これは水原の問題なんだ」

「でもっ！……」

「私たちに！……他人の家庭に口を挟む権利なんてあるのか！」
それは怒号だった。

裏腹に悲しさも秘めているようで、……俺は、どういうことも出来なかった。

「ハル……私だって同じなんだ。……でも、こんなところで水原は立ち止まっていていいのか？

進むべき道があるんだ。……それを私たちが遮ってはいけないんだよ……」

いきなりの訪問。水原を連れ戻す。転校。

本当にいきなりだ。……もう何がなんだか分からない。

俺はどうすればいいんだ。

「私たちはどうも出来ないから……、いつも通り過ごすしかない」

次の日、水原は部室に姿を現していない。
部室には4人しかいなく、静まり返っていた。
誰も口を開かない。
やはり昨日のことが会ったからなんだろう。
俺は一度水原の所に行ってみようと思った。
俺自身、この空間が壊れるのは嫌だったから。
席を立つて、部室のドアに手を掛ける。
「どこに行くんだ？」
とは誰も訊いてこなかった。昨日部長が言っていた。
私も同じなんだ　と。
そしてみんなも同じなんだと思う。
だからこそ、誰も訊いてこないんだ。

水原の教室に行くと、窓側の一番後ろの席に水原は座っていた。
外を眺めている。家には帰らなかつたようだ。

「水原」
名前を呼ぶと、少し首を動かしてこちらを見た。
いつもの無表情で。

俺は水原の前の席に座った。

「何しにきたんですか。……………鳴川　春希。」

「別に……………話を」

沈黙が訪れる。遠くからは運動部の喧騒が聞こえる。

それほど教室は静かだった。

「昨日……………私は連れ戻される時……………嫌だつて言いました」

水原が口を開いた。

「でもそれは、みんなの言う感情というものからきたのではないのです。」

こんな時、普通の人ならば嫌だつて言うのだろう、そんな知識から

出てきた言葉だったんです。……でもそれを私が言った時。

自分で言っただけで分らなくなりました。なんで私は知識の中からこの言葉を選んだらうって。……分らなかつたんです」

それは、矛盾していた。

嫌だ、という言葉を選んだ時点で水原はもう感情で動いていたんだ。本当に嫌だったんだ。それは何故か、楽しかったからだ。

救部で過ごす日々が、楽しかったから。

水原だって感情を持っている。

だって人間だから。

だって嫌だって言っただけから。

でもそれを……俺は口に出れないでいた。

言えなかつたんだ。

「そうか……」

言葉なんて選べなかつた。こんなことしかいえなかつた。

「なんか話したらすっきりした気がします」

そうやって水原は立ち上がった。

「明日。迎えに来るそうです。母も連れて」

いつもの変わらない声のトーンで言った。

でも……何かが違うのを感じた。

「じゃあ、……明日またです……」

そうやって彼女は教室から出て行った。

俺はそのことを伝えるに、部室へと重い足取りで向かうのであった。

15話 The Tears

今日は土曜日、休日で学校は休みである。

普段ならば午前中はすべて睡眠時間に費やされるのだが、今日は違った。

水原からのメール。学校に来てくれますか？ という内容だった。一斉送信だったため、他に誰に送ったのかは分かった。

ただ、竜児の名前が無かったため、竜児にもこのことをメールで伝えておいた。

なんとも水原らしい。

お別れの挨拶ではないだろう。いや、そうあってほしくない。でも万が一、ということも考えられる。

もし、もしも水原が行ってしまったら？

俺にはどうすることも出来ないし、部長だってどうすることも出来ない。

部長は言っていた。俺たちが口出しすることじゃないんだって。

水原には水原の道があるのだから。

時間は午前8時。

「……………行こう」

休日なので私服で学校まで行くことにする。

グラウンドでは朝から練習しているであろう野球部が走り回っていた。
何を言っているかよく分からない掛け声で、汗を流して走っている。校門にはまだ誰も来ていなかった。
少し来るのが早すぎたらしい。
校舎を見上げると、窓越しに水原の姿が見えた。
少しうつむいて、でも表情は変わらずに。歩いていた。
今は会いに行くべきではないと、そう思ったから俺は校門にもたれかかった。

足取りは重かった。最後にこの学校を見て回ろうと考え付いたのは今日の朝。

グラウンド、教室、体育館、……………。

次はいつもの場所に向かうところだった。

階段を上る足が重い。何故なのかは分からなかった。

今までこんなことはなかったのに。
転校だ、といわれれば難なく言うとおりにしてきたのに。
部室のドアが見えた。その前に立つ。

中からは物音一つしない。それはそうだろう、今日は休みの日なのだから。

いつもならば、須川 竜児が馬鹿やってて。それに鳴川 春希と部長が突っ込んで。

霧谷 愁兔は盛り上げていたっけ。

あの空間は暖かったのだ。

ガチャリ、とドアを開く。

「よっ」

……………窓のさんに腰をかけている部長が話しかけてきた。

「今日は……学校は休みですよ」
この人は、いつも行動がよく分からなかった。
それなのに完璧で、私にたくさんのことを教えてくれた。
「部長は……私に何でも教えてくれますね」
「うん？ いきなりどうしたんだ？ というか前もそんなこと言っ
てなかったか？」

私と部長が出会ったのは今年の春。
つい何ヶ月前の話だ。

部活にも入らず、ただ放課後に教室で一人本を読んでいた頃。
居ても居なくても変わらない存在。

誰も関わってこない存在。

そうなりたかった。そうすれば、感情なんてものは必要ないのだから。

そんな時、部長に出会った。

「君か、水原 闇音という生徒は」

ベランダからの声だった。私はびっくりして目を細めたが、部長はそれを

威嚇と受け取ったらしい。

「おっと、そんなに睨むなよ……別にからかいに来たわけじゃないんだって、

まあ、話を聞け」

そんな感じでいつまでもマイペースな部長に私は少し戸惑っていたかもしれない。

「ってことで！ 救部には君が必要なんだ、入部してもらえないか

!？」

突然の申し出に私は啞然とした。

私が必要？　なんでそんなこと。

「私が必要……………ですか？」

「そう！　常に場を冷静に保つてくれるような存在が必要だ！　それに君は可愛いから！」

言動が不一致かつまとまりがなかった。

そんな人に私は魅せられていたのだろう。

この人といったら、何かが違うのかもって。

それから毎日が騒がしかった。須川　竜児という人間がふざけまわるとか、

鳴川　春希というものがいい人だったとか、霧谷　愁兔は双子の弟でよく運動を

するとか……………そして部長は、いつでも笑いかけてくれた。

「本当にたくさんのこと……………教えてもらいました」

「え？　まあ、……………どんなもんだい！　であってるのか？」

「だから……………今回も教えてほしいんです。私はどうしたらいいのか」

部長はそれを訊くのか？　といった目つきでこちらを睨む。

それは今までに無い部長の目だった。

「それは……………訊いてはいけないんだ。分かるだろう」
酷く静かな声でそういった。

「もう集合時刻だろう。校門まで行くんじゃないのか？」

そういつて目も合わさずに横を通り抜けていく。

答えは……………得られなかった。

校門前、愁兎と竜児がやってくる。

2人ともいつものような状態ではない。

生徒玄関から2つの影が見える。部長と水原だった。

それと同時に、白の外国車が校門前に止まる。

中からは、一昨日の男が出てきた。

「皆さんおはようございます」

そんな爽快な挨拶さえも耳には入らなかった。

2人が追いついてきて、水原だけが一步前が出る。

男はそれを見て、

「さ、お乗りください」

と後部座席のドアを開ける。

「ちよつとまつてください」

水原が言った。

「最後に、話を」

水原は、俺たちを背にして話し始めた。

「これまで、何ヶ月間かあなた達と過ごしてて楽しかったです。

……… 毎日が騒がしくて、ドタバタしていたけども……… それもよ
かったんではないでしょうか。

なによりも、私の居場所というものができて……… うれしかったん
です」

水原は、楽しいとか、うれしいとか、そんな表現ばかり使っていて。

それが俺たちには苦しくて。

本当はどう思っているかなんてわからなくて。

行ってしまった方がいいのではないかとも思ってしまう。

「でも……別れることになって。……普通の人はここで悲しいって使っんでしょうね。」

私は……それがどんな感情なのかは分かりません。最初に迎えに来たとき、

嫌だっっていった。それが……今なんて言ったのか分からない」

水原は動かない。

「みんなに今日会って。……やっぱり嫌だっと思うんです！離れたくないって！

分からないけど……どこからこんな言葉がわいてくるのか分からないけど！

それでも！根拠とかそんなものなくても！感情とか無いって言うても！」

「私はそれでもみんなと離れたくないっ！」

水原は泣いていた。顔を見なくても分かった。

だっって肩が震えているんだから。

感情が無いなんて嘘だ。周りがそういうから思い込んでしまっただけなんだ。

いま、水原は感情で話しているんだ。

「や、閻音嬢………」

男はうるたえていた。こんなこと、今までになかったのだろう。

ウィーンと助手席の窓が開いた。

「閻音………そう、大事、だったのね」

聞こえてきたのは、女性の声。多分水原の母だ。

「母さん……」

「大事なもの、見つけたのでしょうか？ 行くわ」
そういつて水原の母は、男に視線を送った。

「闇音嬢」

男は今までと違った声色で水原に声をかけた。

「ずっと……大切にしてください」

それだけを言うと、車に乗り込んでいつてしまった。

エンジンの音だけが校門に残っていた。

「みなさん。お騒がせしました」

いつもの無表情に戻って、そういつた。

目の周りは赤くはれていたが。

「いや、どーってことないぞ、水原……お帰り」

部長はどんな依頼が来たときよりも、一番うれしそうな顔をしていた。

15話 The Tears (後書き)

はい、ということでも水原編でした。

今回のキーワードは『心』でした。

なんというかまあ、書きやすかったけども、だからといって皆さんに伝わっているかどうかですね。

編というようにほかにも出していきますので

よろしく願います！

16話 五月雨

時は6月ごろ……梅雨のこの時期は、じめじめしていて好きじゃない。

天気が悪いのがいやなのかといったらそういうことでもない。だって別に外に出るわけじゃないし。

湿度の問題だ。というか、食中毒の話だ。

腹の痛みつてものは、一番やな痛みだと俺は思っている。

内側からくるんだし……。

そんなことで、食中毒について恨めしく思っている俺であった。

「って……俺の中のモノローグを作ってたんだけど……」

愁兔が依頼を持ってきているのであった。

もちろん部長はうれしそう。

「いーじゃん！ この依頼っ！ 野球部の練習試合に出れるんだぜ！」

まあ、愁兔のテンションが高いのは、運動馬鹿だからなんだけど……それにしたって内容が……ね。

「ということだ！ 我が救部は野球部を助けるぞ」

部長もやる気だった。

「とはいえ、食中毒で野球部全滅ってどうなんですか？ その腹筋は節穴かと問いたいです」

水原がつめたーく言い放つのだが、腹筋は節穴ってどういう意味？

まとめると、結局は野球部が食中毒になりほぼ全滅。

残ったのは部長とその他2名のみ。

そこで俺たちに依頼してきた、というところである。

大体今思ったけど、人数足りなくないですか？

「さて、とりあえず野球部の部室に行こう！　というか練習だ！
雨の降ってない今のうちになー！」
部長がバットを掲げ、グラウンドを指差す。
「って言うかなんでバット持ってるわけ？
すでにやる気満々オーラが満ち溢れている部長であった。」

「おつす！　きたぞー！」
愁兔が勢いよく扉を開ける。
中には白球やらバットやらグローブが放置されていた。
中央にはベンチが置いてあり、その周りがロッカーで囲まれている
といった形だ。

「一般的……なのだろう。
そのベンチには、3人の部員が座っていた。
「やあ、来てくれたんだね」

その中の一人　　部長と思わしき人物が立ち上がって言った。

「とりあえず、紹介。コイツは野球部部長の　二千にせん　大智だいちだ」
愁兔は、よく野球部の助っ人に行っているからなのか、知り合いのようだった。

「私は救部部長の　霧谷　小冬だ。　まあ、今回は依頼してくれて
ありがとう！　とても
面白そうだ！」

うわぁ……………不謹慎だ。

「とりあえず、練習しにきた！ 二千君はピッチャーか？」

「そうだけど……………僕が投げるの？」

「ははっ！ 当たり前だ！ なぜなら……………その方が燃えるだろう！」

「え？ ………………そうなのか？」

野球部部长と救部部长が意味不明な会話を繰り出している中、俺は言い出すべきか迷っていた。

「鳴川 春希？ どうかしましたか？」

いつの間にか水原が隣にいた。

「いやぁ……………人数足りなくない？ って言い出すべきか……………ほら、あんなに盛り上がっているし」

祭りでもあったかのような騒ぎようだ。

「というか霧谷兄弟がテンション高いんです！」

「ま、場の空気を凍らせるのは私の役目では？」

そういつて部長のほうに向かっていった。

「というかそんな役回りが存在していたのか？」

「人数が足りてないのはわかっていますか？ 中毒野球部部长さん」

「中毒って……………それは言葉の暴力。 って1、2……………8つええええ！」

いや、そんなに驚くところか？ここ。

「どーすんの！？ 足りないジャン！ 戦えないジャン！」

「あれ、急激なキャラ変更が行われている……………？」

取り乱す野球部部长。それに対し突っ込むはこの俺だった。

「あーああ、そこはちゃんと考えてあるのさ」

部長が得意げな顔で笑っている。

何故かかつこよく見えるそれはなんだ？

「もうすぐ来るだろう」

そんな部長の声が聞こえたと同時に 部室のドアが開いた。

「みんな久しぶりだな。 この間は世話になったな」

ジャージの上下（学校指定のものじゃない）、腰にはなぜか竹刀。その部分だけがタイムスリップしたかのように思わせるそいつは

長武^{ながたけ} 土幸^{つちゆき}だった。

「よっしゃー！ ばっちこーい」

愁兎はグローブをきっちりとはめて、もう守備位置についている。水原は右手にグローブをつけていた。どうやら左利きなのだろう。そういえば童児の存在感が先ほどからまったくないような気がする

……

「は、はらいてえ……………」

今にもぶっ倒れそうな顔で、守備位置についていた。

ああ、だから静かだったんだ。

というかコイツも食中毒なんじゃねえのか？

いや、だろうな。

「ふむ……野球などやったことがないな。何をすればいいんだ？」

土幸くんはまずルールから覚えてもらおう……………」

「いくぞー」

部長がノックを始めた。

というか球打つんじゃないかなかったんかい！

ギーン！ キーン！ と爽快な音がグラウンドに響く。

高いボール、バウンドしてくるボール、時々ライナー。

それらをキャッチしていく。

別段、俺は運動オンチでもないが、そんなにうまくもない。
言うならば中途半端だった。

「須川！行ったぞ！」

ライナーが竜児のもとへと飛んでいく。

そしてそのまま　　突き刺さった。

「ちょ……ぶちょおおお……」

そのまま崩れ去った。

何かと不安が残る野球の練習だった。

17話 天国？

「よし、今日はここまでだ」

日が沈みかかったころ、部長が声を上げた。

グラウンドには無数のボールが転がっており、回収するのにも嫌気がさす。

何よりも……暑い。

馬鹿みたいに愁兎はボール集めるのにも走っているし、水原はそんなに運動する

タイプではないのだろう

ベンチにすでに座っていた。

そこで竜児といえば一塁で倒れたままだし、土幸くんは竹刀振っているし。

これ、引き受けていいのか？

大きな不安を抱える中、大智君が駆け寄ってきた。

「ご苦労様、みんななかなかうまいね」

きらっと光る笑顔がまぶしかった。

流石は野球部部長だ。ぜんぜん息が切れていない。

まあ、部長がパカパカ無差別に打ちまくってただけだからかもしれないが。

「そうですか？ 僕とか……水原とかは大丈夫でしたか？」

「結構センスあるとは思うよ。守備、たいぶうまかったしね」

野球経験がなかったのにそんなことを言われるなんて思ってもいなかった。

これもいつも馬鹿なことやってるおかげなのかもしれない。

「そういえば、練習試合の相手ってのはどこの高校なんですか？」

特に詳しいわけではないのだが、知っておいて損はないと思う。

いまや、スポーツもデータだからね。

「そーだね、確か……武領学園だったかなあ？」

「へー、つてええ！？ そこつて甲子園常連出場校じゃん！」

そんなことぐらいは分かった。

新聞の高校の野球欄をいつものように占領している高校である。

主将の名前は確か………灯山とうやま 翔かけるだった気がする。

全国模試のトップにも名前があった気がする。

完璧な人間なんて部長以外にはいないと思っただけど案外近くにいたものだ。

「そうなんだよ。だから食中毒だって理由で断りたくなかったんだよね。」

折角、相手方も時間を取ってくれてるんだから失礼の無いようにしなくちゃ」

「いや、部員じゃない僕達が出てる時点で失礼だと思っただけど………」

というか本当にそうだろう、あっちからしてみれば馬鹿にされているような気分だろう。

まあ、そうならないために練習してるんだけどね。

「じゃ、今日はもう解散でいいかな？ 救部の部長さんもそう言うてるし」

「いいんじゃないですかね」

片付けが終わった愁兎がこちらに走り寄ってくる。

「みんな汗かいたんだからさ、風呂研究会いってシャワーでも浴びてこないか？」

「いつもと違ってまともな発言するね、愁兎。いいんじゃないかな？」

「なにおう！ 俺だって普通のことぐらい言うわい！」
部長や水原も同意し、みんなで行くこととなった。

「で、まじめなことの裏にはこんなことがあったのか」
まるで銭湯のような大きな風呂だった。

壁には大きく富士山が描かれ、もはや銭湯としか言いようが無い。
そこはいい、そこはいいんだ。

邪悪なのはこいつらの心だった！

「へへへ……風呂といったらのぞき……それしかないだろう！」
「ふっ、分かっているじゃないか愁兎君……」

いつもにまして普通のこと言うと思っただらこれが目的かよ！
確かに上はつながってるけどさ！

「あ、あの……いつもこんな感じなのかな？」
大智君が恐る恐る聞いてきた。

「そうだね……もう疲れてきたから放っておこうかな……」
「いやいやいや！ これは流石にまずくない！？ ほら！あの二人、
桶とかイスとか組み立ててるし！」

「行動速っ！」

瞬く間に階段が出来上がっていく。こいつらは阿呆な事になると行
動力が上がるからね。

というか竜児は食中毒でさっきまで倒れてなかったっけ？
「もうすぐで天国^{ヘヴンズ・ゲート}への扉がひらくっ！」

「ふはははっ！ 姉貴のBodyを久しぶりにっ！」
こいつらあほだ！

「いや！ いいかげんにやめとけて！ これは殺される気がする
！」

そいつた僕に、2人は声をそろえてこう言ったんだ。

男には、死ぬと分かってもやらなければならぬ時が
あるんだ

「くそう……もう一度だ、もう一度！」

「その息だ！ 愁兎、俺達はいける！俺は、俺を桶を集める！おお
おおお、今こそこの力

を使うべし！ 竜児ゾーン！」

「な、なに！ 竜児に桶が引き寄せられていく！？」

どんな無駄能力持ってんだこいつ！

「っていうか、野球のとき使ってほしいよね」

大智君の冷静な突っ込みが入った。

結局、壁の向こう側を見ることが出来なかった2人を連れて、外に出た。

「何でこの2人はこんなにテンションが低いんだ……？」

部長が少し濡れた髪をいじりつつ、そう言った。

「まあ、試練にぶつかって大変だったんですよ……そっとしておいてあげてください」

「どうせ、馬鹿お二人さんのはぞきでもしようとしていた口でしょう。」

まったく馬鹿ですね……。まあ、のぞいたところで待っているのは地獄だった

でしょうけど

カバンから怪しげな金属音を響かせながら水原は言った。

「そんじゃ、明日からも練習がんばるぞー！」

部長の掛け声に、乗り切れてない2人がいた。

18話 対決：VS

「ふっ………ついに対戦の日がきたか」

「そうですね。私は完膚なきまでに負かしてやることをお勧めします」

女子軍 部長と水原は、かなりやる気だった。

場所は、武領学園グラウンド。

うちのグラウンドよりは狭いが、それでも立派な設備で、観客席も用意されている。ちなみに大型得点版も。

流石は、甲子園常連出場校だ。力の入れ方が違う。

確かにこれならやる気が出るかもしれない。

その一方で、須川だけが微妙なテンションだった。

「どうした？ 竜児。やけにやる気が無いように思えるんだけど……」

「ふん、気づいたかい？ ハル君。そう！ うちの学校にチャリダーがいらないのは

なんでなんだっ！」

「ええっ！ それだけの理由でっ！？ 目的が変わってるじゃん！」

「馬鹿だなあ………ハル君。チャリダーあってこそその野球なんだよ！」

野球の根源から間違えてますから、それ………。

まあ、竜児は放っておいて、今日まで練習をつんできた土幸君はどんな感じだろう。

ざっとベンチを見渡すが、ベンチの上には土幸君は見え、視界の端のほうに捉えた。

ベンチにも座らず正座し、目を閉じている。いわゆる黙想中。

そこだけが切り取られたかのように、江戸時代を連想させる。

ちなみに横には竹刀がおいてある。

「むっ、これくらいでよかるう。ん？ どうした、ハル殿」

殿つて……。これは突っ込んでいいのか分からない。

「いやあ、調子はどうかと思つて」

「ものすごくいいぞ。今日も朝から百人切りを行つてからきた」

何してんだこの人！

「心配する必要は無い。みねうちだ」

この人ボケ振つてるよね。突っ込み待つてるよね？

計算し尽くされたボケだよな！？

「それに、新しい打法も考えついた。かーぶ、とか言う球も打てるだろう」

「そ、そうですか……………」

グラウンドを見渡すと、相手チームのベンチに向かつて歩いていく大智君の姿が見えた。

「久しぶりだな。灯山とうやま翔かける」

「まだ野球をやっていたか、二千 大智」

灯山 翔。武領学園野球部部长。

普通の高校球児のはずなのに、威圧感というものが違う。

これが全国レベルの精神力というもののなか。

「君を負かすために練習を続けてきた。そしてやっと練習試合にまでこぎつけた……………」

今日は勝たせてもらつよ」

「ふん、お前のチームは食中毒で全滅だと聞いていたが……………素人が入つて勝てるのか」

「関係ないさ。僕の球は僕の後ろに飛ぶことなんてないんだから」

「その言葉、そっくりそのまま返そう」

そういつて、背を向けた灯山に、声がかかった。

「お前が、武領学園野球部部长か」

それはついこの間依頼した部の

部長、霧谷 小冬だった。

「だったら、なんだ？」

「今日、私たちは本気で勝負しにきている。お前たちも本気でこないと負けるぞ」

「ふ、分かっているよ。勝負だからな。勝ちに行く」

「私らは 強いよ？」

「面白い」

シリアスな雰囲気の中、アナウンスが鳴り響いた。

ただいまより、練習試合を行います。両者は、グラウンドに整列してください

「始まったか」

「そうですね……霧谷さん」

挨拶が終わり、再びベンチに戻ってきていた。

「そこで、作戦なんだけど、打順はこの間決めたとおり。作戦も……話したよね」

大智君が真剣な眼差しで、ミーティングを始める。

気合が入っている。

僕は先攻。1番バッターは水原だ。

「水原……大丈夫？」

「余裕です、先頭打者ホームランでもかまいませんよ」

「それだけ軽口がたたけるなら余裕だな、よし、行け！ 水原！」

「オツケーです。部長」

試合が始まった。

「相手のピッチャーが………灯山じゃない？」

マウンドの上には、灯山の姿は無かった。

「なめられたものだな………本気で戦うといったはずなんだが」
部長が、目を細めながら言った。

「これは引きずり出すしかないっしょ！俺がバカバカホームランを打ってさ！」

「馬鹿馬鹿の間違いじゃないか？ 愁兎」

「馬鹿じゃねー！」

霧谷姉弟は緊張感がないなあ………

「でもそのとおりだよ。引きずり出さないと………」

大智君は、こぶしを強く握り締めながら言った。
部長はそれをただ、眺めていた。

キーン！と快音が響いた。

グラウンドを見ると、球が飛んでいた。

だが、高すぎる。詰まったらしい。これじゃあただのフライだ。

「チツ、打ち損ねましたか」

あっけなくボールはピッチャーのグローブに納まり、アウトとなった。

ヘルメットをはずし、水原が帰ってきた。

「あのピッチャー。結構上手いです。一筋縄ではいきませんね」
水原がほめるとしたら、よっぽどだ。

「ただ、俺たちの目的はその人じゃない。灯山だ。」

「次は僕だね。ゲームで鍛えた反射神経舐めるなよ！」

三振！

審判の野太い声が響いた。

まあ、期待はしてなかったけどね。

ベンチは静まりかえっている。竜児にとっては地獄だろう、でもみんなはきつと

楽しんでる。たちが悪いよね。

「えーと、すみません。」

「次は僕かな。……がんばってくるよ」

「ハルならいける！がんばれ！」

「僕の存在……」

ヘルメットを着用し、バッターボックスに立つ。

こんなこと、高校生活の中で体験できるとは思っていなかった。

打てば大丈夫。あとは4番の愁兎がかつ飛ばしてくれる。

深呼吸して、バットを構える。

ピッチャーがモーションに入り、投げる。

風を切って進む白球は

速い。

「ストライク！」

エースじゃなくて、この強さ。

流石は、野球名門校だ。

そのあとも、バットを振るが、あたらずじまいで、結局三振だった。

「ハル。ナイスファイトだ」

「グツジョブですよ。鳴川 春希」

「僕のときとのえらい違い。あれえ？ おかしいな」

次は守備だ。大智君は、マウンドに立つ。

キャッチャーは愁鬼だ。

「二千 大智。どれだけ成長したのか見せてもらおうか」

相手側のベンチには、不適に笑っている灯山がいた。

19話 交代

「バッターアウト！ 三振！」

審判の太い声がマウンドに響き渡った。

「いよっしゃあ！ いい感じだけ、大智！」

愁兔が大智君に呼びかけ、ボールを投げ返す。

なかなかいい感じで大智君のボールは切れていると思う。

カーブ。それが大智君の必殺球。切り札。

野球部部长という肩書きは伊達ではなかった。

大智君はボールを笑いながら受け止めた。

振りかぶり、上体をひねって投げる。

ズバン、という鋭い音とともにストライクの声が聞こえる。

「大智君、調子よさそうだ」

この試合。いい戦いになりそうだ。

「で、次のバッターは部長か」

「そうだな。いっちょホームランでもとってくるか」

そういつて部長は金属バットをつかみ、バッターボックスに立つ。

ヘルメットからは、長い黒髪が零れ落ちている。

ギーン！ という快音が聞こえ、軽々とフェンスを越した。

それはホームラン。部長、ほんとにやったよ……。

ニコニコと、満足気な笑みを浮かべて、ベンチに戻ってくる。

「部長。たった3行程度の間にもホームランを打つなんて流石です。

私は感激しました」

「3行つてどういう意味？」

なかなかかみ合わない会話の中、試合は進んでいく。

そして8回表、こっちのチームの攻撃。0-3でこちらが勝っている。

そんなとき、灯山 翔が叫んだ。

「ピッチャー交代だ。俺が行く」

そう言ってベンチから出てくる。

マウンドに立つと、ものすごく威圧感がある。

こちらのバッターは……俺。

「俺は少し舐めていたのかもしれない。お前たちのチームをな。そして二千 大智お前の

カーブも前よりもキレが増しているな………だがな。その間、俺も成長している

ということを忘れるなよ」

そういうと、灯山 翔は振りかぶった。上体をありえないくらいにひねる投法。

これは トルネード投法。

ズバァン！ というキャッチャーミットにボールが収まる音。速すぎた。それも比べ物にならないほどに。

ストレートでこの脅威。この先これを打つことが出来るのかという絶望感に襲われる。

気力を削ぐ。そんな力がこのストレートには込められていた。

「部長、すみません。振ることも出来ませんでした」

「仕方ないな、ハル。アレは私でも反応できるかどうか」

ずん、と重い空気が漂うベンチ内。

「やっぱり、無理なのかもしれない」

大智君がそういった。

エースである大智君が、言ったのだ。

それは何を意味するか、……………チームの崩壊。

「大智、何言ってるんだよ。こっちは3点も余裕があるんだ。勝てるって」

そんな愁鬼の言葉にも、反応を見せなかった。

「どうしたものかな……………」

部長がそんなことをつぶやいた。

「次のバッターは……………」

結果的に灯山の球に追いつくものはおらず、8回裏、相手チームの攻撃となった。

そして、ここから悪夢が始まった。

バッターは灯山。ピッチャーは大智君。何かの関係があるのか、2人は真剣である。

「こいよ。俺がかつ飛ばしてやるからな」

「……………」

「得意のカーブで、だぜ？」

「……………お前は、俺のカーブを打てたことが無かった」

「そうだな。お前のカーブは肩口から入る、ゆえに打とうとすれば詰まるだろう」

2人は無言になり、大智君は振りかぶる。

投げた。肩口から入るカーブ、さっきよりもかなり速い。

ギチッ！ という音を鳴らし、ボールは後方へ。バックフェンスに当たり、ファウルとなる。

「流石……………というべきかな」

「……………」

「何か言ったらどうだ。二千 大智」
「お前を……カーブのみで打ち取る」

馬鹿だ。お前は……いつまでたつても馬鹿だ。何に執着している。あれはもう終わったことだ。振り返ろうが何も残っていない。なのに、なのにまだ、あいつのような眼をするのか！ お前は！ もう一度言っ。お前は馬鹿だ。執着していることも、あえて俺と敵対することも。

だから分かせてやろう。それは無駄な努力だったと。奴が振りかぶる。必ず来る。あいつのカーブが。

「全部。お前の甘すぎる考え全部を！ 粉々にしてやる！」

ガキーン！という音が鳴り響き。白球は軽々とフェンスを越え、場外へ。

場外ホームラン。

「お前は……馬鹿だ」

それだけを吐き捨て、ベンチへと足を向けた。

それから大智君は、糸が切れた操り人形のように無力になり、ボールはピッチャー

後方を軽々と突き破る。

何とかみんなで守ったものの、3・5と、逆転されてしまった。

「すまないみんな。ここまで付き合わせて悪かった」

大智君がそう切り出した。

「もう。いい。終わったんだ。あいつには届かなかった。そして、

灯山にも。

そもそも依頼は『野球の試合に数合わせで出てもらうこと』だったんだ

だから……もう、いいんだ。負けても」

「お主……本当にそう思っているのか？」

今まで存在感が無かった土幸君が唐突に話し始めた。

「負けてもいいけど？ 馬鹿げているだろう！ 戦いの途中で刀を捨てるなど、生きてないのも

同じ！ いや……もはや殺されるだけの道具よ！」

いまいち理解が出来ないが、ここはシリアスモードである。（だから突っ込めない）

「ははは……依頼が『野球の試合に数合わせで出てもらうこと』だと？ そんなこと

私は知らんな。私は『野球の試合に勝つこと』で受けているのだからな。そんなひ弱な

依頼だとしたら私が受けるわけ無いだろう。私は私のために、依頼をただクリアするためだけに

戦う。この試合の負けは依頼の放棄に値するな。次のバッターは私だ、みんな見てろよ」

そういつて部長はニコニコ笑顔を取りやめ、真剣な顔つきでバッターボックスへと向かった。

どうするんだ」

冷たく、突き放したような言い方だった。

気が付けば僕は灯山につかみかかっていた。

あたりは精神地獄。誰もが最悪の心境だっただろう。

僕を強引に引き剥がすと、灯山は立ち上がったと言った。

「お前はずっとそうしている。俺は先に行く。自分で泳げないような奴は溺れればいい」

僕はその言葉がズシリ、と心にのしかかった感じがしてやまなかった。

勝つにはこれしかなかった。

あいつの決め球カーブを磨くことしか。

「そういえば、さっきはよくもコケにしてくれたな」

「何の話だ」

「ピッチャーだよ、ピッチャー」

「ああ、そのことか。………すこし話をしないか」

「聞いてやってもかまわないが」

マウンド上では何かが起きている。でもここからではよく分からな
い。

「そんなときに、水原 闇音の便利グッズコーナー」

「み、水原？ 何考えてんだ」

「遠くの会話が聞きたいとき、そんな時ありませんか？」
「ソレは盗聴と言っただぞ」
「そんなときにこれ、盗聴君ver97です」
「97作品目でないことを祈る」
「そういつて水原はイヤホンをとりだす。」
「これで会話を聞けます」
「だから盗聴だね……」

「過ぎた過去に意味はあると思うか」
「さあ？ そんなもの人それぞれじゃないかな」
「俺は意味がないと思っている。ソレは過ぎ去ったもの。もうここには『無い』んだ。」

「ではそれに執着する人間はなんと言っか知っているか？」
「……………さーな」
「愚か、だ。そう、二千 大智のようにな。過ぎ去ったものについてまでも執着しているから」
「先に進めない。そうだろう？ 常に人というものは新しいものを求める。」

過去の栄光などと同じように、過去のものには意味など無い。分かるか？」
「はっ……………どんな宗教に入ってるか知らないけどな、布教するのだけは勘弁だよ。」

「いいからさ、さっさと投げなよ」
「分からないか……………ならばお前も愚かだな」
灯山君は投げの体制に入る。
同じトルネード投法。部長でも難しいと言っていた。

キィィィィン！

バットから快音が聞こえた。ボールは？ どこへ行った？

「もうスタンドに入ってますよ」

水原がそういった。と、言うことは……

「ホームラン……だと、バカな。俺の球が？」

「あー、こりや綺麗に入ったな。ま、残念だったな。少年。私は超人だから仕方ない。

それとな　　ちよつとばかりイライラしてたもんでね」

部長。かつこよすぎですわ……。

「おい、長武。次はお前だったろう？　いつちよ行ってこいや」

「承った。俺の真の力、見せてやるうとするか」

続く長武君は何故か居合い切りの構え。

「ふ……超人なのは分かった……でもな、それ以外はただの雑兵だ
ろう！」

トルネードの中心点から放出される球、さつきよりもスピードが段
違いだ。

「武士に必要なのは太刀筋の美しさと考える人もいるかもしれぬが

……見切りこそが最強

だとは思わぬか？」

シパン！　と片腕の力だけでボールを運ぶ。2ベースヒット。

「な、なぜ……」

そこからか、灯山君の勢いは無くなり、6 - 5の勝ち越しに。

あとは守るだけなのだ……。

「大智君……大丈夫？」

「駄目なら超人の私が投げるが……？」

「いや、駄目だ。僕が投げないと……あいつの分まで僕が生きるっ
て決めたから。」

あいつの球で、討ち取るって決めたから」

そういつて目に先ほどとは違う光を宿した大智君は、マウンドに立

った。
順調に行けば、最終バッターが灯山君。
きっちり終わらせてほしい。

2アウト。出塁無し。

灯山君対大智君の戦いだ。僕達はもう見守ることしか出来ない。

「最初にも言っただけど……お前には負けない」

「ああ、そうだ。こいよ。俺が壊してやるから……あいつもろともな！」

ズバン！

「ストライク！」

審判が声を張り上げる。

「違うだろ。あいつの球で来いよ。カーブじゃない、あいつのもう一つの球で」

「……後悔するなよ」

大智君のフォームが変わる……これは、アンダースロー！？

ズバン！ ボールが下方から決るようにしてキャッチャーミットへ。

「ストライク！」

「ふはっ……俺が気づかないとも思ったか？ だから小細工はいんだよ……」

あいつが死ぬ前にオーバースローの練習をしていただろ？ そのときだよ

そのときに考えていただろ？ 俺を待たせるなよ……さっさと投

「げろよ！」

「お前は……分かっていなかった」

もとのオーバースローに戻る。でも、先ほどまでとは威圧感が違う。

「三人の……思いだった」

ぶうん、と球が投げられた。

ボールが心なしかぶれているような気がする。

「縦変化、お前らはそればかりだったよな！ どこに来るかぐら

い分かるわ！」

スパーン……とバットが空振りした。

「な………に？」

どこで間違えた？ 縦変化と言ったらフォーク。それぐらいしか習得出来ないはずなのに。

なぜ。なぜ、カーブと逆方向に曲がる？

「ナツクル」

「ナツクル……！？」

「お前があいつに教えた球だ」

あいつの死ぬ直前……あのとくに教えた？

「だからこの勝利は……ここにいて誰のものでもない、あいつのものだ」

「ははっ……なんだよそりゃあ！ ふざけんな！」

怒りを奮い立たせ、俺は大智の胸倉つかむ。

でも、そんなことではあいつは動かなかった。

まだそんな眼をっ……。

「悔しかったら……」

ポツリ、と大智が言葉を漏らす。

「悔しかったら！ 這い上がって来いよ！ あいつに負けなくらいの

の努力だよ！」

その目には涙が浮かんでいた。泣いているのか……

「お、俺が……あいつに負けるわけがねえだろうが！」

手を離し、目元をぬぐう。

「お前だって泣いてんじゃないか」

「うるさい……………」

試合は終わった。両者の涙とともに。

結果は、どうなったのかはわからなかった。

20話 積み重ね (後書き)

なんか無理やりなまとめ方に……… すいませんね、いろいろなことが重なってありましたから。これで一応野球編？は終わりです。次からは、はっちゃけていききたいです。

21話 初夏

初夏。そう、ついに夏がやってきた。残念ながら救部の部室には扇風機しか備え付けていないため、部室内の温度はすさまじいことになっている。

それも、部長だけが占領しているものだから困ったものだ。それにしても……………暑い。

「あゝあゝあゝ」

「部長、扇風機で遊んでるんならこっちに回してください」
今、部室にはみんな集合しているが、会話はほとんどない。
みんな暑さでくたばっているのだ。

「いやだあゝあゝ。ならハル、一緒に当たろうか？」

「えええ！？」

「それなら俺があ！」

一瞬にして竜児復活する。

「い、い、今部長と一緒に扇風機に当たるだつて！？ そんな夏服で肌との間がただ一枚の危険

極まらない天国にしかも相手が部長！？ 最コーだ！ 扇風機どころじゃねえ！」

暑さで頭がやられてしまっているのか、竜児はリミッターが外れているようだ。

確かに部長の体のラインは危険極まりないけど。

「須川は却下な。犯罪臭がするから」

「それについては、否定できません！」

そこは否定しろよ。

「だけど、この青春時代！ 夏にこんなことがあってもいいんじゃないかと思えます！」

「お前が言うともものすごく怪しく聞こえるのは何でだろう」

「なあ！？ ハル君は味方だと思っていたけど！」

「そんな仲間になりたくない！」

「分かった、姉貴！俺と当たろうぜ！」

愁兎も復活した。

「姉弟なら大丈夫だろ？久しぶりに姉貴と……………」

「死ねこのシスコンがあ！」

瞬きよりも速い速度で部長は愁兎との距離を詰め、拳を突き出した。

「なっ、がっはああああ！」

捻りを加えられた拳は、威力が倍増し愁兎を吹き飛ばした。

ドゴーン、と部室の角まで飛ばされていった。

そんな中、水原が立ち上がった。

「暑さをしのぐ、という点ではいい考えがありますよ」

珍しく水原からの提案だった。

「それは大丈夫なんだろうな」

「なんですか、鳴川 春希。そんなに私が怪しいですか？」

まあ、いつもの行動からしたら……………そう思うだろう。

「で、その考えてるのは？」

いつの間にか再び扇風機の前に戻っていた部長はそう訊いた。

「海にも行きませんか？」

その提案に、気絶している愁兎以外の全員が賛成した。

幸いにも次の日が休みの日だったので、すぐに計画が実行できた。

部長が、それならいい所がある！と言っていたので、どこに行く

かは部長に任せたが……。

「遅いですね」

そう水原が言った。

今は、学校の校門の前にいる。そこには俺と水原しか集まっていなかった。

俺は集合時間5分前にきたのだが、水原はもうすでにそこに立っていた。

ちら、と水原の姿を見る。白色のワンピースに麦藁帽子。片手にはバスケットを持っていて、

なんとも清楚な感じだった。水原の私服姿はなんとも新鮮な感じだった。

「何ジロジロ見てるんですか？ その目は潰すべきなのでしょうが、いつもと変わらないトーンでそんなことを言われては怖すぎて動くことも出来ない。」

「い、いやあ……似合ってるなあ、と思って」

「セクハラですか？」

「違うって！ほんとに思ってるから」

「……………そうですね。褒めていると受け取っておきましょう」

褒めているんだけどね。まあ、そんな水原が見ただけでも竜児は悶え死ぬだろう。

「うわああああ！ 水原がワンピースだとお！？」

うるさい奴がきた……………。

「やべえ、やばすぎる。眼福じゃあああああっ！」

いつもに増してテンションが何割増かしている。この調子で今日一日は持つのだろうか。

「ふふふ……………似合ってるよ（キラリ）」

「なんで須川 竜児が言うところも気持ち悪くなるのでしょうか。もはや言動が犯罪的ですね」

前半は俺も思った。

「何で！？ もう、水原！ すきだあああ！」

「うわ、ついにぶっ壊れた！」

「土に還ってください」

バチィッ！ という音とともに竜児は倒れ、痙攣を起こし始めた。

「ちよ、水原！ それスタンガンだろ！」

「そうですね、もうワザビームでは効かないと思ひまして」

「だからってこれは殺傷能力高すぎでしょ！」

「土に還るためにはまず死ななければ話にならないでしょう？」

そんなこと、真顔で言うな真顔で。

「おお〜い」

向こう側から部長と愁兎が走ってきた。

「悪いいな。姉貴が水着をどれにするかなんて選んでるんだから」

「いつ、言うなあ！ それは言っちゃ駄目だつて！」

初っ端から部長のキャラ変更が……そんなもの気にしない人かと思つてた。

「な、何だハルっ！ その目は！」

「いや、何でもないですけど………」

そつえば部長はメイド服とかそついう系のときは嫌がつたりしてたな。

「部長の水着！？」

途端、竜児が復活した。今回はめちやくちや復活するなこいつ。

「俺の残り残起ざんきは5だ！」

「マ オかお前はっ！」

「というか漢字はそれであつてるのか………？」

久しぶりに部長が突っ込んだ。

「さて、バス停に向かいますか。もう少しでバスが来ますよ」
水原がそつ促した。

バスの中はクーラーが効いていて、涼しかった。

休日の朝ということで、そんなにも混んでいなかった。

「空いていてよかったですね」

「そうだなー、快適だ。部室にもクーラーが欲しい」

「部長、それは頼んでなんとかならないんですか？」

「それは生徒会に申し込まないとなあ。部費をくれって」

「生徒会だと!? あのハーレムがどうかという奴か!？」

「そこまですてくれ竜児……………なんか怒られそうな気がしてならない」

前の席から身を乗り出す竜児はそんな危険を考えていないらしい。

ちなみに俺の横には愁兎が、後ろの席には水原と部長が座っている。

「そういえばどのくらいで着くんですか？」

俺は後ろの席に座っている部長に訊いた。

「そーだな。小一時間ってところかな。それまでまあ、話でもしよう」

大きな太陽が照らす中、救部一行が乗ったバスは海へ行く。

22話 前者の話

夏といえば海、と思う人もいるだろう。木陰の中、夏風に吹かれながら読書と思う人もいるかもしれない。

間違いなく後者のほうは、清楚で可憐なお嬢様、読書家の眼鏡の子などの絵が思い浮かべられる。

何故、全員が全員女の子に固定されているかということそれは竜児が乗り移ったからかもしれない。

そして、前者を選ぶのがこの俺たち救部のメンバーだった。

海についてから男女のグループに分かれ、海の家で着替えを始めた。竜児と愁兎が暴走を起こそうとしていたが、水原がスタンガン所持していることを告げると、

2人は回れ右をして、着替え始めた。

竜児なんかは、軽いトラウマになったみたいで、軽く青くなっていた。そして男性陣は砂浜で女性陣を待っていた。

「さて、姉貴がどんな姿でくるのか……………」

「愁兎は部長にしか興味ないのか」

「あつたりまえだ！ というのは嘘で、まあ体がいい人なら誰でもな？」

「最低の発言をしているからな……………」

竜児が珍しくこんな会話に割り込んでこないと思ったら、後ろのほ

うでカメラを構えていた。

「何してんだよ」

「い、いや、ハル君これは別に盗撮とかじゃあ……ないよ?」

「何で疑問系!?!」

「ハル、分かってやれ。これは竜児の戦いだ」

「意味わかんないし!」

『さて、君。こっちに来てもらおうか』

「これは盗撮とかじゃなくてただ、友達を撮ろうとおもって……」

『あー、はいはい。後から話し聞くからねー』

「ちよ、ちがつ。待つてえええええ!」

「あれ? 竜児が海の家の人に連れてかれてるんだけど……」

「まあ、気にするな。それより姉貴たちが来たぞ」

そこには、灼熱の赤の色のビキニを着た部長と、スクール水着の水原がいた。

部長は少し照れながらも堂々と立っていた。その姿がまたある特定の人を喜ばせるようだった。

そして水原、こいつもまたある特定の人を喜ばせるような格好をしていた。

よりによってなんでそれをチヨイスするのか?

ネタだよな、絶対ネタだよなこれ!?

「どうしました? 鳴川 春希。私何かおかしいですか?」

真顔で聞いてくる。そんなこと真顔で……。

「み、水原……お前は何でそんなものを着ているんだ」

「え? おかしいですか、そうですか……」

さて、そこで何故そんな顔をする。

「部長、どうなってるんですかこれ」

「私にもわからん。水原は別次元に旅立ったのかもしれない」

「あつ、姉貴い！ やばいよそれ！ 俺の頭がおかしくなりそうだよ！」

「お前はいつもおかしいだろうが！ 寄ってくるな！」
そんな混乱の中、竜児だけが欠けていた。

「はあ、カメラ没収されちゃったよ」

ため息をつきながら竜児が海の家から戻ってきた。ちなみに水原は、スクール水着から普通の

水着に着替えていた。やはりアレはネタだったらしい。すごく助かった。

「あたり前だろ、お前が友達を撮る、なんて言っても信憑性の欠片もないからな」

的確に愁兎が突っ込みを入れる。

確かにそれにはここにいる全員満場一致だろうから。

「とりあえず昼まで遊ぼうか、午後からは大会があるからな」

「大会？」

部長と愁兎以外は分かっっていないようだった。

それから俺はたちは午後になるまで、泳いだり、ビーチボールを

楽しんだり、竜児を沈めたり、砂浜で走り回ったり、潜ったり、竜児が監視委員の人に連れて行かれたりしていた。

そして昼。俺たちは海の家の一室を借りていた。

「今日は私が弁当を作ってきました」

水原はバスケットからいくつもの弁当箱を取り出して、机の上に並べた。

「おお、やるなあ水原、救部に料理が出来る奴がいるのはうれしいぞ！」

部長はなんかよく分からないところで喜んでいた。

いろいろな弁当箱から、おにぎりやサンドイッチ、たこさんウイナー、卵焼きetc.....。

とにかくすごかった。

「すごいな.....」

「私だって、得意なことの二つや三つはあるのです」

「た、たこさんウイナーだと.....可愛すぎる.....」
横では竜児もまたも悶えていた。

「しかもかなり美味い.....水原、天才だな」

「姉貴の言うとおりだ！ もう、明日から俺の朝飯を作ってくれ！」

「それは告白ですか？」

「なに！ 遠まわしに告白したはずなのに.....」

最近愁兎も竜児色に染まってきたのかもれない。

初期の爽やか設定は何処へ消えたのだろうか.....。

「そういえば、午後から大会があるとかいってたけど何の大会ですか？」

水原が卵焼きを口に運びながら部長に訊いていた。

「ん、ああ、それが。それはなー。一チーム2人構成でのビーチバレーボール大会だ！」

「俺と姉貴はさ、去年もここ来てたしな。毎年盛り上がるんだぜ」

霧谷姉弟は、得意げな顔をして語っていた。

「そうなのか。じゃあ今年も出場するのか？」

「そうだなー。出るかもな、もちろん俺は姉貴と組むんだけど……」
「そうか、人数が合わないな。」

「まあ、まて。……この大会は、男女ペアじゃないと出れないんだ」

「そうですか。ならば私は鳴川 春希と出場しましょう」

「えっ！？ 僕は？ 僕はどーしたらいいんですか！」

「その点はぬかりない。ちゃんと策を用意してある」

部長は得意げに笑った。それに対して竜児は安心できないようだった……。

23話 ビーチでバレー

さてさて、今年もやってまいりました。『男女！ビーチバレーボール大会！』。今年はどんな戦いになるのか楽しみですよ！ それでは、解説者の方を紹介しませう

スピーカーからは大音量で司会者の声が聞こえる。なんとも大掛かりな大会だ。

しかも解説者までいるなんて……………。

「どうだ？ ハル、すごい盛り上がりだろう？」

会場の裏側にある選手控え室で、俺たちは出番を待っていた。

「そうですね部長。こんな大会に毎年出ているんですか？」

「そうだ。なんとと言っても優勝商品が毎年豪華なもんでな。参加費が要らないってのにすごいものだ」

参加者は、ざっと10チームはあった。どれも遊び半分ではないようなチーム構成だった。

「あれなんか見てみる、去年の準優勝チームだ」

部長の目線の先には体脂肪率0パーセントの筋肉だけで体が構成されています！ といった感じの

男と、スレンダー美人とでも言うのだろうか、細身の女性がベンチに座っていた。

なかなか強そうだ。

「そ、そんなことより部長……………僕の相手は？」

気づけば竜児が隣に立っていた。

「あー心配するな。もう来てる」

部長がそう言うと、透き通った声が聞こえてきた。

「小冬」

声のするほうへ顔を向けると、そこにはいかにもお嬢様、といった

感じの女の子が立っていた。

女の子、と言っても同学年なんだろうけど、俺よりも背が高い。

「おー、よく来たな。逢香^{あいか}、メールで伝えたとおりだ。がんばってくれ」

「それで…………私のパートナーは…………？」

逢香、と呼ばれた女の子はキョロキョロとあたりを見回す。その行為がとても可愛らしかった。

はっ、これじゃあ竜児が覚醒してしまう…………！

「て、天使……………」

竜児は跪いていた。確かに白い水着を着用しているけども。

「あら、こんなところに…………どうも、よろしくね」

ふわり、と何もかもを包み込んでしまうような優しい笑顔に竜児は涙を流していた。

「おっ、おう……………。俺は……………」

どうやら懺悔が始まるらしい。このパターンはどう対処すればいい？部長に目線を送るが、両手を上に挙げられて分からない、のポーズ。

「……………そんなに頭を下げないください……………ほら、一緒にがんばりましょう？」

そういつて竜児に手を差し伸べる逢香さん。本当に天使だ。

「お、俺ごときが……………触れていいんですか……………」

完全に竜児が下手に出ている！最強だ、逢香さん……………。

「皆さん申し遅れました、私、東界^{とうかい} 逢香^{あいか}といます。どうぞよろしく」

再び天使スマイル。完璧超人の部長の周りにはやはり完璧人が集うのか…………。

「部長とはどんなご関係で？」

気づけばそう訊いている俺がいた。

「そうですね…………ナンパされていた私を助けてくださったとか…………

…同じクラスですとか…………

そんな感じでしょうか？」

やはり部長は人助けから始まるのか。

突如、背中に電撃が走った。

「うわばばば！ み、水原、なんのつもりだ……」

「すいません、ちよっと手が滑りました」

そういう表情からは何も読み取れない。

「いや、手が滑った以前に何故それを今持っている……？」

「蟲を殺すためです」

それでは、選手の入場です！

そんな時、アナウンスの声が響いた。

「さて、お呼びだぞみんな、さつさと行くぞ！」

部長に促されるまま、会場へと出た。

な、なんだと！ 今年も霧谷姉弟が出てるぞおおおお！、

まじか！ 今年も大荒れの予感がする

ぜ！、いやまで、今年は新人が多い、誰かが力を解放するかもしれない、新たな時代を築くのか！

などといった勝手極まりない声援が送られる。というか部長と愁鬼は大会荒しかなんかなのか？

「今年も観客のテンションが高いなあ」

「毎年こうなのか……」

「そうさ、ハル！ 俺と姉貴はさいきよーだ！」

「……………」

「去年は最終的に戦場に立っていた奴が優勝だったよ」

「ビーチバレーボール関係なし！？」

そして、一回戦。部長・愁兎チームは相手にサーブ権を一回も渡さずに勝利。しかし、強すぎるな。

去年の準優勝チームも勝っていたし、竜児のチームも逢香さんがなかなか強くて勝利。

そして俺たちの番。

「水原、用意はいいか」

「全然オツケーです。完膚なきまでに潰します」

眼光を鋭く光らせて水原はサーブ打った。

ぽすん、という音を立てて、相手のコート内に落ちた。

「部長達がサーブ権を一回も渡さずに勝利したのなら、私たちはボールに触らせないで勝利します」

「え、ちよ、水原？」

いつになく本気のオーラで満ち溢れている。

で、出るぞ！ あのお嬢ちゃん的能力だ！

ギャラリーが意味不明なことを叫ぶ。

ぽすん、とコート内にボールが落ちる。俺は後ろを向いているから分からないが、水原は別に

強く打っているわけでもなく、ただ山形やまなにボールが飛んでいくだけで、俺にでも出来

そうだった。しかし何故相手は動かないんだ？

、ふふふ、分かってないなあ、ボウズ、動かないんじゃないよ
く、動けないんだよ
サイレント・ショット
沈黙の追撃って所かな

暑さで頭が逝っているのか、ギャラリーが言う。なんか調子こいて
きてるな……。

「鳴川 春希。あなたは構える必要なんかありませんよ。こっちを
見ていてください」

言われたままにみていると、気がついた。いつの間にか水原の手に
はボールがなく、
すでに相手コート内にボールは落ちている。

山形のボール、動かない相手、沈黙の追撃、そしていつの間にな
くなるボール。

そう、サーブのモーションが見えないんだ。

今年の大会は荒れそうだな

またもギャラリーが騒ぐ、いいかげんうるさいな……。

そのまま一度もボールに触れることなく、一回戦は終了した。

「どうでしたか、私の華麗なるサーブは」

「いや、もうなんかチートの領域だった気がする」

次は2回戦

。

24話 基本が

2回戦はチームが5つになるので、くじ引きでシードを一つ決めた。シードになったのはまあ、部長のチームなんだけども。

そして次の俺たちの対戦相手は昨年準優勝だったといわれるチーム。今回は水原も、

「私のサーブは通用しそうもありませんね。鳴川 春希、動ける準備をしてくください」

と言っていた。たかがビーチバレーでもそんな本気に……。

さて、ここで今回の優勝商品を紹介しましょう！ まず優勝者には『ふあなそにつく』さんの

クーラーです！

おっと、なんか仕組みられたかのような優勝商品だな。いや、部長はこれを狙ってここに……？

ちらり、と向こうのベンチに座っている部長を見ると、目が光っていたような気がした。

そして、準優勝の方には！ 海の家限定の商品券です！

一位と二位の差が激しいのはもうパターンだな、……だからこそ燃え上がるんだが。

準備が整ったようですよ！ それでは2回戦を始めちゃいましょう！

「ふふふ……… 昨年準優勝したその強さ、とくと味あわせてもらおうか」

「おい、受け身の文になってるからな。お前らが昨年準優勝したチームだぞ」

「おっと、間違ってしまったな。まあいい。俺らは強いな？」

「なんで疑問系なんだ……」

もしかして頭の足りない奴なのかもしれない。無駄に筋肉ついてるし……。

「鳴川 春希、相手にしても無駄ですよ。ちょっとばかし痛い人らしいですから」

初対面の相手に酷い言い様だな……。まあ、それでこそ水原だが。

「ふふん。俺を馬鹿にしたな……。後悔させてやる！」

お、今度はちゃんと言えたようだ。

「いきますー！」

水原がサーブを放つ。これもモーションが見えず、山形に落ちていく。

「そんな技、俺たちには通用しねえ！」

男が喰らいつき、レシーブでボールを真上に上げる。

そして宙に浮いたボールを女がトスで支える。

「食らえ！ 筋肉アタック！」

ギョーン！ と空気を裂き、こちらのコート内に突き刺さる。

男はどや顔で筋肉を見せ付けてくる。暑苦しい……。

「流石は昨年準優勝チームですね。しかし、こちらには鳴川 春希がいます」

水原、ハツタリなんか通用しないって……現に俺動けてなかったじやん。

「な、なんだと……。そのにーちゃんはそこまで強いのか……面白い！」

おい、まったくの逆効果だと思いが……。

水原はしまった、という顔をしていた。

「水原、お前が作戦をミスるなんてな」

「こ、これも作戦のうちですよ」

絶対動揺してた。

その後水原の特別サーブが放たれるも、相手にはまったくの効果なし。
相手のアタックもそこそこ取れるようにはなってきたが、まだキツイ。

俺はすでに砂だらけになっていた。

「はあ、はあ、……………きついな」

「ふはははん！ どうだ俺の筋肉は！」

もう相手チームの一人が暑苦しくてやつてられない……………。

筋肉やるうはものすごくスタミナあるし。

水原もかなり汗を流していた。

「そんなに見ないください。冷静さが売りですから」

そういうことは言わないほうがいいと思うぞ、水原。

さあ！ マッチポイントです！ 流石に昨年準優勝は伊達じゃないと思います！

スピーカーから大音量の声、確かに馬鹿ではあるが強いな……………。

「はっは！ 俺の最後の筋肉サーブだ！」

バアン！ とビーチボールを叩き割りそうな勢いでサーブを打つ筋肉野郎。

空気抵抗でブレながらも前進してくるそれを俺はレシーブで受ける。

「任せてください」

次に水原がトスで真上に上げる。

「いくぞおおおおお！」

ガラにもなくテンションの上がる俺。ボールを思いっきり相手チームのコート内に叩きいれる。

「筋肉なめるなあ！」

男の怒号が響いたと思った瞬間、俺の視界は筋肉で覆われた。

「は？」

ボールはその筋肉に阻まれ、こちらのコート内に跳ね返って落ちる。それはブロック、と呼ばれるものだった。

.....
.....
.....

「まあ、しょうがないですね」

「まあ、そうなんだけどな」

なんだか腑に落ちない結果だった。

続いて竜児のチームの対決。

まあ、言わなくてもこれは竜児が足を引っ張った、という結果である。

なににせよ集中攻撃だったからなあ。

こればかりは同情する。

「す、すいませんでした……逢香様……僕は、僕はあ！」

「そ、そんなに頭を下げないでください。頭がもう砂に埋まって見えていませんよ……」

それはすごくシユールな光景だった。

「もう踏んでください、そして僕をこのまま旅立たせてください！」

「そんな……そんなこと言わないで、生きていきましょう？ 私と」

「え？ わたしと？」

部長が獣のような笑みを浮かべた。

試合の結果。覚醒した部長チームを止められず、筋肉は敗北した。

アレはもうただのいじめに見えた。

なんだろう……プロチームが必死になって近所の子供と対決する
見たいな。

「お、俺の筋肉があ……」

「まあ、また来年がんばれ、私たちはもうクーラーが手に入ったから来年は外に出ないだろうがな」

基本的に駄目な人だった。

24話 基本が（後書き）

えっとお……………最近はちょっときゅーぶ不調です。

25話 会議で過去

「さて、最近は何んだか部室で話し合いをしていないと思わないか？」

ビーチバレーボール大会で勝ち取ったクーラーの設置も終え、快適な空間で涼んでいた

部員に急に問い掛けた部長。

いつも通り何を考えているか分からない水原は一度部長に目をやっただけで、すぐに読んでいた

ハードカバーの本に目を戻してしまった。

竜児はプラモデルを組み立てている様子で、話なんて聞いていないだろうし、愁兎に限っては

布団まで持ち出して床で寝ている。

当然この場合返事を返すのは僕になるわけで。

「で、それがどうかしたんですか？」

「いや、どうもこうも久しぶりにミーティングを行おうかと思ってな」

……俺と部長が話しているだけでこんなのがミーティングになるわけがない。

誰も参加する気なんてないだろう。

「おら！ お前ら、しっかりとミーティングに参加しろよ！」

まあ、それでも反応する奴はいないわけで。愁兎のもう食べられない……、といったベタな寝言

が聞こえてくるだけだった。

「部長、無理ですよ。この暑い中でここがどれだけ快適空間か分かるでしょう、誰もがだらけてくるんですよ」

「なんだとお……。まあ無理もないのかもしれないが、でもミーティングするぞー！」

「やりますか……。というか議題は決まってるんですか？」

「いや、まだだ。だからハル、決めてくれ」

基本的にこれは駄目だった……。

「いや、部長。議題決まっていってミーティングする必要なんてないでしょ」

「だって暇だろ？ 以来もきてないわけだし、そう思わないか？」

「暇だからって巻き込まないでくださいよ……」

「よっし、完成だ！」

竜児がいきなり叫びながら立ち上がった。

どうやらプラモデルが完成したらしい。

「ああ、完成したのか。ならミーティングに参加しやがれ」

命令口調だった。

「ミーティング………ですか？ いや！ それよりこの出来上がりはどうですか！？」

竜児にとつてもどうでもよかつたらしい。

「ああ、良いな。それ少し貸してくれないか」

「おっ、部長も良さが分かりますか？ どうぞ」

部長が笑っているのに俺は気づいた。

プラモデルを受け取った部長は一秒もためらわずにそれを窓の外に投げた。

「ぎゃあああつ！ 僕のプラモがああつ！」

まあ、なんとなくは予想してたけど……。

「さーて、ミーティングだ」

部長は窓を閉めながらそう言った。もうなんかグダグダだな……。

「部長！ 何かいい案出したら取りに行ってきた方がいいですかっ！」

「おー、良いな。案出せ」

「僕はこの部の名前を改名したいと思います！」

「ほお、なんて言う名前にするんだ？」

「聞いて驚け！生徒全員を 大いに盛り上げる 須川竜児のための
団。略して
」

「略せるかボケええええええつ!!!」

部長と俺が同調シンクロした瞬間だった。

「お前は馬鹿か！ 本当に驚いたわ！」

「マジで止めるや！ 死ぬ気かお前は！」

「だ、だって……………俺は団長に憧れて……………」

「お前はもうしゃべるなああああつ！」

部長の右腕と俺の左腕が竜児の顎を貫いた。

「あぶん……………」

竜児は白目をむいて倒れた。

「さて、気を取り直して会議を進めようか」

「気を取り直すどころかさっきの破壊力が強すぎて俺は疲れまじや……………というかこれ捕まりませんか？」

「大丈夫だ……………たぶん」

何かと不安が残った。

「そうですね……………」

水原がハードカバーの本にしおりを挟みながら言った。

「須川 竜児は何故この部活に入ったのか？ という議題でどうでしょうか」

「なんかその議題は酷くないか……………？」

「そういうことではなくてですね。私がこの部活に入ったのは部長が誘ってくれたからなのです。」

では須川 竜児も部長が必要として誘ったのか、ということに私としては疑問がいくのです」

あー。なるほどね。

「そうか……昔話もいいかもな」
そういつて部長は遠い目で言った。

春、そう、春だ。

桜が舞い散るなかで、一つの集団を見つけ。男子の集団だ。
一人の男が中心で、周りから攻撃を受けている。これはいわゆる、
いじめ。

おい、金出せよ
存在が意味なし
サンドバツク！

聞き慣れたかのような台詞。どこか僕は他人事だった。
傷は、増えていく一方なのに。

他人事。そうすれば、痛くは無いから。気がつかずに済むから。

「よう、少年。なかなかワイルドな格好をしているな」

桜の木の下、芝生の上に僕は横になっていた。

そして隣には、綺麗ないや、美人な……人がいた。

「ずいぶんと派手にやられてんじゃないか。大丈夫か？」

「何が ですか？」

「え？」

彼女は、そう。怪訝そうな顔をした。

「ああ、もうすぐ昼休憩が終わりますね……戻った方がいいと思
いますよ。教室」

「君は何を言っているんだ？ 私とは同じクラスだろうか？」

そう………だっただろうか。

年上………というのは失礼かもしれないが、姉さんの人だったか

ら2年生かとおもった。

「じゃあ帰るとしようか。私とな」

「……………そうですね」

何か色々と、抜けているような気がした。

25話 会議で過去（後書き）

久しぶりの更新となりました。
なんせ受験せいですから・・・

26話 過去……？

教室の角、トイレの個室、裏庭、校庭のバックネットの裏。

どこでもそれは同じことだった。殴りに殴られ。蹴っては蹴られ。

聞こえる言葉は中傷。

酷い………奴らだなあ………こいつが何したってんだよ。、あ、ああ、存在が、か。

いつものようにボロ雑巾になるまでやられ、そこに横たわっていた。

「やあ、少年。今日も面白い格好をしているな」

あの美人さんだった。

「僕はいつでも面白いですよ」

「ははっ、そうかもなあ。………どうにかしようとは思わんのか？」

「なにがですか？」

「いじめを　だよ」

「僕が？　ですか？　僕は、いじめられてなんていませんよ」

「嘘をつくな。私はピノ　オの嘘だっって見抜けるぞ」

「アレは誰だっって見抜けるでしょう」

「話を逸らすな、少年、どうしようとも思わないのか？」

「話を逸らしたのはあなたですよ。それに何度も言いますが僕は

「じゃあ何故そんなにボロボロなんだ？」

「それは………殴られたからでしょう」

「それはいじめとは言わないのか？」

「僕が………そう望んでいるからいいんです。僕は………どうしようもない奴ですから」

「何があってもいじめはよくないと思うなあ」

「それは………勝手な解釈です。世の中には、必要悪ってのもあるんです」

そう言っって、背を向けようとした僕の肩に、手が置かれた。

「少年は……それでいいのか？ 理由なんてあるのか!？」
「あなたにはもちろん……他の誰にも分かりませんよ、僕の気持ちなんて、ね。分かる、なんて言う奴はただの偽善者です。そんなことはもう分かっている。それに何度も言いますが僕はどうしようもない奴なんです。だから、あなたも、もう関わるのはやめにしてください。これ以上は」
「一呼吸。そして、いつもの台詞を。」

「迷惑なんです」

そう言っつて背を向けて歩き出す。
いつまでも、言い続けてきた台詞。いつまでも、言い続ける台詞。それなのに、今更なんでこんなにも、重く、沈むような言い方をしたのだろうか。
あの人には絶対関わって欲しくなかったからか。……そんなこと、馬鹿みたいだな。
そう、自分に叱咤した。

いつも通りの朝、痛みがやってくる。

何でお前学校来てんの？
サンドバック、だからだよなあ？
ああ、俺らのストレス発散に貢献してくれてんのかあ？
いつそのこと殺しちまおうぜ！
ぎゃはははっ、そりゃやべーって。
でもこいつ家族いねーんだろ？

じゃあ、いいんじゃないねえ？

何でも自分で殺した、とかいつてた覚えがあるぜ！

お前よく知ってるなあ。

っつーかこいつ犯罪者じゃねえか。

じゃあ殺しても問題ねーだろう！

だからそれじゃあ今度は俺らが殺人者じゃねーか！

ぎゃははははははっ。

本当のことだ、俺が殺したようなものだ。アレは、俺が。

しばらくして、暴力の嵐が止む。いつもの通り横になっているが、あの人は現れない。

それはそうだ。自分から関わるなっていったのだから。これでいい。

「よう、少年。今日も朝からやってるな」

美人さん、だった。

「なんで……」

「なにがだ？」

「関わるなって、言ったでしょう！ 迷惑だつて！」

そう言っても、彼女は特に顔色を変えずにいた。

「んー。迷惑、か。でも私は自己中心的な性格だからな。お前がなると言おうと私が決めないとそうはいかん。私が迷惑だと感じていないから、別に迷惑じゃない。お前が迷惑と感じていようが、私には知ったこつちやない。それでいいか？」

「なに………を言ってるんですか。まるで意味がわからないですよ」「分かんなくはないさ。少年が分かるうとしていないだけさ」

「おれは。人殺しなんですよ！？ 母を父を、妹を！ 殺したんですよ！」

「そんなことはないだろう。少年は手をかけていないだろう」

「それでも、俺が殺したようなもんなんですよ！」

ふう、と美人さんは息をついて。息をついて。いった。

「それがどうした」

「え？」

「そんなこと、関係がない。少なくとも、私にはな。私には殺人鬼の友達だっている」

「僕がよくないんです」

「私はいい」

なんなんだよ、この人は。

僕の、近くになんていたがるんだよ。

辛いだけだよ。こんなところにいたって。

いいかげん。そういいかげんに。

そうしないと……。

「僕、あなたを殺してしまうかもしれない」

「少年に殺されるのならいいかもな」

「……………」

「……………」

「おやー？なんで駄目人間と完璧超人が一緒にいるんだよ？」

金髪ロングのいかにも不良バリバリの男がやってきた。

「それは、彼氏彼女同士だからだろう」

「はあ？ またまた、冗談が過ぎるよあんた。そんな奴放っておい

て俺と付き合おうぜ、な？」

「私にはあっちの少年の方がお似合いだよ」

「そんなことねーって」

「お前のようなクズ野郎より、あっちの少年がいって言ってんだよ」

「はあ？ 俺を怒らせたいわけ？ 女だからって調子にのってさあ。

こいつ、人殺しなんだぜ？自分の妹殺してやがんの。ぎやはははっ。

なんだっけ？父親が家出して。それで収入がなくなっただけで母親が病気で死んで……

……そこからが傑作だったぜ。ぎやはははっ。妹が兄

貴のために死んだんだよ。首吊ってさ。確かに人が生きるには食費

だって被服費だってかかるだろうよ。その分を浮かせるために死んだんだってよ。ほんと面白すぎだよなあ！」

「それ以上」

「はあ？」

「それ以上喋るな」

「なんだよ、彼氏侮辱されて悔しいのか？ だから俺と付き合えば

」

瞬間。男の身体が崩れた。

ドサリ、とその場に崩れ落ちたのだ。

「あれ？ ちょっと強く殴りすぎちゃったかも。……………顎の骨割れ

てるっばいし、一週間は起きないだろう」

「なにをやってるんですか」

「いやー。イラッとしてね。やっぱ侮辱されるのはよくないよね」

「僕はそんなこと言ってるんじゃないわ」

「私には、君が必要だ」

いきなり、だった。

「はい……………？」

「だから、君が必要なんだって。だから、

」

「一緒に来てくれないか？ 宮越君」

「何の話したあぁあっ！」

「なんですか部長。ふざけてるんですか」

「わはっ、すまん……………つい面白くて9、99999割方嘘だ」

「ほとんど嘘で構成されてますね……………」

「つつーわけで、この話は終わり。さて、もう下校時間だぞー」
そう言っつて部長は立ち上がり、背伸びをした。

「一体なんだったんだ……………」

気づけばもう日が沈みかけていた。そして愁兎はまだ寝ている。

今回は嘘オチかよ……………」。

確かに代名詞ばかりで名前なんて出てこなかったけどよ。

そういえば……………残りの0,00001は、どの部分だったんだ
ろう……………」。

無駄に思考力を使った一日だった。

ほんとに無駄。

27話 とある生徒会の

「さて、この間は流石に遊びすぎたからな。久々に依頼箱の方を見
てきた」

部長が長い髪を肩から払いながらそういった。

その手には何も持っていないような気がするのだが、依頼が無かつ
たという結果が見えているのは俺だけか？

「そういえば鳴川 春希。最近一人称が『俺』になってますよ。昔
は『僕』でしたよね？ いつの間に色気づいたと言うのですか……」

……

何故か水原は今更にもなつてそんなことを言い出した。……いや、
生活に慣れてきたからつてのは駄目かな？

「……………とりあえず、だ」

部長が仕切り直そうとしたその時だった。愁兎が割って入ってくる。

「そ、そうそう！ 野球部復活したらしいぜ！ 大智から聞いたぜ」

「そうなの？ そういえば朝から野球部が練習していたような……」

……

「えーっと、それで、だな」

部長がわざとらしく咳払いする。そんなところに竜児が割り込む。

「そーいえばね！ あのアニメの二期が4月にはいるんだよー！」

（馬鹿か、もっと話せるようなネタを出せ！）

（この竜野郎！ 俺はメイドに限ってんだよ！）

（だ、だって）。俺はこんなネタしか……………）

（その前に愁兎！ そこじゃないよ！）

（なにつ、そうなのか？）

いつの間にかアイコンタクトだけで会話できるようになっていた俺
たちだった。

「あー、ゴホン。えー？ いいかな？」

部長が正す。も、もういいじゃないですか……………。

「あ、姉貴。発表はしなくていい……来て、なかつたんだろ？」
「うっ……」

マジ図星。こつこつうときは、依頼きてないから　するぞー、とか
言い出しそうだから嫌なんだ。

だからみんな（？）で微妙に避けてたのに。（しかも意味が無い）
「そう、だからー！」

「さて、今日は部室で過ごそうか」

愁兎の提案。よし乗った。

「待てお前ら。別に何かをしようってわけじゃないんだ。最後まで
聞こうか」

やけに冷静に部長が諭す。もちろんよくないこの前触れの気がし
てならないが。

「姉貴、なんかいい案でもあるのか？」

「生徒会と全面戦争」

「よっしや、みんな各自自由行動とつていいぞー」

愁兎の名提案。よし、乗ろうか。戦争なんてよくないよな。

「だから最後まで聞けつて。戦争と言っても別に血で血を拭うよう
な戦いじゃないんだ」

というか当たり前でしょ。そんなこと学校内で起きてたまるかよ。

「じゃあ何しに行くんだよ」

「ただの話し合いだよ」

「なんで傍点が振ってあるのでしょうか」

水原がハードカバーの本のページをめくりながら言う。

「そこまで読み取れる水原はどうなんだ……？」

「なんですか。鳴川　春希、文句でも？」

「いや、……なんでもないです」

たまに水原はおかしなことを言い出す。

「さて、またまた話がずれたが、戦争……じゃない。話し合いに
行くっ」

「今言いかけたよねえ、姉貴!？」

「大体一人で行けばいいじゃないですかなんて俺たちを誘うんですか？」

「そう冷たいこと言うなよハルウー。面白いからいいだろ？」

「何で現在形なんですか。そこは未来系でしょ」

「そんなことは問題じゃないんだ」

「というか話の内容って一体なんなんですか」

「えーとな、……………部費についての話」

ものすごくよくないことが起こりそうだ！

「姉貴……………俺は久々に不安と言うものを抱くぞ」

「それについては俺も同感だ」

「そうですね！ その部費で救部をアニメ系列で埋め尽くすんですねっ！」

「まったくもって見込み違いだ。残念だったな、須川」

「そうですね。使い道なんてなくないですか？ クーラーはこの間の大会で取ったとして、ほかに必要なものなんてあるんですか？」

「いいんだよ！ たくさんあつたら娯楽代に使えるだろ！」

色々駄目な部長だった！

「そんな確固たる利用法がないのに……………」

「ついてこないのか？ 須川？」

「うええ！？ 僕ですか」

いきなり呼ばれた須川は何事かと目を見張っている。

「東界 逢香もいるぞ、生徒会には」

東界 逢香、確かこの間の大会で竜児に天使とまで呼ばれた人だったよね。

生徒会役員だったのか……………。

「はっはっは……………何言ってるんですか部長。行くに決まってるじゃないですか！」

竜児が買収されたあ！ これ崩壊のパターンでは……………？

「さあ、愁兎。生徒会にはメイドがいるぞ？」

「姉貴……………流石にそれは嘘だと分かるぞ。それにな……………俺は姉

貴が好きなんだって！」

「死ねシスコンが」

バツサリ。

「さあ、ハル。ついてきてくれたら一緒にお風呂に入ってやろう」

「俺はそんなに欲望にまみれていませんよ……………」

こ、これは本当のことだから……………？ 確かに部長なんかとそんなことになったら俺はもうどうなるか……………。
竜児化しそうだ。

「ふうむ、ハルはなかなか崩せないな……………」

愁兎はアレで終わりなのか。

「よし、ならばベンキョーを教えてやろう。これは良くないか？」
なにっ……………そんな微妙な部分突いてきて……………確かにもうすぐテストが控えているけどっ。

「……………」

「さて、これでハルは落ちたな。あとは水原か……………どうも難しそうだが、な」

「仕方ないですね。面白そうだし私も行きますか」

「流石水原っ！ 好きだぞ！」

「それは俺に言ってくれえ！」

「お前はクスだ！」

「も、もっと優しい言葉をください……………」

グダグダな中で流されつつある救部部員達……………。

やってきたのは生徒会室前。思えば生徒会に関することなんてまったく無かったからここに来ること事体初めてかもしれない。

「さあ　　で、開戦だ」

思いつきり戦うつもりだった。

「たのもー！」

「何ですか騒がしい」

開け放った瞬間。いや、部長がそう言い終わった次の瞬間にもう彼女は声を発していた。

「霧谷　小冬ね」

「ああ、そうだ。霧谷　小冬だ！」

「あなたがここにいる理由なんてないから早く立ち去ってもらいたいんだけどもそう考える私の意見はあなたには伝わっているのかしら」

早次に言葉が繰り出される。確か彼女は生徒会長はやや速吹　智衣。

きっちりとした身だしなみに、真っ黒の髪を後ろでまとめて縛っているいわゆるポニーテール。

どうやら会議中だったらしく、一番前の真ん中の席に堂々と座っていた。

「相変わらず句点のないしゃべりかただな。むかつくな」

「句点なんてつける必要はありませんなぜなら時間の無駄となるから。つけているのは時間の重さを知らない俗に馬鹿と呼ばれる存在の人たちよ」

酷い言いようだ……このひと絶対ドSだ。

というか部長は喧嘩売りに来たのか！？

「おっと、話がズレてきていたな。まあ、お前との話し合いはまた今度にするとして、部費について交渉しに来た」

部長は屈託の無い笑みを浮かべて、

「引き上げる」

そう言った。

その瞬間、速吹生徒会長の眉がピクっとつり上がった。

28話 無茶な話

「今何と言った？」

速吹生徒会長はたんたんとそう言った。

しかしそれには怒気が含まれているように感じた。

「会長っ！落ち着いてください。たかが部の部長ですから」

そういったのは生徒会副会長の流ながし朽くちる。奇抜な名前だったから覚えていた。

彼は、黒髪ツンツンの男子生徒だ。ワックスを使っているわけではなさそうだ。

「ただの、ではない救部の部長だ！」

声を張り上げて言う部長。いや、大きな声ださなくても……。

視界の端に明らかにイライラしている生徒会長の顔があった。

「霧谷小冬あなた本当になにをしにきたのですか話し合う気などさらさらないのでしょうか？」

「あー、そんなことはないんだけどなあ」

悪びれた様子もないように部長は言う。

「で、どうしてくれる？逢香？」

「……………」

いきなりふられたにもかかわらず冷静に（？）首を傾げる逢香さん。何というか流石だ。

「その顔最高です！逢香さん！」

竜児が目を輝かせて言う。もうなんか親衛隊みたいだな……。

嘆息している俺を置いて話しは進んでいく。

「私と逢香は友達だ」

だからどうだっていうみんなの感想。

「逢香は生徒会会計だから逢香に部費の交渉をする」

「私が任意しないと意味がないでしょう」

バシッと突っ込んだ速吹会長。

でしょうね……っていうか普通分かるよな？

「ま、まあ今のは冗談だ」

絶対ウソだな……だってさつき自信満々の顔してたし。

「と……とりあえず部費上げる！」

もうやけくそ！？

「そんなに言ったって無駄ですよ」

言ったのは、逢香さんの隣に座っていたずいぶんとイケメンの男だった。

名前は確かかしき榎木 水城みづきだった気がする。

「は、榎木水城だったか？両方苗字みたいな名前しやがって」

「部長、それただの悪口……」

「な、あ逢香さんに近づくなあ！」

叫んだのは竜児だった。見れば、榎木は逢香さんの肩に手を置いていた。

なるほど、そういうやつなのか。

「ふうん？君は逢香のなんなんだ？」

挑発的な視線を竜児に向ける榎木。それだけでも格好がつく。

「よ、呼び捨て……ああああ、あなたこそなんなんだあ？」

竜児がうるたえている。

「オレは逢香の彼氏だぜ？」

「いいえ、違いますよ……？」

またもさらつと言っ逢香さん。おしとやかの極か。

「なーんだよ、つれないな。オレの彼女って嬉しくねえ？」

「あーム力つくな、殴りつきたい気分だ」

部長がいつになくム力ついていた。ああいうタイプ部長嫌いだからなあ……。

「そこところは私が許可します殴って結構」

速吹会長はさらりとそんなことを言う。

「お、さんきゅー。ブッキー」

そう言っ指の関節を鳴らし始める部長。そんなにもやる気だった

のか。

「ブッキーはやめなさい」

「ちあわ！ 会長、なんで許可だしちゃうー!?」

「目障りだから」

会長と部長のシンクロだ…………。

榎木は、あうう…………とうなだれている。

「なあなあ、部長と生徒会長っていつからの知り合いだ?」

「ぼーっと突っ立っていた愁兎に聞いてみる。」

「いや、俺もあんまり知らないんだけどな。なんだか入学時からなんか色々とおつたって聞いてたんだが」

「ということは、俺らは今2年生だから1年からの付き合いなのか? 救部が結成されたのは今年の春だから…………。」

その前の1年間部長は何をしていたのだろうか? ちなみに速吹会長も今2年生。

「そのところは私の情報網を頼ってくれるといいです」

いつも通りの無表情で水原はそう言った。

「確か、一年生の時は部長は、何もしてなかったですね。部活にも入らず、普通に学校生活をしていたらしいです。でもそのころから

頭脳明晰、運動神経抜群だったらしいです」

「そんな姉貴だからいろんな部に勧誘されてたんだよ」

自慢げに愁兎は言った。俺はじみじみスコンだなあと思った。

「俺はまあ、野球部に入ってたんだけどな」

「なるほど、だから愁兎は度々野球部の練習に借り出されるのか」

「そういうこと、だから大智とのバッテリーも組めたんだぜ? 別に俺はキャッチャーだったわけじゃないけどな」

なかなか面白い具合に分かってきた。

「たぶん部長はそこで思ったのでしよう。どこからも勧誘されるならどこでもかけつけられるようにしたい、と。そこが救部の結成の

原点だと思えますよ」

水原流推理。なかなか筋が通っているように思える。

「さて、この両方苗字は放っておいて、部費の件に話に来たんだ。どうする？ブッキー」

「だからブッキーはやめてくれます？ それに私たちもその件について話をしていたんですよ。他の部からも要望がそれはもう腐るほどにやってくるんですからねまったく言われなくても分かっているというのに」

「会長、少し落ち着きましょう。紅茶などはいかがですか？」

「大丈夫。流 朽気遣いどうもありがとう」

なんか主従関係でも結ばれてそうだった。

「会長とくちるんは出来てるんだよね」

奥の資料室と書かれた部屋から出てきたのは背の低い女の子だった。明らかに小学生といった感じの。

「こんな子、同学年にいたっけなあ……………」

「馬鹿なことを言わないで結縞むすじま 久遠くおん」

「については。会長さん照れてる？ 赤面してるう？」

こいつ誰だ、と知っているのはどうやら俺と愁兎だけらしかった。つていうか何で竜児は知っている感バリバリ出しているの？

「あれは一年生ですね。結縞 久遠、一年生から生徒会に所属するほどの仕事の手際などがいいらしいですよ」

「これで生徒会メンバー全員か？」

部長が速吹生徒会長に向かってそう言った。

「そうですよ？ これですべてです」

「我らが生徒会長・速吹 智衣、そして生徒会副会長・この僕、流 朽。生徒会会計の東界 逢香、情報処理担当の榎木 水城と結縞 久遠、これで全員です」

朽くんはもう執事よろしく説明してくれる。

「尽くすタイプなのかなあ……………」

「ちなみに、オレが情報の収集係で、久遠ちゃんが処理担当なんだ

よな」

榎木がそう付け加えをする。

「もうー。そうなんですよお、ミズっちが余計な情報まで持つてるから私は仕事が大変でえ……………」

なんか苦惱らしきものが見てとれた。

「いや、話が脱線しているから戻すがな、部費の件については話し合っていたのか？」

「だからそう言ってるでしょう霧谷 小冬」

「ふうん。それでも、だ。私の部に部費が少しでも回ってくるようにしたいしな。それに、このままいけば救部へ配布される部費はほぼ0に近いのだろう？」

「当たり前ですだってあなた方は特に目的も無く活動しているのでしょうか？いや、目的は分かってますよ？他の部を助けるという目的がありましたね。それらの報告は聞いていますしかしあなた方には大会など無いそれに依頼が来ないことには始まらないのでしょうか？そんな活動する日がまばらな部には部費を渡せないと言うのが私の考えですかね」

「あー、いつもにも増して句点が無さすぎて読みに……………いや、聞きにくいわ」

「部長、今危なかったでしょう……………」
軽く突っ込んでおいた。

「どうしても、っていうのならオレがいい考えを持っていますよ」
きらりと歯を輝かせながらにこやかに笑う榎木がいた。

「それは何ですか」
速吹生徒会長が即座に反応した。

「オレの得た情報なんだけどな？ この学校にもついに不登校の生徒が現れたそうだ」

「そんなこと知ってるよ（ますよ）」
「またもや部長と会長の声がかぶった。」

「な、なんだ……………知ってたんですか」

「当たり前です。私は生徒会長ですよ？」

「当たり前だろ。私は救部部長なんだぞ？」

いや、意味わからないですから部長。

「そういうことですか。確かにその事態はいただけませんね。分かりました」

「あなた方向とかしてくれるかしら？」

かなりの無茶問題だろ……………。

29話 みるる&愁兎

無理難題を押し付けられた俺たち救部のメンバーは、いったん部室へ戻り、作戦会議をすることにした。

「部長、マジどうするんですか。というか不登校を引つ張り出すなんて先生でも無理でしょ」

「いや、そんなことはないと思うぞ？ 悩みを解決すればそれでオツケーだろ？」

そんな簡単に言ってくれますけどね……………。

心の傷つてのは俺らみたいに今を幸せに生きている人間がどういったって治せないものなんだよ。

そう、昔の俺にみたいに。

「あー、姉貴？ もういいんじゃないの？ 折角だけど流石に人の精神までは……………なあ」

「その前に女子か？ 男子か！？ それによって僕の対応も変わってくるんだけどあ！」

下心バリバリだな。こいつ。

「ちなみに聞くが、女子だった場合はどうするんだよ」

「どうする、だって！？ 決まってる！ 病んでる病弱系なんて最高だよ！」

「まず答えになってないし、死ねばいいと思うし」

「だな、部長命令でこの部やめろ」

「最低ですね。どうやってたら人間そこまで落ちるんでしょうか、ああ、人間じゃありませんでしたね」

「俺はもともと竜野郎のことなんて腐ってたとして腐っているからな」
全員から浴びせられる罵詈雑言に、竜児はもはや色がなくなっていた。

なんというか、灰色？

「すみませんでしたばくがわるかったですもうしませんいいません

ふざけませんだからそんなこといわないでくださいさみしいかなしいこわいぼくをひとりにしないでくださいそんなめでみないでくださいぶかつやめるなんていわないでくださいしねとかいわないでくださいぼくはまだにんげんでありたいですくさってなんかいませんごめんなさいごめんなさい」

ぶつぶつ呪文のように呟く竜児。これはこれで怖いな……………。

「おお、壊れた」

「精神異常者ですね。スタンガンでも使えば直るでしょうか？」

誰の答えも待つことなく、首筋に押し当てる。

「バチィ！」と気味のいい音をたてて、竜児は動かなくなった。

「記憶の抹消は完了です。目が覚めたときには元に戻っているでしょう」

「荒々しいな……………死んではないだろうな」

「大丈夫ですよ、鳴川 春希この人はDMですから」

いや、そこは電力を最小限に抑えているとか言ってくれよ……………。

「ほらほら、ふざけてないで作戦会議だ。一応、家の住所は教えてもらったんだが……………」

部長は、たくさんの資料を机の上に置いた。

住所、中学時代の履歴書、高校生活の履歴書、学力テストの点数、順位、などなどe t c .

「つか、部長。こんな個人情報流出させていいんですか……………。生徒会どうなってるの……………」

「いや、これは私が個人で集めた。いい情報屋がいるんでな」

この人の人間関係が読めない。

「名前は大概おおつきみるる。私たちと同じ2年生で性別女、血液型A、誕生日は2月16日、スリーサイズは……………」

「部長、だから個人情報……………」

「おっと、すまん。ハルがいつ突っ込んでくれるのか待っていたんだ」

「俺で遊ばないでくださいよ……………」

「姉貴、脱線してる、脱線」

「こころなしかいつもよりおとなしい愁兎が先へと促した。

「愁兎？」

「うわっ、なんだよ……ハル」

「別になんでもないけど……」

愁兎の様子がおかしかったから、とは言わない。

何か引つかかった。部長は気づいているだろう。

「それより、だ。問題は何かを考えるべきだろう。さて、愁兎話してもらおうか」

「んなっ！」

愁兎はイスから転げ落ちた。

「私の情報網をなめるなよ？ 知らないとも思ってたか。大槻はお前のクラスだろ」

「クラスぐらいは資料に書いてあったでしょ」

「ハル、余計なところは突っ込まなくてもいいっ！ さ、愁兎、お前のクラスで何があった？」

「……… やっぱ姉貴にはかなわねえな。俺が一枚噛んでいるってのも分かってるんだろ？」

「さあ、何の話かな」

「……… まあいいか。そうだな。それは俺たちが野球の試合をしていた梅雨の時期の話になるかな」

いつも通りに練習が終わった俺は、姉貴と下校するために、風呂研究会の前で待っていた。

「あー、覗きてえ。家じゃあなんかガード固すぎるからなあ」

そんな冗談を呟きつつ、教室に英語辞典を忘れたことを思い出す。

そういえば姉貴から借りっぱなしだったか？ 早く返せとは言われていたけど………。

「つか、姉貴に辞書なんて必要あんのか？」

チラリと風呂の方を伺う。屈強なマツチヨたちが行く手を阻んでいる。風呂研究会の奴だ。

「まだかかりそうか？」

「……………」

黙って睨みつけるマツチヨ。　「かそんなに筋肉ついてんならスリング部とかいけよ。」

「別に隙伺って入ろうとはしねーよ」

「……………」

無言。

まあ、いいか。ちよつくら辞典でも取りに行ってくるか。

「姉貴に伝えておいてくれよー。辞典とってくるから待ってるってなー」

そついいながら生徒玄関へと向かった。

夕方になり、校内のすべてのものが茜色に染まり、神秘的な雰囲気を出していた。

「つと……あつたな」

片手サイズの英語辞典は自分のロッカーの中にあつた。

「さ、姉貴待つてるだろうし早めに」

「きやつ」

どん、と何かにぶつかり、その何かが床にしりもちをついた。

「ああ、悪い。大丈夫か？」

何かとつか普通にか女子生徒だつたんだが。

「あつ……いえ。つて！　き、きき霧谷くん!？」

「はあ？　俺は霧谷　愁兎だけど」

「ご、ごめんなさいっ」

「?ああ、まあ、俺帰るからな？　じゃあな」

「うんっ」

あたふたと真つ赤になりながらもじもじしている女子生徒を背に、階段を下りた。

「愁兎、遅かったな」

「え？ ああ、なんか女の子とぶつかったもんでね」

玄関の方に姉貴はいた。

「はあ、それが出会いとなって早くシスコンを解消できればいいんだが……………」

「出会い？ そんなもの生まれた瞬間に姉貴に奪われたぜ！」

「なんとという奴だっ！ 気持ち悪すぎる！」

あれ？ 今のは決まったと思っただが……………。

「お前は彼女とか作らんのか？」

「え？ いや、俺には……………いいよ」

一瞬脳裏に記憶がよみがえるが、すぐにかき消す。

「それに俺は姉貴がいるしな」

「……………」

姉貴はそれに気づいたのか、特に何も言ってこなかった。

「あれ？ 姉貴ー。ここは突っ込むところじゃあ？」

「あ、ああ。まあいいだろう……………帰るぞ」

「ういーっす」

俺は姉貴と帰路に着いた。

次の日、登校してきた俺に走り寄ってきたのは昨日のぶつかった彼女だった。

「あれ？ 昨日の……………」

「あ、あのっ。昨日はどうもすいませんでした」

「わざわざそんなこと別にいいんだけどな。そういえば同じクラスだったか？」

「え？ うんっ。い、一緒に登校してもいいかな……………？」

「あん？ 別にいいけどさ」

今日は姉貴は日直だとかで早めに登校しているから、暇してたところだった。

彼女は身長やや低めのカチューシャをつけた女の子だった。

名札には大槻、と書かれている。

「大槻、ね」

「な、なにかな？」

「別に呼んでみただけけど？」

そういうと彼女は顔を少し赤らめた。

「どーしたー？ 熱でもあんのか？」

「い、いや……その」

彼女はそれからもじもじしてしまっていて話さなくなってしまった。よくわかんねえやつ。

大槻と話すようになってから2週間たった。

朝の授業の始まる前や昼休みに良く話していた気がする。放課後などは居残りだった俺の勉強を手伝ってくれた。

周りから見れば仲良さ気だったのだろう。

そんなある日。

「霧谷くん……ちょっといいかな？」

消え入りそうな声で、それでも搾り出したように話し掛けてきた。

「ん？ どーした大槻」

「放課後……少し、話があつて……その、屋上とかに……きてくれないかな？」

うーむ、放課後は部室で姉貴とのいちゃいちゃタイムだったんだがな……。

「今じゃ駄目なのかな？」

「えっと、放課後じゃないと……」

「そうか、じゃあ分かった」

すぐに済むだろう、別にたいした用件でもなさそうだし。

そう思っていた。

「す、好きなんです……ずっと、好きでしたっ」
彼女の声が鼓膜を揺らす。

意味を何度も理解しようとする。はて？ 好きってどついう意味だっけかな。

誰も居ない屋上で。こ、く、は、く、か……。

混乱する反面。昔の記憶がまたもよみがえる。

やめろ、これはもう……忘れたから。

もう、消えたんだからっ……。

「き、霧谷くん……？」

「だ、大丈夫……でも、その思いは、俺は、受け取れない」

止まる。風も、言葉も、空気も、雰囲気も、何もかも。

ややあつて、彼女は小さく声を発した。

「そう……だよ。私はなんか、だよ。仕方ないよね……でも、

これからも仲良くしてくれる……？」

「ああ、それは……大丈夫」

そう、大丈夫。これまで通りに戻るのなら

その考えは、まるで昔の記憶を引っ張り出したかのように崩れ去った。

30話 最悪、

翌日、教室の雰囲気が異様だった。それは覚えのある居心地の悪さ。悲しみと悪意が入り混じったどろどろとしたような空間。

学校という場においての一番考えられる『最悪』。教室ではひそひそ話は絶えず、朝のすがすがしさなんて欠片もなかった。

俺が教室に入ると同時に数人が前の方のドアから教室を出て行く。一人の少女が、雑巾を片手に机を一生懸命に擦っていた。今にも壊れそうな顔をして。

これは、知っている。いつか見た記憶だ。まだ、まだまだまだ、こんなことは存在するのか。

「おい、大槻。どうした？」

「つく、…………霧谷くん。なんでもないよ」

精一杯の笑顔、違う。無理矢理のぎこちない笑顔に俺は悲しみと怒りで一杯になった。

タイミングを計ったかのようにチャイムが鳴り響き、担任が教室に入ってくる。

雰囲気には気づかない。所詮教師なんてそんなものだ俺は理解していた。だから俺は自分でやるしかない。そう思ったのだ。

しかし、しかしながら、だ。過去の記憶が邪魔をする。それに約束してしまった。

俺は何があっても自分から動いちゃいけないんだ。姉貴とあいつとの約束なんだから。

だから、大槻が頼ってくれないことには始まらない、始まらない。

自分の中の制約と現実の現象に苦しむしかなかった。

昼休み、いつもなら大槻が飯に誘ってくれる。だがそれも無い。その前にもう大槻は教室にはいなかった。嫌な予感しかない。クラスメイトはいつも通りいたって普通。それはそうか、所詮他人事。それで正しい。

自分も動けない。だから動かなくていい。このままでいい。そう自分に言い聞かせるのだがどうも落ち着かないのが分かる。目を瞑って黙っているとクラス内での会話が耳に入ってくる。

「なあなあ、大槻の奴なんでいじめられてんの？」

「はあ？ お前しらねーのか、霧谷に告白したんだよ」

「ええ？ 確かに仲はいいとは思っていたけど………なんでそんなことするかなあ」

「そんでさ、振られたらしいんだけどさ。まあ、問題はそこじゃないんだ」

「うん？ まだ何かあったのか？」

「ああ、霧谷に振られた後には他の男に告られたらしいんだ。それを見ていた、えーとなんだっけ。そう、神坂かみさかって奴が茶化して言い合いになってキレた神坂がいじめを起こした、ということだ」

「ふーん。あ、その告ったっていう男はどうなったんだ？」

「もちろん振られたよ。そこがまた神坂が気に食わなかったんだろ、『霧谷じゃねーと駄目なのかよ』とかなんか笑い飛ばしてたらしいな。大槻も反論しなけりゃ良かったのにな」

目をあけて考える。そんなことがあったのか、と。問題は複雑に絡み合っている。

こういうのは俺の本分じゃあない。最初から考えることなんて嫌いだっただった。

理由はわかった。こんなもの、大槻が俺に頼れば問題は解決したも同然だろう。神坂とかいう奴も俺が動かないと知っての行動だろうから。

今は考えることをやめて昼食に集中することにした。

翌日も、その翌日も大槻は俺を頼ることをしない。何を聞いても『大丈夫だから』の一言だ。

日に日にいじめがエスカレートしていつているのも分かる、それにつれて大槻が弱っていくのも分かる。

動けない自分が腹ただしい。分かっている、頼られなくても自分から行動を起こせばいいんじゃないかと怪しむ奴もいるかもしれない。俺は人のせいになっているのだ。あいつが頼らないから。どうだから。本当はすべて終わったあとの結果がどうなっているのが怖くて進まないだけ。

過去の出来事にすべてを投影してしまつて動けない。

これはいい呪いだ。これだけで俺は動けなくなる。

なんて、なんて俺は弱いのだろうか。

見ていることしか出来ない、悔しい。

正直、もういいだろうとか言う考えもよぎっている。相手がどうも言わないならそれで終わりなんだって。

あの告白のあつた日、少しは気づいていた。俺と大槻は今後はいつも通りに接することは出来ない、と。

俺は、どうしたらよかつたのか。

すべて俺が招いてしまつていたということなのだろうか。

ついに、そしてついに。大槻みるるは学校に姿をあらわすことはなくなつた。

彼女の机はポツリと、孤独を表していた。

「……………なるほど、な。神坂とかいう奴が噛んでいたか。まあ、知っていたけどな」

部長はすべてを見透かしてなお話をさせたのだ。

「私なら机に落書きしてきた時点で消えることのない落書きを相手に刻んでやりますけどね」

平然とした声で水原は言う。本気でやりかねんから怖い。

愁兎はというと、ただ俯いたままだった。そんな顔は見たことはなかった。

たぶん、自分が何とか出来ただろうって。そう思っているのだろう。そしてそれにまた後悔している。

でもできないから。俺は昔愁兎に何があったのかは知らないが、大きかったのだろう。

その気持ちは分からなくもない。

「さあて、……………こんなところで後悔したって始まらないだろう？
向かうぞ」

部長はクイツつと親指で外を指した。

「え、この状況で行っちゃうの！？ 愁兎のテンション異常に低いよ！？」

何故かわめきだしたのは竜児だった。そういえばこういうシリアスな話になると竜児って苦手だからなのか影が薄くなるよな……………。

「行かないと始まらないだろう」

何を言っているんだ、と部長は自然に言ってみせる。確かに行かないとね。

「あんまり遅くなっても迷惑だから行くこつよ」

そう促してみる。部長はウィンクを送ってくる。不純だけどドキリとした。

「早く行かないと意味無いだろうがこの馬鹿どもがあ、という意味ですね。理解しました」

「ちよつ、水原。訳がおかしい！」

「あれ、違いましたか」

微妙にだが、本当に微妙にだが水原は不満、というような表情をしていた。

俺は呆気にとられていた。

「鳴川 春希、どうかしましたか？ 馬鹿ですよ」

「んなつ！ 今の台詞の馬鹿の後には普通『のよう』とか『みたい』が入るでしょ！」

「おいおい、お前らはどこで盛り上がってたんだ。脱線しまくってるぞ」

部長がジト目でこちらを見ていた。そうだそうだ、こんなことしてる場合じゃないんだった。

「とりあえず行くっていう選択肢以外無いからな」

部長はそう言つてカバンを持って部室を後にした。おそらく愁兎は行くと分かっている行動。

無理には連れ出そうとはせずに、自らで。

もう、流石だな…… 部長は。

いまだにオロオロしている童児も部長が出て行ったことで、理解しづらい。らしくない小さなため息をついて、カバンを持つ。

「愁兎、先行ってるよ」

俺はそう促してから部室を後にした。

生徒玄関の前にはすでに部長が待機していて（まあ、最初に出て行ったから当たり前だが）太陽はもう傾きつつあった。いろんなものが茜色に色づけされている。

「まあ、全員集合だな。家まではそんなに距離は無いらしいからな。

すぐ着くぞ」

振り返ると愁兎は面白くなさそうな顔をして、部長の話を聞いていた。

やっぱり責任みたいなものを感じているのだろうか。

「何ですかその顔は。これから人様の家に向かうんですよ。いつもみたいなアホ顔に戻してください」

酷い言いようだ……。

「分かってるけどよ……」

反抗しない愁兎。重症のレットル。

「………… オロオロ…………」

いつまでも駄目な竜児。シリアスが多分唯一の弱点。

「分かったから！ お前らうるさい！ 家向かえばすべて解決、万事オツケー！」

無理矢理に部長が空気を引き裂く。なかなか進まない展開にイライラしているのかもしれない。

「ぶ、部長。少し落ち着いてください」

「ま、いい。行こうか」

そっこーでスイッチを切り替え、歩き出す部長。心なしか歩みが速い。

みんなはそれについて行くが、愁兎は校舎を見て固まっていた。

「愁兎、どうしたの？」

「いや、なんでもない。行こうぜ」

愁兎が見ていた方向を目で追ってみると、どこかの教室窓からこちらを見ている男子生徒がいた。

顔はよく見えない。学生服でしか判断できなかった。

男子生徒はそこから姿を消した。教室の奥のほうに入っていったのだ。

ぼおっとしていた俺は我に返って、部長たちを追いかけた。

31話 訪問 (前書き)

4月2日・・・俺の誕生日だっ！

31話 訪問

「ん、ここか」

部長が手元の地図と見合わせながら、歩いて10分程度閑静な住宅街の一角に大槻みるるの家はあった。

ここら一体は、なかなか大きな家が立ち並ぶ住宅街で、住んでいる人は小金もちといったところだろうか。

「私の家もここら辺ですね」

水原がそう告げた。そういえば水原んちって金持ちだったよな。

「へえ、そうなんだ」

「鳴川 春希は、今度招待しましょう。ああ、でも須川 竜児は近づくと射殺されるようになってるので気をつけてください。」

「んなあ！ 女の子のお家に行けると思ったのになんだそれわあ！」「気をつけるも何も近づいたら死ぬんだろ……………」

「そうですね。須川 竜児以外の救部メンバーで行きましょうか」

「いやだあつ！ 仲間はずれはいやあ！」

電信柱にしがみついて涙を流す竜児、先ほどまでのオロオロ感はどこへ行ったのだろうか。

ふと、後ろを振り返ると愁兎がつまらなさそうに家を眺めていた。

途端、ガチャリと玄関のドアが開き、少女が飛び出してくる。

俺たちのことなど目にも留めていないように郵便受けを覗く。

そして少女は小さくため息をつく。

「えーっと」

「はう！？」

部長が怪しむように目を細めて声を発した。

「えと、あの……………愁兎くん……………お姉さん？」

「ああ、というか救部のメンバー全員来ている」

「ええっ？」

門からちよいつと顔を出し、俺ら一人一人の顔を見ていく。

得意げな顔した部長こと霧谷 小冬、いつも無表情の舌先刃物こと水原 闇音、平凡野郎で唯一まとも人間こと鳴川 春希、アホオタクこと須川 竜児ちなみに今は目が腫れている。そして最後に茶髪で運動神経抜群の霧谷 愁兔。

全員の顔を見終わつたと同時に部長が言う。

「上がらせてもらつていいかな？」

スーパースマイルつきで。

竜児あたりなら貯金通帳あたりを差し出しそうだ。

通されたのは大槻さんの部屋ではなく、リビングだった。

竜児はせわしなくキョロキョロとあたりを見回している。怪しい目つきで。

水原はお嬢様のようにイスに腰を降ろしていた。いや、実際お嬢様なんだけど……………。

部長と大槻さんは机の対面に座り、俺と愁兔は少し離れたテレビ近くのソファ―に座っていた。

なんとなく俺は、愁兔の顔を見ることが出来なかった。

「で、最近学校来てないみたいだけど、どうしたの？」

部長が余所行きの口調で大槻さんに話し掛ける。なんか違和感しか感じられない。

「べ、別にたいしたことは……………体調があまりよくないだけで」

部長は全部知っている、でもあえて聞いている。

「なにかあったのか？ 私たちでよければ力になるけど……………」

「部長さん、誰だか分からなくなりなりますからその言葉づかいはやめてください」

水原が鋭く突っ込み。竜児はキョロキョロ。

「ん、そうか。分かった。さて……………大槻みるる、学校で何があつた」

一瞬の霏困気の反転。警察の取り調べ並に空気が張り詰める。シリアスモードに変わったと感づいた竜児はすぐに小さくなる。隣にいた愁兎も、ピクリと反応するのがわかった。

「わ、私は……………ただ体調が悪くて休んでいるだけで……………何も……………」

そのとき、ガタンと玄関の方向から音がした。

「……………！」

大槻さんは、ハツと顔を上げて玄関に向かっていった。何か急いでいるようにも思えた。

「おい……………？」

部長、いや、この場にいる全員が困惑した。

程なくして大槻さんは戻ってきた。少し顔が青くなっていたような気がする。

「どうした？」

部長は大槻さんの右手に握られている紙をチラリと見つっ、そう訪ねた。

俺にはなんなのかはこのからでは見えない。

「なんでも、ありませんよ……………」

「大槻、親はどうしているんだ？」

これも部長は知っている。確か2人とも海外で働いているからこの家には大槻さん一人だ。

「親は海外で……………」

「で、その手にもっているものは？」

「あ、……………これは、ただの郵便ですよ」

「最近の郵便は殴り書きのようにあて先が書いてあるのか？」

「……………」

郵便ではないだろう。手紙というよりかはただの紙のようなものだ。個人が直接ポストに入れていくような。

何かに気づいたよう大槻さんは顔を上げて言う。

「た、多分妹宛ですよ！　なんか妹のこと好きな人いるらしくてで

すね！ 直接、渡しに来たんじゃないでしょうか？」

……………そういうことね、といったように部長は目を閉じた。

「長居して悪かった、今日は私たちはこれで帰らせてもらおうよ」

そう言つて部長は立ち上がった。それに続いてカチコチになった竜児が立ち上がり水原が音も無く立ち上がる。

「あ、はあ……………」

いきなりでよく分からないのだろう、力の無い返事をした。

大槻さんの家から出て少し歩いてから、部長が呟いた。

「妹宛、ねえ……………」

「妹はいないはずなのでは？」

無表情に水原は言う。あの場で問い詰めなかったのは……………部長が何にかに気づいたからか。

「ああ、これは……………まだ、なのか」

「そうみたいです。家にまで安息の場がないのですか」

そこまですれば俺だってわかる。まだいじめは続いている？

何のために？ 誰が？

「何者かの強固な意志……………？」

部長が呟いた。愁兎はまだ、空を睨むようで。

つまらない授業が半分終わって昼休み、廊下に流 朽の姿があった。

「朽……………」

目があったかと思うと、彼は手を挙げた。

2人で屋上に行き、ベンチに腰掛ける。

最初に口を開いたのは朽のほうだった。

「昨日大槻の家に行ったらしいな、愁兎。どうだった？」

「どうといわれても……」

「どうといわれても自分は話はおるか顔すらまともに見ていない。だから分からない。」

「愁兎、お前とは何気に長い仲間だからさ、分かるよ。お前も何がどうなってるのか分かっているんだろ？」

「……………」

「知ってるよ、何でも自分でやるんだからな。まったく、小学校の頃のことを思い出すよ」

「……………」

「ふう……………じゃ、生徒会の仕事もやっておかなきゃならないものがあるから、俺はここらで失礼するよ」

屋上を後にしようとして、朽は立ち止まる。言っておなかければならないことがあった。

「頼ってもいいんだからな」

「……………」

あいつはいつも突っ走るんだから……………と残して。

愁兎は考えていた。これからのことを、でも自分には解決法が思い浮かばなかった。

こんなときにはいつも姉貴だった。それじゃあ駄目だって分かってるけども……………。

ガチャリ、と屋上のドアが開く。朽か？　と思って振り向くがそこにはまったく違う人物が。

神坂　　！

「やあ、霧谷くん。こんなところで昼食かい？」

真っ黒な髪にトゲトゲとした髪型。いじめの本人、何故俺に近づいて来たのか。

姉貴のように上手く対処できない俺はシカトを決め込むことにする。

「……………」

「なんだよお、そっけないな。昨日、大槻んち行つたんだろ？」
「っ！」

何故こいつが知っている。やはり姉貴が言っていたあの手紙はこいつ…………。

「こわいなあ、そんな目で睨まないでよ。僕は昨日塾の帰りに見ただけだってばあ」

嘘だ、こいつは塾など行っていない。それにあのあたりには塾が無い。そんなこと俺だって分かる。

「…………ふふん、これからも仲良くしてね」

そう言つて神坂は屋上を後にする。今日は屋上に人が多く集まるな…………。

などとどうでもいいことを考えて、イライラを消し飛ばすのであった。

放課後、愁兎の様子がおかしかった。

部長もそれに気がついたらしい。

「愁兎、お前神坂と接触しただろ」

「…………ああ」

「何もしていないだろうな？ 挑発には乗るな」

すでに部長は何かに感づいているようだった。水原は鋭い視線を愁兎に送っていた。

「…………ああ」

特に何をすることも無く、時間だけが過ぎていった。

あれ？竜見は……？

32話 下駄箱

次の日の朝、登校していると前に部長と愁兔の姿があった。

「部長、愁兔。おはよう」

「ああ、ハルか。おはよう」

「……………」

愁兔は顔が心なしかいつもより白く、表情が読めなかった。

これは……………色々大丈夫なのか？、と部長に視線を送るが、部長は肩をすくめて首を振るだけだった。

たぶん。駄目なんだろうなあ。

しばらく会話も無く無言で歩く。玄関に着いて、下駄箱はクラス別なので履き替えてから部長と愁兔を待つ。

待てども部長は来ない。待ったと言ってもほんの一分程度なのだが。

「愁兔、部長は？」

「……………確かに遅いな。様子を見に行くか」

部長が下駄箱を開けたまま固まっていた。

「……………部長、ラブレターでも入ってたんですか。何で固まってるんですか」

部長に近づいて行って下駄箱の中身を見る。

そこには愛の欠片なんてものは無くてそれ以上に最悪が広がっていた。

ゴミに、落書きに、そして部長の内履き。

「……………これって」

そついうしかなかった。まさか部長が対象になるなんて、ありえない。

「あーあ、まったく。内履きを買うのは結構なお金がかかるんだぞ？ 届くのだって一週間はかかるんだぞ？」

「部長！ そついうことじゃないでしょう…」

「ピリピリするな、ハル。抱きしめてやるから」

「意味がわかりませんよっ！」

正直、混乱だった。完璧超人の部長ですら狙われるといった事態が。あれえ？ 救部の皆さんじゃないの？ おはよう」

へらへらとしながら階段を下りてきたのは神坂だった。

愁兔の目つきが一気に変わる。獣のそれへと。

部長は神坂と愁兔の間に立ち、愁兔を抑えるようにして神坂と顔をあわせる。

「何か用か？」

「いや、別に。何か下駄箱で騒いでいるのが見えたからね」

「お前には関係ない、だから早く教室に戻って勉強でもしてる」

「冷たいなあ、何か力になれることがあったら」

ドン、と音がした。気づけば神坂は吹き飛んでいて、俺の隣には愁兔はいなかった。

愁兔は部長の前に立っており、拳を握り締めていた。殴ったのか。愁兔が。

「……………てめえが、やっといて。何言ってやがんだよ！」

一瞬遅れて悲鳴が上がる。玄関がざわつく、すぐに人が集まる。

「な、……………殴りやがったよ、こいつ！」

神坂も立ち上がり怒れる。愁兔を睨みつける。

「こいよ、何も出来ねえぐらいにボッコボコにしてやる……………」

これは、愁兔。本気でキレてる。

止めないと確実に病院行きの人が出る。かといって止められるほどの筋力なんて俺には無いし……………。

「ざけんな！ 霧谷ごときに俺がやられてたまるかよ！」

一触即発のこの空気、破ったのはやはり部長だった。

「愁兔お！」

部長が下駄箱に拳を叩きつけて叫ぶ。轟音が鳴り響く。

下駄箱は部長の所から波紋のように広がり罅割れた。というより大破した。

「遅刻するぞ」

そう言つて愁兎の手を引いて階段へと向かった。

その時、先生が階段を下りてきた。

「どうした、何があつたんだ。あの音はなんだつたんだ！」

「何でもありませんよ先生」

部長はスマイルを振りまいて言った。

「い、いや、しかしだね。霧谷君、これは……………」

「なんでも、ありません」

遠くにいた俺でこそ、悪寒が走るような鋭い目つきだった。

人間で、あんな目ができるのかというほどの。そのとき野次馬はいっせいに静まった。

先生も何もいえないでいた。

放課後、救部の部室に行くと愁兎だけがいなかった。

「あれ、部長。愁兎は？」

「ああ、なんかあの騒ぎが元になって停学くらつてたぞ」

「そう……………ですか」

部室内に重い空気が漂う。ここ最近はずっとそんな感じだった。

これから先、どうなってしまうのだろうか。

「あつ、神坂の方はどうなつたんですか？」

「あいつはやらされただけだったからな。なんもなしだ」

「でも、……………やっぱり部長の下駄箱に悪戯したのは……………」

「神坂だろうな。水原特性の監視カメラを仕掛けていて良かったよ。しっかりくつきり映っていたぞ」

何でも用意しやがるな水原は……………。振り向くと無表情に「ふはは

ー」と笑っていた。

「じゃあそれを使えば、愁兎の停学だつて！」

「駄目だ」

部長がバツサリと切り捨てた。

「何で、ですか？」

「朝、あいつに言っておいたことがあるんだがな。『決して手を出すな』と、それに監視カメラ。生徒会にばれた」

それって、そう聞こうとしたとき、部室のドアが開かれた。

「あなたたちっ！」

珍しく感情的になった速吹生徒会長が部室に入ってきた。

「何もあそこまでやる必要は無かったと思いませんか。それに監視カメラの設置下駄箱の破壊全生徒は混乱していますよあなたが霧谷姉弟がこんなことをするなんてという風に。神坂という奴が中心となってる」

「いつもどおりややこしいな、ブッキーは。まあこれもあいつの計画通りとかいったところじゃないのか？」

「何をあなたはのんきにあとブッキーと呼ぶのはやめなさい」

好感度墮落計画………？ あいつは、神坂は何を狙っているんだ。

それから一週間が過ぎ、救部には依頼も来なく、部長はボーっと窓から空を見上げるだけ。

愁兎は停学明けにはなったのだが、いつも屋上にいるらしい。

活気の無くなった部活。それは墮落を指す。

もちろんのこと大槻みるも登校してきていない。

竜児も萎れ、水原は黙々とハードカバーの本を読み進めるだけ。

いつからこうなったのか………。

みんな精神的に弱っているのは分かった。

俺はいつの間にか屋上へ向かおうとしていた。

屋上に向かうと、愁兔がベンチに腰掛けたまま空を見上げていた。さすが姉弟、やることは同じか。

しかし自分にも笑えるほどの力は持っていなく、ただ愁兔の隣に腰掛けた。

おもむろに愁兔は喋りだす。

「俺はさー、最初大槻を振ったとき昔のようなことが起こらないようにするために振ったんだ。とはいってもそれもいいわけみたいなものでさ、本当は怖かったんだ。自分のせいで大切な人が傷つくのが」

「昔の、話？」

「ああ、昔はさ、俺と姉貴ともう一人女の子がいてな、俺はそういうことが好きでそいつも俺のことが好きだったんだ」

愁兔は語る。昔の話を

「俺馬鹿だからさ、上手くは説明できないけどさ。なんつーか、俺と対等になろうとしたんだよねそいつは。好きになるってのは相手と対等になってそれでもって好きになるってそいつは思ってたらしいんだ。昔から俺は少しは運動できていてさ、やんちゃだった。とある日に立ち入り禁止って書いてある廃ビルにいったんだけどな。そこであいつは怪我をした。崩れかけの階段を3人で上って、飛んで、走って。どこかでつまずいたのか分からないけど、落ちたんだ。そこから。全身打撲の骨折あり、最悪だった。俺基準で遊んでたんだ、いつもそうだった。それでそいつの親父に『二度と近づくな』って言われて、そのまま離れ離れてわけ」

そこでいったん愁兔は話を切った。

一呼吸置いてまた話し始める。

「俺基準でも待たなく傷つかず、しかも俺よりさらに上に行くのが姉貴だった。姉貴なら一緒にいても傷つかない。だから姉貴とは一緒にいたかった」

シスコンの真相。そんなにも深い理由があったのか。

「俺は正しい選択をしたと思ってた。でも何がこうなったのか、大

槻も姉貴も傷ついてしまった。なら、俺は。どうしてこんなにも普通でいられる？」

愁兎は周りのことばかりで、自分が傷ついているのがわかっていない。

「俺は、もう死んだほうがいいんじゃないのか？」

「なっ！　いきなりなんでそんなこと！」

「迷惑ばかりかけて、俺が神坂を殴らなければ今のようにはならなかったかもしれないし、俺がいつも余計なことをするからっ……」

姉貴が……関係内なのに……」

愁兎は途中から泣いていた。

そこで嫌な予感が走った。屋上、自殺。

「愁兎っ！」

「ハル、お前に言ったことみんなに伝えておいてくれ。それに、気に病む必要はない。俺が勝手に死ぬんだから」

俺は走って愁兎の腕を掴む。せめてもの抵抗で。

「悪いな、ハル」

ふっと体が宙に浮き、背中から叩きつけられる。肺の中の空気が搾り出される。

「くっは……」

「俺は、友達すら平気で傷つけられるんだ。だから、こんな俺は死んだほうがいい」

ケータイで部長を呼び出すにも、遅い。遅すぎる。

ここには自分しかない。止められるのは自分しかない。そうじゃないともう元に戻らなくなってしまっ。

あの楽しかった日々は、永遠に手の届かないものになってしまっ。

そんなのは、嫌だから！

「愁兎っ！　死んだら、許さない！　絶対許さないっ！　死ぬのな

ら俺も死ぬ！」

「……っ、ハルっ！　何言ってやがるんだ！　俺はどうでもいい奴なんだよ、人を平気で傷つけられる奴なんだよ！」

「それでも、それでも愁兎は優しいでしょ！ 愁兎がいなくなるなんてありえない！ 救部は誰が欠けても駄目なんだ！」

「わかんねえ……………奴だな！ ハルは。俺は死んだ方が

」

言葉の続きは屋上のドアが開かれる音でかき消された。

ドアは吹き飛び、フェンスに激突する。

「愁兎……………」

「姉、貴」

ゆっくりと愁兎に歩み寄る部長。

「ハルが、言っただろうが。死ぬなって、……………お前は迷惑かけまくって死ぬのか？」

部長の表情はみえない。

「責任を全部死にして償おうってか……………馬鹿馬鹿しいにもほどがあるだろ……………」

「でも……………」

「でもじゃない！」

それは叫びのようなものであった。

「私だけは、傷つかないんだろう？ だから私についてくるんだろう？ 知ってるよそんなこと。昔のこと引きずってるんだろう？

いいから、そんなものはいいからっ！ ………………私は傷つかないから」

風が、屋上を過ぎ去って、部長の髪をなびかせた。

「死ぬなんていうなあっ！」

部長は、泣いていた。その泣き顔を見てしまった。

「私はっ、……………お前が必要でっ……………お前だって、私が必要なんだろ！ だから……………だからあ……………」

「もう、分かったよ。姉貴」

そう言っただけで愁兎は部長を抱き寄せた。

何故だか、俺の頬にも涙が伝っていた。

32話 下駄箱 (後書き)

ブログ公開し始めました！

主に自分のことなんですけど良かったら読んで感想くださいw
ちなみに取り扱っているのはアニメ系列ですwww

<http://ameblo.jp/koucubefia510>
00/

33話 ゲリラ？

翌日、部室には全員そろっていつもの雰囲気に戻ってきていた。しかし、部長はなにやら殺気立っているようで時折みせる眩しい笑顔も素直に直視できなかった。

眩しすぎて、という意味ではない。何かが含まれているようで怖い、という意味だ。

「そ、そういうえば部長。監視カメラの件はどうなったんですか？」

「ああ、その件なら余裕だ。水原がバックアップを取っておいてくれたらしい」

「そうです。みすみす取られるような真似はさせません」

水原は、カバンからDVDを取り出した。

「私たち霧谷姉弟を敵に回した拳句に好感度をぶち壊しにしておつて

……………あいつは極刑だ」

ゴゴゴゴ……………と部長の背後に紫と黒の入り混じった邪悪なオーラが立ち込める。

だ、駄目だ。これは誰かが死ぬ予感……………。

「で、でもDVDならどうやってみんなに公開するんです？ 音声ソフトじゃないんですから校内放送では……………」

「音声だけを抽出することは出来るんです。ただ、声が入っていないという点が問題なんです」

「だから、そこは考えてあるんだよ、というかここからは私たち救部の独壇場だ」

部長はイスから立ち上がって、ニヤリと口元を吊り上げて笑う。

「誰にも邪魔させない。邪魔する奴は『死』を覚悟しろってね」

いろんな意味で超楽しそうな部長。ここまでくると何でもやりそうだ。

というか、なんつー台詞ですか。SFものじゃないんだから……………。
「というわけで作戦会議だ、とは言っても段取りはもう決まってい

るから役割分担と道具をそろえるだけだ………つと水原、何か武器はあるか？」

キュピーン、と目を輝かせて部室の隅からがちゃがちゃと音を立てて先ほどとは違うカバンを引きずってくる。

「スタンガン、ワサビームにハンドガン、バタフライナイフに鎖にミニ火炎放射器、液体窒素に閃光玉、釘バットや鉄アレイや超粘着質ガムテープやクロロホルムに煙球、ああ、ガスマスクは人数分ありますよ」

「いやいやいやいや、水原！？ おかしいからね、間違いなくおかしいから！ 女子高生のカバンに入ってるべきものじゃないよね！」

「よし、十分だ」

「部長も何かおかしいって気がついてくださいよ！」

「ん？ なんか言ったか、ハル？」

「釘バット持ちながら話しかけるのやめてください！ 超怖いですから！」

「部ちよっ………釘バットあつああ………当たってますからあ！ 後ろにいた童児に被害。目に入らなくて良かったな………」。

「姉貴、それなかなか似合ってるぜ、さて俺も………」

「俺もーじゃない！ 愁兎は危ないからさらに持つちゃ駄目！」

「どーしたハル。今日はやけにテンションが高いな」

「いや、もうなんか………疲れたんでいいや」

捌ききれなくなったボケに疲れはたので、生暖かい目で見守ることにした。

ああ、………物騒なもの持ち出してこの人たちは一体何をするつもりなのだろう。

「さて、気を取り直して武器を選別しよう。まあ、いるものなんてワサビームとスタンガン………あとガムテープだけでいいだろ。で、役割分担はこれでいいな？」

部長はバットと紙を長机の上に広げる。

「おお、これはなんか面白そうだぞ姉貴！」

「そうですね、部長さんはなかなかセンスがあると見ました」

「ふふふ、こつこつアクションものを僕はやってみたいと思っ
たんだよ」

「何ですかこれ……：ゲリラ的な要素バリバリじゃないですか。ま
あ、出来なくはないでしょうけど」

「じゃあ、全員理解したってことでいいな？」

部長は面白すぎてこらえきれない、といった表情で救部のメンバ
ーを見渡した。

神坂は成功者だと言っていい。なぜなら彼はこの学校でもっとも有
名な霧谷姉弟を退き、中学校時代のような神坂の知名度が上がって
きたからである。

無論、ここまでに至るために尽くしてきたことは悪行の数々。しか
しそれも知られない。

すべては霧谷姉弟が悪だと信じ込ませ、自分こそが善だと信じ込ま
せる。それが出来たからだ。

下駄箱でのあの騒動、自分は手出ししなかった。監視カメラは際ど
い所で生徒会が処分した、ここは賭けだった。

しかしその賭けにも勝ってしまい。面白いように自分の思惑通りに
転がっていったときは笑いが止まらなかった。

そう、神坂は取り戻した。あの過去の栄光を、中学時代の時のよう
な状態を。

これからは神坂の時代になるであろうと予測していた。

言ってみれば高校に入ってからのというもの、中学時代では敵無しだ

つたのに霧谷姉弟という化け物が現れた。

勉強は姉に勝てず、スポーツは弟に勝てず。見る見るうちに俺は色を失っていた。

ただの二番止まりとなるのだった。しかしそれから、救部というものを作り上げ、友好関係上も上手くいき始めた。信頼も厚くなつていつていた。二番どまりなら良かったものの、成績は落ち、生徒会にまでも負けるようになってしまった。その間に救部部长の霧谷小冬は生徒会会長の速吹智衣と友好関係を持ち、俺の付け入る隙間さえなくなった。そう、完全に一般人、敗北者に成り下がったのだ。だがそれももう終わり、これからは立場が逆転し、俺の時代が始まるのである。

これほど心が躍ったことはない。

全校生徒が集会のために体育館に立ち並ぶ中、神坂は笑いをこらえていた。

どうやら生徒会が催したものらしい。この間の下駄箱の件もあつて全生徒に呼びかけるつもりらしい。

そんなことはもう俺にとってはどうでもいい。というかすでに成功者となったものとしては日々は楽しくてしょうがない。だから早くこの集会を終わらせて休み時間に

そう考えているときだった。体育館の後ろのほうから破裂音が聞こえた。

パン、パパパン、パパパン！

全生徒がざわつき始める。それを抑えようと生徒会がマイクで呼びかけるがこの大きな人数はそうは動かせない。

悪戯……………？ それにしては微妙だ。

後ろを振り向いたとき、ふっ、と体育館のライトが消え、窓の暗幕が閉じられた。ドアも閉じられる。

「な、なんだ……………何が起こって」

混乱する俺を置いて物事は進む。先ほどから教師の声が聞こえない。いくら生徒主体と言ってもこれはおかしい。

教師の座る席のほうを伺ってみたが、誰一人としていない。5人はいたはずなのに。

「ば、馬鹿な……誰がこんな大掛かりなことを」

暗闇の中、スポットライトが壇上に当てられる。その光に照らされるは救部部長、霧谷 小冬だった。

「はは……何かと思えば、無駄なことを」

誰にも聞こえないよう小声で呟く。

馬鹿だ、今更言葉で反論しようつたって無駄だ。弟は俺を殴り、姉は監視カメラ。そんな奴にどう弁解できる!?

《注目ー!》

マイクに向かって叫ぶ。何が始まるのかは知らんが見ていてやろう。《って、あれ? もう見てるか。まあ、いい。教師もいなくなったことだし、やりたい放題だ!》

マイペースに進む救部部長にむかって罵声が飛ぶ。

「またお前かー!」

「いいかげん引つ込め盗撮やろう!」

ふん、すでにこのようなレッテルを貼られているというのにどうするつもりだろうか?

《あー、まあ否定派でみんな。でもこいつをみやがれえ!》

ウィーンと何かの機動音。しばらくして暗闇に光が当てられて映像が流れる。シアターだと?

内容は、俺が霧谷小冬の下駄箱に悪戯をしている模様だった。

「回収処分されたはずじゃあ……」

うめく、声が出てしまっていた。

アレは見間違いよう無く俺。くつきりと、鮮明に何をしているかまで映っている。

全生徒がざわつく、先ほどまでとは違う雰囲気だ。

映像は切り替わり、一人の男子生徒と一人の女子生徒の映像。見覚えがあった。

『お前、まだ学校来てたのか。まったくあそこまでされて懲りない

とはなあ？ 馬鹿なのか？』

『……………』

『何とか言ったらどうだよお！』

『……………っう』

響く俺の声。あいつら……………こんな映像をどこで！？

《さて、皆さんに今見てもらったのは現代におけるいじめの現状。

……………感想でも聞いてみようかな。そうだな……………その君、確か神坂くんだったけ？ 感想を言ってもらえるかな？》

「糞が、糞が、ふざけんなああああっ！」

体育館の出入り口一つに目がけて走る。

「どけっ、どけえええっ！」

周りの人間を押し、かき分けて、なぎ倒して進む。

《おやおやー、なんか暴れてるようですけどー？》

そんなスピーカーからの声を無視し、出入り口近くにたどり着く。

「えっ！？ こっちくんの？ ちよ、ちよ、タイム！ 助けてハルくん！」

叫ぶ男子生徒を吹き飛ばしてドアから脱走した。

34話 決着

見事にゲリラシアターは成功し、大混乱する体育館から救部のメンバーは逃げ出してグラウンドに集まっていた。

「まさか成功するとは思いませんでしたよ……………」

「まあ、私が計画すればこんなもんだろ。みんなもうまくやってくれたしな」

「ハ、ハルくん……………痛かったよ。神坂とかいう奴に吹き飛ばされたときにパイプイスの角に……………」

ああ、そういえばあの時何か叫んでいたな。

「さて、神坂の行方だが……………水原、分かるか？」

横でノートパソコンをいじっている水原はこちらを振り向き頷いた。

「多分、校舎裏だと思います。監視カメラにバッチリクツキリです」

「水原、それってお前が仕掛けた監視カメラに映っていたのか？」

「いいえ、学校側のパソコンをハックしました。それで監視カメラの映像を引き出しました。あの墮落神といじめられ娘のやり取りも学校側の監視カメラに映っていたものを使わせていただきました」

「み、水原ってそんなパソコンに強いキャラだっけ……………？」

「はい。というか覚ええました」

バックが黒すぎるのでこれ以上は突っ込まないことにする。

「校舎裏か……………まあ、最後の仕事は愁兎がやるべきだよな」

そう言っただけ部長は愁兎を見据える。

「ああ、これは俺がやるべきだな」

真剣な顔つきで頷き、校舎裏の方へと歩いていった。

「大丈夫なんですか部長？ 愁兎一人で行かせておいて」

部長は愁兎の背中を眺めたまま言う。

「大丈夫だろ……………だってあいつは私の弟だぞ？」

振り返ったその顔は笑顔と自信に満ち溢れていた。

理想の姉弟像であり、とてもうらやましかった。

無造作に植え付けられてるくに整備もされていない桜の木の大集団の中を歩きつつ、校舎裏へと向かう。

普段はこんなところには立ち寄らない。ここは俗に言う不良の溜まり場であるからだ。

木に覆われていて、何をしても見つからない。絶好の溜まり場だからだ。

よくここで被害に遭うという生徒もいる。まさに『裏』だ。

日常生活の中で、誰かが楽しくすごしている反面悲しんでいる奴がいる。

学校に行くのが楽しいという奴がいる反面行きたくないと思う奴がいる。

表と裏。それはどんなところにも存在しているということだ。

ゴミ置き小屋に差し掛かったとき、男子生徒の姿が見えた。

神坂、奴だ。

「ん……………だよ。こんなところにまで来て感想を要求するきかあ？
つたく……………なんなんだよ」

自嘲気味に笑い空を見上げる神坂。

「ほんとによお……………やつと俺の時代がくる時だったのによ。なーんで邪魔するかねえ」

「……………」
「お前らのせいで全部めちゃくちやだよ。俺の知名度、地位、その他も」

「……………」
「お前ら姉弟さえいなければ俺の人生なんて勝ち組だったってのに

よ……………」

「……………」

「てめえ、何とか言えよ。ふざけてんのかあ！」

怒りの咆哮を上げる神坂。あいつは多分追い詰められている。

「……………や、まれ」

「ああ？」

「大概みるるに、謝れって言うてんだよ！」

「……………つつく、ははははははっ！ 馬鹿かお前。あんな奴のこと気にしてんのか？ 振ったくせに？ ははははははっ！ 大爆笑だよ。お前にはもう関係ないだろ？ それにあいつは用済みだろ？ 俺の踏み台として起用されて、もうそれだけでいいだろ？ 必要なんてないだろ？ なに正義感振りかざしてんのかって。お前はただの偽善者だろ。お前が振っていなければこんなことにはならなかったのかもしれないのになあ？」

昔の記憶が 断片的に。

「つつく、……………自分のしたことを棚に上げておいてそれかよ」

「はあ？」

「くだらねえつての。知名度？ 地位？ 馬鹿かお前は、そっくりそのまま返してやるよ。お前は何にすがり付いてんだよ」

「ふざけたこといつてくれるじゃねーか」

「そんなものどうでもいいだろうが、そんなくだらないものために人を平気で傷つけていたのかよ」

「くだらない、だあ？ この世はさあ、知名度とか好感度とか地位で成り立ってんだよ。いつまでお子様の考え方してんのかしらねーけどよ、知名度や好感度さえあれば推薦入学だって余裕だ。無駄に勉強しなくて済む。社会の中ではどうだ？ 地位さえあれば約束されるようなものだろ？ そこまでに至る経緯なんてどうでもいいんだよ、すべては結果。どんなことに手を染めても結果さえ出ればそれで周りは納得するんだよ。用は結果しか見ねえ奴らがこの世界回してんだからしょうがないことなんだよ」

「…………俺は馬鹿だからよくわかんねーよ。でも言えることだつてあるんだよ。だから何度でも言つてやる。くだらねえ！」

「お前には言つてもわかんねえよ！ とりあえず俺はイライラしてんだよ。素直に殴られてくれよ！」

神坂は地を蹴つて接近してくる。速い、が怒りに体を任せている状態ではあたるものも当たらない。

顔面目がけて放たれた拳を首を傾げるだけで避け、バックステップで距離をとる。

続けざまに大振りのアッパーやフックがくるが、腕を払って拳の軌道を変えて避ける。

避けることだけに集中し、相手の攻撃は一切受けない。

息を切らせた神坂が吼える。

「て、つめえ……………なめてんのかよ……………なんで反撃してこねえんだよ！」

「殴つて聞かせても、そこには善意がなくなつてしまつ。お前の意思で、大槻に謝らせるためにも俺は攻撃しない」

「糞、甘い奴だな……………殺してやるよ！」

ゴミ置き小屋から木材を取り出し、ブンブン、と振り回す。ところどころに釘が打ち付けてあり、木材を貫通して先が突き出ている。

そう、釘バットのような形をしている。

「これで殴れば死ぬだろ」

木材片手に肉迫してくる神坂。ギリギリとどくかどかないかのところで木材を振り下ろす。

ザシュ、と地面が抉れる。

受け止めることはほぼ不可能。だけど、釘がついているのは先の方に3本ほどだけ、そこに注意すれば大丈夫。

横に風ぐ。振り下ろす。ただただ、振り回す。

避けるのにも体力が必要となる。もう9月上旬だというのに汗が出る。

神坂も同じく肩で息をしている。

「いいかげん、くたばれえ！」

振り下ろした一撃を避けようと足に力を入れる。

そのとき、先ほど抉られた地面のわずかな隙間に足を引

つ掛けてすべる。

スローモーションで、木材が振り下ろされてくる。

走馬灯。死の直前に、さまざまな過去が振り返られ、時間を体感時間を遅める。

死、ぬのか……………。

真っ黒になる。それは目を閉じたからだ。しかし衝撃は一向にやっ
てこない。

おそろおそろ目をあける。そこには……………見覚えのあるパンツが
あった。

「……………は？」

地面に倒れた俺の上を誰かがまたがっている。

木材はその人に受け止められたということになる。

「こらこら、こんな危ないものを振り回して……………しかも釘付き。
殺傷能力高いなあ」

聞き覚えのある声。いつも近くに在る、その声。

「は、はなせっ！」

「言われなくてもはなすけどさあ、私の弟になんて危ねえもの振り
回してんだよっ！」

どどっ、という音の何秒か後にガシャアアアン！ と大きな音が響
く。

ああ、こんなことができるのはあの人しかいない、だろ。

「おーい、そこは絶景かい？」

上から姉貴の声が降ってきた。

「なあなあ、ブツキー。とりあえず依頼解決したんだから部費を上げてくれよお」

「あなたたちはあんな事件を起こしておいてよくそんなことが言えますねまったく本当の馬鹿ですね」

「約束したるお？ それともブツキーは約束守らない最低の人間だったのかな？」

「く、………………。そんなことより大槻さんは登校してきているのですか？」

「だからしてるってー。解決したんだって。ほれほれ、部費を寄越しなさい」

今は、部長と生徒会会長の話し合い（？）中である。

場所は生徒会室で、ぐだぐだと2人だけで長引いている。

水原はハードカバーの本を読み、竜児は遠くから逢香さんを眺め、その他はてきとーに過ごしていた。

かれこれ1時間は話し込んでいる。

とはいっても内容がかなり薄いものなのだけれど。

「あれ？ そういえば愁兎は？」

気づいたら愁兎がいなくなっていた。

まあ、トイレにでも行ったのだろう。

「き、霧谷くん……………あの、ありがとう」

「あー、まあ、どつってこと無かったぞ」

「……………あと、ごめんなさい」

「……………それは無しだったの。あとさあ……………」

屋上、気持ちのいい風が吹く中で言いよどむ。

アレからすべてが解決し、いつも通りの日常が戻ってきていた。

大槻も学校に登校するようになり、元に戻った。

ベンチには大槻が腰かけ、俺はフェンスに背中を預けていた。

「俺と……付き合うか？」

「えっ！……それは、どういう意味で!？」

「だ、だから……そのまんまの意味だつての!」

自分で言っつて恥ずかしい。大槻も赤くなってもじもじとしている。

「はう……お、お願ひします。……でいいのかな？」

「っ、……おう」

祝福するかのように、心地よい風がサアアアツと2人を撫でた。

35話 超の力

「そう、この世界は理不尽だらけだ。というか神様は差別をしている。人間は差別されていいものなのか？憲法にまでこと細かく書かれているというのに何でなのだろうか？ とうかまず一番最初にリア充は爆死してもいいと思う。いや、むしろ爆死して欲しい。そして裏切りという名の傷を負った者はどうすればいいのだろうか。ああ、目から涙が出てきたね。泣いているのか？ 僕は泣いているのかい？」

「とりあえずうるさいからな、須川。黙ってる」

竜児の呪文のような呟きを破ったのは部長だった。確かにうるさかった。

「とうか新たな宗派を作り上げそうな勢いだった。」

「部長！ これが黙っていられますか！？ リア充ですよ、僕たちの敵ですよ！？」

「僕たちってなんだ。勝手に私たちを巻き込むな」

「……………」

部長と竜児の会話の中、水原は黙々と宿題を片付けている。

「ほんと許せねえよ！ なんなんだよ、仲間じゃないのかよ！」

「何に興奮しているんだこいつは……………」

ついに耐えれなくなった部長は冷たい目をして竜児から遠ざかる。

それが正しい判断です。つか、何をそんなに竜児は言ってるんだ？

ガチャリ、と音がして部室のドアが開けられる。入ってきたのは愁兔だった。

「きやがった！ 俺の敵い！」

すぐさま竜児が反応する。獣のような勢いで愁兔に迫り、掴みかかろうとする。

「わ、何だこいつ」

片腕を払うだけで地面に潰れる竜児。愁兔が強すぎるのではない、

竜児が弱すぎるのだ。

「そういうことね……………」

俺はようやく理解する。つまり、愁兎が大槻さんと付き合いだしたから気が立ってるのか。

「あら？ 愁兎、大槻と帰らなくていいのか？ というか遊びに行ったりしないのか？」

「ああ、大丈夫だ。大槻とはクラスで話してるし、大槻だって部活だからな」

そう語る愁兎は嬉しそうだった。これが竜児をダークサイドに落とすのか。

「それに姉貴だって好きだしな！」

「き、気持ち悪い！」

そういう部長も嫌そうではなかった。……………本当の反応としてはおかしいのだが。

「早速不倫ですか。流石にやばくないですか？」

水原は宿題から顔を上げてそう言った。

「なあっ！？ そんな人聞きの悪いこというなよっ、なんかすげえ悪い奴みたいじゃん！」

「ふふふふ……………悪い奴、でしょう？」

水原は謎の笑みを浮かべる。表面上に少しだけだが。

「な、なんか怖いな……………ってなんで竜児は泣いてんの？」

「それはそつとしておいてあげて。愁兎が話し掛けちゃ駄目だよ」

「うん……………意味が分かった」

最近愁兎はいろいろなところで成長したと思う。俺が言うのもなんだけど。

本当にそう思うのだ。強くなった、んだと思う。

「うお、……………寒いな。窓閉めよ」

部長が体を震わせてそう言った。そういえばもう秋だな……………。

「秋……………か」

「うん？ どうしたハル」

「いや、この間クーラーをゲットしたって言うのにもう使わないなあって思ってた」

「な、……………確かにそうだ。しかし、私たちには部費がある。これで暖房を買うもよし！」

「いきなりの出費ですね」

「そのお金で夜通し飲み尽くせー、そして一文無しになれ……………と鳴川春希の心が言ってます」

「言ってるねえ！　　とか心覗けるのか!？」

そんな会話をしている間も竜児は悲しみから復活しなかった。

「さて、最近は何にやら忙しかったからな。依頼箱の中身を確認しよう」

そういつて依頼箱の裏面を開き、中身を取り出す。

ゴミ、ゴミ、ゴミ……………手紙……………ゴミゴミゴミ……………

「ふざ、ける、なああああああつ!」

部長がキレた!？」

「お、落ち着いてください部長!　手紙入ってますから!」

「ふう……………む?　超能力研究会?」

また胡散臭いのが出てきてしまった。つつかハズレを引いた。

「こんな部活まで存在することを認められているのか……………正直この学校にはびっくりだ」

素直な感想を述べてみる。しかし、賛同するものは少ない。

「そつだよなあ……………超能力なんてあるの?」

と愁兎。

竜児はまだ隅の方で丸くなっている。

「そつか?　なかなか楽しそうな部活だと思うぞ?　行ってみるの

も悪くはないかも……」

「昼休みによく、グラウンドでUFO呼んでますよね」

危ない香りがぶんぶんする。というか異常者の集まりでしかないと思っただが！

「ちなみに一度やりすぎた行為で、部停くらったことがあるみたいですよ」

「なかなかエキサイティングな部活だな……… ってそこじゃないだろ!？」

「……… おお、ハルがノリ突込みを」

「止めてください部長。何気に恥ずかしいです」

久しぶりにミスった感が………。

「とりあえず行ってみないことには始まらないだろ。依頼なんだし」

「これは作者のネタが尽きたと見るべきでしょうか。適当に流すつもりでしょうね」

「水原………？なんの話をしているんだ？」

「この世の在り方についてですよ」

相変わらず水原は何考えているか分からなかったが、何故かすぐに気にならなくなった。

隅で丸まっている童児を引っ張り出して、超能力研究会へと向かうのであった。

「そう、この世の中に超能力と言うものは存在する。そもそも超能力とは何か。それはこの世界に意識をアクセスし、世界的な自然現象、この世の定理を捻じ曲げて新たな現象を引き起こすことだ。数字で表すことの出来ないもの、漠然的な何かでとらえるしかない。それはどこか愛に似たところがある。我々の考えでは、愛も超能力

の一種ではないかと考えている。無意識のうちにこの世界にアクセスする。当然、相手も思うことで愛というものが存在するというのであれば、その想いは二重となり、シンクロする。そう、完璧なる謎。今回の議題はこれで決定か？」

部室に入るなり理解不能な思想について聞かされた。

超能力研究会は屋上にあるいくつかのプレハブの一つを部室として
いる。

広さは、教室の半分程度。カーテンは黒く、閉め切っているおかげで室内は暗い。もちろん電気をつけているわけでもないので、光源となるのは超能力研究会部長と思われる人の目の前に置かれたパソコンのみだ。

部員、わずか4名。しかもその中に女子がいたことが驚きだ。

「お、おい……………何を話しているのか理解不能なんだが。依頼の内容は一体なんなのだ？」

部長が冷や汗をかきながら聞いた。

超能力研究会部長は眼鏡をクイツと押し上げ、レンズの奥で目を鋭く光らせた。

ぞわっ……………と背中に寒気が走る。なんだこれは……………。

「そうですね……………あなた方の魔力を借りたいと言ったらどうしますか？」

室内が静まり返る。冗談ではない、こいつは本気で言っている。

「この人はイカれているのですか？ 堕眼鏡さんは」

この雰囲気の中でも水原は容赦なかった。

「ふうん……………なかなか面白い子がいるんだね。ぜひ僕のものにした
い」

ぞわわわわわわっ！ と鳥肌が立つ。自分に向けられたものではないと解つていても立ってしまったのだから本人、水原はさらに酷い
だろう。

「な、ななな、なんなんだよ、お前らは！ 冷やかしか？ 救部を
冷やかしたのか？」

部長が空気に耐えかねて早口になった。

水原は固まったままだった。

「まあ、……………お話ししましょうか。この区域には大きな樹が立っている公園があるでしょう？そこで精霊を呼び出そうってのが僕達の今回の議題です」

先ほどまでの愛とかナント力の話し合いはなんだったのだろう、と思っただが突っ込まないでいた。

「それで？」

部長はだんだんいつもの調子を取り戻していた。

「だから、力を貸して欲しいんですよ。力を……………ああ、自己紹介ってまだでしたっけ。三鍵^{みかき} 熔^{よう}です。」

「あ、ああ？」

繋がりのない変則的な会話に部長がたじろぐ。

なんか、謎だな。三鍵 熔……………。

それが救部全員の彼に対しての第一印象だった。

36話 精霊

「公園、か」

大きな木が立った公園。普段来ることの無い家とは反対方向のこの場所、秋の近づいた夕暮れ時なので子供達は遊びまわっていない。確かに少し肌寒いような気もする。

「この木に精霊が宿ってるはずなんです。早速儀式を始めましょう」
初っ端からアクセル全開の三鍵に救部のみんなはついていけない。
その間、超能力研究会の部員達は木の周りに塩を撒いたり、読めない文字の書かれた札などを張る。

「ぶ、部長。もはや意味わからないんですけど。どうすればいいんですか」

「そ、そんなこと私に聞くな！ 私だって混乱しているんだ」
愁兎は大槻さんと帰ってしまったし、闇討ちするとかなんとかで竜児は飛び出していったし、水原は無表情でそれらを眺めているだけだし……………。

「さ、準備は完了した。後は待つのみ」
そう言っただけでジャングルジムの方へ歩き出す三鍵。俺は部長とアイコンタクトを取って、三鍵についていった。

どうやらジャングルジムで待機するらしい……………。

「部活はよかったの？ 霧谷くん」

「ああ、なんか精霊を呼び出すとか言うよくわからん依頼だった」

「精霊？ そんな部活もあるんだ……………」

「ああ、どこかの公園の木がどうか言っただけ」

「ふーん。よくわからないや、霧谷くんはその公園知ってる？」

「一回くらいは行ったことあるかもな」
意味の無い尾行を続けている童児もこの場にいた。

三鍵 熔は精霊に逢ったことがある。それは小学生低学年の頃の話である。

この公園のジャングルジムの塗装がまだキレイだった頃、一人でよく遊んでいた。

大きな木は今と変わらずそびえ立ち、いつも自分を見下ろしていた。親は母が早くに亡くなり、父は生活費を稼ぐためにずっと仕事だった。少年のころの三鍵は毎日が淋しくて、そして退屈だった。友達と言える友達はいなかった。別にいじめにあっていたわけではない。ただ、人と関わるのがそんなに得意ではなかったのだ。それなのに退屈というのは少々言っていることに無理があったな、と今になって思う。

そんなある日のこと。いつものように公園にやってきた三鍵は木を眺めていた。なんだかいつもと違った気がするのだ。なにが違うのかは言葉に出来ないが、なにか違った。

「一人？」

不意に後ろから声をかけられた。

振り向くとそこには、すごく可愛い女の子がいた。自分と同年くらいで、髪の毛の長さが腰くらいまである。

「え、……うん」

上手く呼吸が出来なくてそれほどに可愛い、と思ったのだ。小学校にもこんな子はいなかった。

それはまるで妖精、いや精霊の類の存在のようであった。

「じゃあ、私とあそぼう？」

その子は自分の手を引き、嬉しそうに笑いかけてくれた。

彼女が笑ったたびにむず痒い感覚になった。

今思えばそれは好き、という感情だったのだろう。

もう一度逢いたかった、見るだけでも良い。

名前も知らないその精霊に、また逢いたかったのだ。これは自分の私欲だった。

だからこれは今回限り、2度は無いのだ。

名も知らない彼女と遊んだのはほんの3回程度。それでも記憶には鮮明に残っている。

その後は音も無く消えてしまった。それに何故か、彼女と遊んでいるときは他の子は公園にいないのだ。

やっぱり精霊だった、と俺は思った。

それはただの偶然だったのかもしれないが、それでも俺は精霊だとそう信じる。

「おい、三鍵。いつまでここにいるんだよ」

部長は1時間耐えて、それから三鍵に話し掛けていた。

「現れるまでだ。別にいいだろ、明日は休みなのだから」

「確かにそうだが……お前は本当に精霊なんていると思うのか？」

「いる。……いや、いてもらわなければ困る」

「……お前は何を焦っている？」

部長は何かを感じ取ったようで、レンズ奥の三鍵の目を見る。

「焦ってなどいないさ。ただ、……なんでもない」

三鍵は何かを言いかけて、止めた。

その目には今何が映っているのだろう。

「部長、水原が帰りましたけど」

「仕方ないな、冷えてきたんだ。このままでは風邪を引いてしまう」

「そんなに寒いですか？　というか、超能力研究会の部員達も帰りましたけど……」

「本当だな。……ということはこれは三鍵のための？」

部長はぶつぶつ言いながらも考え事を始めてしまう。

その間、俺はその大きな木に視線を移した。

本当に大きな木。しかしだからと言って何か他と異質なものは感じられない。ただ大きいだけだ。

三鍵は、何を待っているのだろうか。

「おい、三鍵。お前は精霊は現れるといったな？ お前はその精霊を見たことがあるのか？」

少し俯いてから、三鍵は応えた。

「ある。…………俺が子供だった頃だ」

「そうか、ならばそれは…………本当なんだろうな」

部長は詰まりながらもそう言った。

「どういうことですか部長」

「ん、ああ。精霊の正体、分かったかもしれない」

「本当ですか！？ じゃあ三鍵に…………」

「それは駄目だ。精霊、はあいつが自分で探さなければならぬ」

「探す…………？ それって…………」

日が傾き、夜が迫ってきていた。

午後9時。秋の風は肌寒く、一吹きすることに体が震え上がる。

精霊は姿をみせない。俺たちもまた、その場所から動かなかった。

寒さに震え、視界がかすむ。足も震えてきて、上手く体を動かせない。

「おい、三鍵。大丈夫か？」

「ええ、平気ですよ」

倒れるわけにはいかなかった。コレが無駄なことだとしても、信じ

ていたかった。

「ぼやあ、と人影が木の根元に見えた気がした。」

「精霊……？」

いつの間にか俺は歩き出していた。

体がまるで自分の意思とは無関係に動いているように。

意識が、朦朧とする中で俺は精霊を見た。

『大丈夫か？ ……………がある…………。……………』

何を言っているのか分からない。話を、またいつかのよう話を…
…。

そしていつかの思いを……………ここで

「ずっと、思ってた。君を」

三鍵が木の前で倒れた。それをギリギリで部長が受け止める。

顔は赤く息も荒くて、熱があるようだった。

目を閉じる瞬間、三鍵は何かを言った。

それがなんだったのかは分からない。

「部長、とりあえず連絡を！」

「落ち着けハル。こいつの携帯電話で家にかける」

「わかりました」

ケータイを開き、アドレス帳を開くと確かに三鍵家の電話番号があった。
…。

何回かコールした後、出る。

「あ、あのっ、三鍵さんのお宅ですか？ 実は」

後日談、三鍵が幼い頃に出会ったという精霊の正体は部長、霧谷小冬だった。

何でもあのあたりに昔は病院があったらしく、愁兔が入院した際に

お見舞い帰りにあの公園に寄っていたらしいのだ。

そこで何日間か遊んだのが三鍵だった、ということだ。

この話は三鍵本人にはしていない。部長曰く、自分で見つけ出せと
のことだ。

それにしても部長が絡んでいるなんて……何という偶然。

「で、さあ。なんで竜児はまた泣いてんの？」

机に突っ伏してうめき声を上げている竜児。誰も触れなかったので
あえて突っ込んでみた。

「知らん。どうせ愁鬼をつけていたら色々見せ付けられて心が折れ
たんだろ」

「そういえば尾行しに行ったって言ってたな……」

「阿呆ですね。自らダメージを受けに行くなんて愚かですね」
いつも通りに水原は毒を吐いていく。

今回もなんだかおかしな依頼だった。

「ああ、最近ロクな依頼がこないなあ……」

部長はげんなりしながらそう言うのであった。

最終話 救うための救部 (前書き)

な、最終話です。

最終話 救うための救部

「と、言うことでこの部は廃部になった」
いきなりに部長がそう言った。

救部の部室にいる部長以外の4人は固まっていた。

「えっと、言っている意味がわかんないんですけど」

こうやって実際に部室にいるのに廃部だなんて意味が分からない。
外の景色は白一面で、白銀世界だった。 まあ、要するに冬になっ
て雪が降ったってことだけなんだが。

もうすぐ冬休みが始まるんだなあ………と思っていた矢先の出来事
だった。

「いや、まあ、そのまんまの意味なんだけどな？」

「俺が聞いているのはそういうことじゃなくってですね！ 何故こ
の部が廃部になるかってことなんですよ！」

「ほらほら、ハル。そんなに切れるなよ。抱きしめてやるから」

「いいですっ、というかそれはいつかに言っていました！」

そこで文庫本サイズの本を読んでいた水原が顔を上げてこういった。
「作者がネタを思いつかなくなったから打ち切るのではないのです
か？」

室内の温度がいくら下がったような気がする。

「な、なんて物騒なことを言うんだ水原！ そんなはっちゃけた奴
はこの世界には存在しないのに！」

「部長。もうなんか言ってる意味が分かりません……………」

わかったわかった、と部長は呼吸を整えてからみんなを見渡し言っ
た。

「この部は廃部になります！ なぜなら、この私が務める部長がい
なくなりそして部活動として成り立たせられる人数が足りなくなる
からです！」

部屋の空気がよくわからないことになった。

「部長。理由を問いたいのですが？」

「よし、許そう。なんだ須川」

「何故部長が消えるのですか？」

「そうか、それはな……………留年するからだ！」

「姉貴、留学だから。留年違うから」

「はっ！愁兎に突っ込まれた……………」

あまりにもぐだぐだになりそうだったので、部長の言いたかったことをまとめると。

- 1、部長が留学する
- 2、部長そして人数が足りなくなるので救部は廃部
- 3、とりあえず今日が最後

「いや！？あまりにも急すぎるでしょ！」

「どうしたハル。キャラ変更か？」

「誰もそんなことしてません！というか、どのくらいの期間どこに行くんですか？」

「一年間、おフランスの方へ」

一年間というと、俺たちが卒業するまで。来年の春には部長はもういないということになる。

しかし、授業のほうはいいのだろうか？ 飛び級制なんてこの学校にあったかな？

「学習面は大丈夫。てんさいだから」

今日の部長はどうも力が入っていない気がするんだが。

「でも、俺は部活続けたいですよ」

「ハル……………」

場が静まり返り、空気が重くなる。

部屋の温度がまた下がったかのように感じた。

「よし、じゃあハルが部長やってそれでもって勧誘して人数集める」

「ちょ、ええつ。今、シリアスな場面じゃありませんでした!？」
「シリアスだかシリアルだか知らんけど決定だ！ 文句はないな？
みんな」

「さんせー、と適当な返事が返ってくる。
マジこいつら適当だよ……………」

「今日から廃部です。と生徒会長速吹智衣に言われてあっけなく部室の鍵は没収された。」

「よし、ハル。後は頼んだからな」

「え、部長は勧誘手伝ってくれないんですか？」

「おいおい、私はもう部長じゃないぞ？ それに今度からはお前が部長だ。なんでもお前がやらないと、な？」

「そう言っって背を向ける部長、いや霧谷 小冬。その背中は何だか寂しそうで、つい呼び止めそうになってしまった。」

「ありゃ、姉貴はいつちまうのか。まあ、これからは俺たちでやっていかなければならないからわかるんだけどもさ」

「うん、……………。とりあえず勧誘用のチラシ作製して、張って回って配って回ろう。一年生を中心にね。それと校内放送での呼びかけもしよう」

「俺が淡々と言いきったことに驚いたのか、みんなは目を丸くしていた」

「鳴川 春希……………。そんなに仕事できるキャラだったのですか？」
「なにその感想」

「伊達に霧谷 小冬の行動を見ていてたわけではない。俺だって学ぶ取るものはあった。」

「それに、前部長ならこうすると思ったから。」

「よし、じゃあチラシ製作と貼る担当は僕がやるよ。パソコン使えば楽勝だからね」

竜児が自ら役を買って出くれた。それに続いて水原も言う。

「では、私が校内放送を担当しましょう。台本を作るのには自信があります。私の残した成績を忘れたわけではないでしょう?」

そう言えば水原は演劇部がインフルエンザ状態のときに頑張っていた。

「じゃ、残った俺はビラ配りアンド勧誘だな」

愁兎はニカツと笑って見せた。

俺には支えてくれる仲間がいた。一人ではなかった。

なんだか心が満たされた気分だった。

突然の霧谷 小冬の留学は明後日に迫った。俺はそれまでにどうにか部を再活動させて安心させて送り出したいと考えていた。

しかし、現実にはそううまくいかず入部する人は一人もいなかった。部室が閉鎖されたので、霧谷 小冬を除く救部のメンバーは中庭に集まっていた。

「やれることはやったけどな………なかなか来ないな」

みんなの本心を愁兎が代弁した。

そう、みんなそう思っているのだ。

「僕のポスターは何かいけなかったかなあ」

竜児も珍しく、まともにポスターを作成しチラシも作った。それほど真剣だったのだ。

「校内放送は、昼休みだけではだめなのでしょうか?」

水原も毎日の昼休みに放送をしてきている。

ちなみに、霧谷 小冬は学校にはきていない。留学のための準備をしているのだ。

なんとか、明後日までには間に合わせたかった。

次の日、一向に朗報はなく、時間だけが過ぎて行っていた。

一同は不安を見せる。それでも毎日呼びかける。正直言つて、部活動はいくらでも作れるのでわざわざある部活に入る必要はないのだ。部活をしたいのなら作ればいい、とそういう学校なのだ。不安は増していくばかりであった。

霧谷小冬の旅立つ日、当日がついにやってきてしまっていた。出発は午後6時。空港まで行くのに1時間はかかるので、5時までには人を一人でも集めなければいけない。つらい作業だ。

朝からの呼びかけ。昼の放送。ことごとく時間は過ぎてゆく。その姿を眺める一人の男がいた。

「あーっ！ もう、なんであつまんねんだよっ！」
愁兔が荒れていた。みんな気持ちは同じだった。

「今は………4時ですね。続けられたとしてもぎりぎりあと1時間ですね」

焦りを隠しきれないように水原は言う。
気温も下がってきている。

寒い、なにせ雪が降って来ているのだから。
残り一時間、ついに最終手段へと投じる。

「なんとかお願いします。部活を続けさせてください！」
無機質な床が目に入る。頭を下げているのだ。

「そんなこといわれでもですね規則は規則ですし」
歯切れ悪そうに生徒会長速吹智衣は言う。仕方ない、と。

「そこをなんとか頼むよ！ 生徒会長さんよ、姉貴のためだと思ってさ！」

愁兔も交渉に加わる。

しかしうまくいきそうにはなかった。

規則である、と言われてしまえばそこまでなのだ。

時計を見やると、5時であった。

「鳴川 春希、時間です。前部長さんを見送りに行きましょう。仕方ないです」

水原は声を絞り出して言った。

「だめか、とそうあきらめかけたとき。勢いよく生徒会室のドアが開かれた。」

「おれが、救部に入ろう」

そのゆっくりとした動作。タイムスリップしたかのように思わせるその雰囲気。

長武 土幸。かの剣道部の部長であった。

「あなたは剣道部のはずでは」

「ふん、この学校に兼部はしてはいけないという校則はなかったはずだ。俺は救部と剣道部を兼部する。」

「それは……。それなら」

生徒会長は部室の鍵と、部活動開始許可証を渡してきた。

「はやくいきなさい」

その目はいつもより温かかった気がする。

「ふん………」

「ありがとう長武さん！ お礼はいつかにでも！」

受け取った大事なものを握りしめて走り出す。

「今ならまだ間に合います。車を手配してあります」

水原は走りながら言う。

「ナイスだ！ 流石としかいいようがないな！」

4人は走る。大事なものを持って大事な人を見送りに。

去って行った背中を眺め、長武 土幸は呟く。

「お礼か……。そんなものはいらんよ、助けてもらったのはこちらなのだからな」
その様子を見て、速吹智衣は少し微笑むのであった。

小説から顔を上げ時間を確認する。自分はこれから外国へ行く。別に変な緊張感もないし、違和感もない。

ただ頭に浮かぶのはどんな面白いことが待っているのか、だった。しかし、今の自分には他の考え事もあった。それは日本に残していく救部のメンバーのことだ。

自分が引つ張ってきたといっても過言ではないくらいだった。そんな自分がいなくなつて大丈夫なのかと考えてしまう。部長を八ルに任せただけ。

同じ高校生なのにそんな考えを抱くのはおかしいことだろうか。いや、自分はいつの間にか愛していたのだ。それが、ただ心配になつただけ。

言い訳に自分が引つ張ってきただけの自分がいなければ何も出来ないのだと言っているだけだ。
心の底では離れるのは嫌なのだ。

もうそろそろフライトの時間である。飛行機に乗り込もうと立ち上がり周りを見渡す。
あいつらは来ていない。

別れ際は会わないほうがいいのかもしれない。心が揺らいでしまうから。
顔を崩さないように、唇をかみしめて乗り場へと向かおうとする。
その時。

「部長！」

とある少年の声が聞こえた。いつもの確に突っ込んでくれる少年だ。

「部長は、君だつて言っただろ？」

振り向いた。そして驚いた。

部室の鍵と部活動開始許可証を持っていた。

1週間程度しか時間はなかったはずだ。それなのに、それなのに。

「ハル、それ……」

「やりました！ やってやりましたよ！ 部長」

「っ……」

苦笑するしかなかった。

いや、詰まった笑いしか出なかった。すごい。

それだけだ。

「帰ってくる場所、ちゃんとありますから。しっかり行ってきてください！」

最後はいつだったか、こんなにうれしい気分になったのは。

ほんとうにうれしくてうれしくて仕方なかった。

泣くことは、許されなかった。

「あつ、あ、姉貴い……。いつでらっしゃいい」

うちの馬鹿な弟はもう泣いていた。たかが1年会えないというだけで。

自分が言えることではないのだが……。

「大槻を、大事にな」

「部長、いや。霧谷小冬さん。僕は……。あなたのおかげで」

「

須川竜児は口を閉ざし閉ざし言った。

「それはもう言わない約束、だ。須川、これからも頼む」

須川にはもっともつと馬鹿やつてもらわないといけない。

ムードメーカーなのだから。

「前部長さん。私はあなたを尊敬してます。それからですよ、だからくれぐれも海外で目立たないようにしてください」

これは水原なりの言葉なのだ。長年付き合っているとわかるものだ。

「ふ、帰ってきたときはまた可愛がってあげるからな」

「いつてらっしやい」

1年後。

「依頼が来ない」

「うお、ハル。姉貴みたいになってるからな！　なんかこええよ、変わり映えのしない部室でみんなはまったりと過ごしていた。

足りないのは部長のみ。いや、霧谷小冬というべきか。

「うおーい！　依頼箱に1通だけ来てたぞ！」

騒がしく竜児が部室に転がりこんできた。

「よし、マジナイス」

その手紙を開いてみる。

『とりえず出迎えてくれると助かるかな』

「どついう意味だ？」

愁兎が真っ先に疑問を訴えた。

誰もが静まり返る。

「え、え？ 俺なんか言ったか？ 空気読めてなかった！？」
そんな愁兔の様子が面白く、少し吹き出してしまった。
それは、後の3人も同じことだった。

この部室にはやはり5人そろっていてこそなのだ。
5人そろって救部なのだ。

開いたドアから冬の寒さが舞い込んできた。しかしそれは室内の温かい温度によって中和されたのだった。

最終話 救うための救部 (後書き)

はい、ということできゅうぶ最終話となりました。

最後は無理やり詰め込んだ感がありました……そこは、はい。

まだまだ書きたい話はありませんが、ぐっと押えました。

これはまた案が煮詰まっただけからリメイクとして出そうと思っています。

きゅうぶが終わったことにより、新たな新作を出すかもしれません！

それでは、最後まで読んでくれた方、ありがとうございました！

そして、次回作に期待してください！

また読んでくれることを願っています@

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6104h/>

救部 きゅーぶ！

2010年10月15日00時15分発行